
東方空狐道

しらたま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方空狐道

【Nコード】

N3229Y

【作者名】

しらたま

【あらすじ】

ぽっくり逝って畜生道。肉球ぶにぶにの前足では何もできないので狐っ娘になってみました。なにそれこわい。

注：最強？ ハッ…（失笑）な方は回れ右をオススメします。 注：当作品は東方二次創作作品でございますが、オリ要素を多分に含むと思われます。 注：兎の如く怠ける鈍亀更新です。

導入なんてこんなもん（前書き）

ぬるいものが書いてみたくなったのでやってみました。何番煎じかもう全く分かりませんが、先達の皆様に乗乗という形になるかもしれません。きつとのんびりいきます。

皆様の本命の小説の片手間程度によかったらどうぞ。

導入なんてこんなもん

「おい流、今日S高の連中んとこにカチコミに行くんだけどよ、お前も行かねえ？」

髪をくすんだ金に染め学生服を着流している不良風の男子生徒が、帰る支度をしていた一人の男子生徒に話しかけた。

帰り支度をしているのは、留見^{とこみ}流^{ながる}。周りには変人と呼ばれているが不思議と嫌われない、ある意味浮いている人物だった。声も容姿も中性的で、学生服を着ていなければ初見で彼を男と断定できるものは少ない。

「んー？ …今日は気が乗らないからやめとくわー」

「おっ前相変わらずだなあ。お前、前もあその連中ぼこったんじやなかったか？」

「人聞き悪いな。知りあいがかつあげされてたから、懇切丁寧に説得して帰ってもらっただけなんだが…」

なよなよした容姿ながら、流は非常に腕が立つた。小さい時から彼が貪欲に力を求めた結果である。何故それほど強くなるうとするのかを彼に問えば、彼はいつもこう返した。『何事も、自分の思い通りになった方がいいだろ？』。

力至上主義者。その答えを聞いたものはみなそう考える。

流も、それは否定しなかった。力があれば何でも出来る、そこまでは思っていないかったが、あつた方がやれることは多い。彼は常々そう考えていた。

「関節外しが懇切丁寧かよ。お前の場合ちゃんとはめていくからむしろ性質わりいよな。変にお人よしなのによお」

「お人よしなあ。俺は視界に写しといて知らん振りするのが寝覚め悪いだけなんだけどな」

「そついうのがお人よしなんだよ…なんで俺、お前とそこそこの付き合いつてんだろつな。ま、お前を嫌つてゐるやつなんてあんまいねえよな。何でだ？」

「俺に聞かれてもな。みんな俺に癒しを求めてるんじゃないか？」

「だははははははっ！ どの口で言つてんだよ！ ま、俺はもう行くぜ」

「はいよ、氣いつけてな」

「おう。じゃーな」

何の変哲もない日常。俺はいつもどおり帰路につく。

非日常なんてものは俺の日常はない。

喧嘩に誘われたのは非日常ではないのか？ 答えはNO、頻繁ではないがわりと日常的なものだ。今回は俺が出ていけばパワーバランスが崩れそうなので遠慮させてもらった。分が悪そうであれば友人のよしみで参加してみたりするのだが、今のところは無敗である。そもそもうちの高校とS高の仲はそれほど険悪ではない。無論いいわけではないが、今日のような衝突はまああることだ。

ある意味小戦争をして日頃の憂さを晴らすといったところか。ルーなど欠片もないがそこには暗黙の了解のようなものがあつた。全体の勝敗などはあつてなきようなもので、双方の数がある程度まで減れば自然に収束しめいめいに去ってゆくのだ。

俺の力は彼らの間で無闇にふるってよいものではないと思う。少々ベクトルが違うのだ。いうならばアマチュア戦に空気も読まずプロが入っていったって優勝するようなものか。たまの参加でもやるのは何の細工もない殴りあいでは武術は使わない。

一般家庭に生まれ、普通に育てられ、こうして普通の学校に通っている。だが、俺は『変人』と呼ばれるようなものに育ってしまった。それでも大衆に排斥されないのは、俺が処世術に長けているせいだろう。俺のようなものはある意味異端となるのだろうか？

実のところ、俺の根本にある特性は『臆病』だ。何かに害されることに怯えながら、だからこそ貪欲なほどに力を求め、自らを守る術を身につけた。他人の顔を読み心を読み人間関係におけるあらゆる軋轢を避けてきた。常に強い自分をイメージし、仮面どころか着ぐるみを着込み臆病な自分を知られないように隠している。…今ではどちらが本当なのかは分からなくなってしまった。何せ俺の心は何にも震えなくなってしまったのだから。起伏が少なくなつた、と言ひ換えるべきか。喜怒哀楽の感情こそあれど、それらも自分の演技なのかどうか分からないほど希薄だった。『不動の心』などと言えば聞こえはいいが、プラス方向の高揚感などすら俺は忘れてしまっている。

だから俺は求めているような気がする。俺の全てを揺るがすような非日常を、だ。

——だから死後の世界などというものを知った俺は罰当たりにも喜んでしまったのだ。きつところは、俺の知る日常なんてなくて非日常に溢れているのだと。

もう、日常には戻れない。そんな事実も飲み込んで。だから俺はせめて俺の日常にあった人たちに謝った。こんな人間味に欠けた人間でごめんなさいと。

「地獄行きじゃ！」

目の前の、でつかいいかつい男が俺にそう言った。『閻魔様』だと、彼は名乗っているが、自分で『様』とかどうかと思うよ。

親より先に死んだのに、賽の河原なんてものはなかった。いや、というより十四歳以上なら関係のない事らしい。好きで死んだわけでもないのに、流石に十三歳以下で死んでしまった子供が可哀想に思えた。

しかし、地獄行きとはどうやら俺は悪行を積んでいたらしい。はて、自覚は無かったのだが。

『閻魔様』が手に持っているこれまたどでかいハンマーのようなものをガツンと机に振り下ろすと、ぱかっとな俺の足元の地面が開き俺はまっさかさまに落ちていった。

そもそも何故俺が死んでしまったのかといえば…特に特筆することでもない。この落ちている時間のうちにはぱつと終わる程度のことだ。

貯金を下ろそうと銀行に何も考えずに入ったが運の尽き。どうやらかなりてんばっているらしい銀行強盗が銃を振り回して銀行員を脅していたようだが、そこにこのこと自動扉を開けて入ってきた俺は半ば錯乱状態の銀行強盗に頭を打ち抜かれた。

人間は頑丈なくせに妙に簡単に死んでしまう。今回は鉛玉だったので頑丈もくそもないが、とにかく俺はあっさりと死んでしまったのだ。

どん

しばしの空中落下を楽しんだあと、俺は足をクッションに不毛の大地へと降り立った。すごい音がしたが、別に足が折れたとかそういうことはなく無傷である。なにやら生前より身体がずっと軽く、ずいぶん強くなっているような気がする。死んだからだろうか。いやわけ分からん。

俺の降り立った地獄とやらは、真っ暗なのに妙に蒸し暑い。地の底から響くような叫び声もどこからか聞こえてきてかなり気味が悪かった。

「がははっ新入りか！　ここ、地獄で自分の罪を悔いると良いわ！」

太陽の無い空をなんとなく眺めていると、ぞろぞろと鬼がやってきた。鬼と分かったのは角があるからだ。いや、彼らが鬼と自己申告はしてないから（仮）になるのだけど。赤とか青とかそんなことはなくて、灰色？茶色？よく分からないがそれ系の濃い肌の色をしている。悪い意味でこの地獄にマッチしているのではないだろうか？

因みに彼らはかなりマッチョだ。その肉体美が身体の細い俺にはとても眩しい。

しかし見に覚えの無い罪を悔いると言われても実感が湧かない。折角なので、抵抗させてもらおう。鬼と戦うのも、なかなか乙なものだ。いやむしろ楽しいかもしれない。

「はっ、連れて行きたきゃ力づくできな！」

「亡者風情が生意気な！」

ほああ！ 棘つき棍棒なんて、ずるい。

「閻魔様、閻魔様！」

「なんじゃ騒々しい。何かあったのか」

「あの、地獄に落とした魂のうちでミスのあるものがあったのです。『輪廻の環』の修行中で、次の転生を終えた後に神霊に昇格するはずの魂なんです。確か今世の名は『留見 流』だったかと…」

「な、何じゃと！ 確かにそのような者を地獄に落としたはず…いや、ちよっと待つんじゃない！ 書類には確か地獄行きとあったはず…」

「…それはもう何百年も前のものですよ！ 毎度毎度机の上を片付けて書類を整理するように言ってるでしょうが！ 『ワシには分かるから問題ない』ってこんなことになるからいちいち注意してたっていうのに！」

「な、なんということだ…どどどうすれば…そういえば、その地獄に墮としてしまった流とかいうものは何をしているのだ…」

「現在、地獄巡りをしております…」

獄卒の鬼をばこぼこにした後意気投合し、あらゆる地獄を体験している真つ最中です。既に大焦熱地獄、黒沙地獄、無間地獄、等活地獄、大叫喚地獄を踏破されました…」

「馬鹿な！ 人間程度の剥き身の魂が耐えられるものか！ 消滅してしまうに決まっております！ そもそもあやつを地獄に送ってそれほど時間は経っておりますぞ！」

「『地獄』では個人の主観においての時間の概念なんて無きにしに有らずですよ。外界にとつての一秒が本人にとつての千年に匹敵することもあるのですから。…それにあの者の霊格は桁外れです。そんな強靱な魂が肉体に阻まれず剥き身のままでいるからこそあらゆる地獄を耐えうるのですよ。そもそも、修行の初期段階としてこの魂は数百年前の時点で地獄巡りを終えています」

「ぐ、ぐ、ぐ、そんな者を間違いで地獄に落としてしまったことが知られれば…ぐぐぐ…」

「ど、どういたしましょう」

「…その男をよべ。こうなったら太古の畜生道に転生させる！ 書類には『輪廻の環』に耐えきれず魂が消滅してしまったとしてもしておけばよい！」

「そ、そんな！ 神霊一步手前の魂を畜生道に堕とすのはまずいですよ！ あの男はむしろ神仏になるはずの魂なのですよ！ それを罪人道の畜生道へ！ それにあれほどの霊格のモノを、畜生道といえどつかつに下界にやればどうなるか…」

「黙れ。お前にも、家族はいるだろう？ あまり、心配させたくはないのではないか？」

「そ、それは…分かりました。あの男をよびます…」

なんか地獄制覇して次は何しようかと鬼達と話していたら呼び出された。…そういえばそもそも何で地獄巡りしようとしたんだっけ。暇してたら、鬼達に勧められたからだっか。は、もしかして俺鬼に乗せられた？ いや、狂気と正気の狭間は得難い経験でしたが。いやはや苦痛と苦悩と苦難で幾度も俺の精神が消し飛びかけました。ナニカ。そんな刺激が止められない止まらない。あ、俺はMな人じゃないよ。

いやいや、今はこっちが重要か。

「お前は未開時代の畜生道行きじゃ！」

何故に。

目の前にはまたあのでかいかつい男。男は手に持つ槌をふってそう叫んだ。

なんか悪化してるし。あれだろうか、俺が地獄をアトラクションにしたのが癪に障ったのだろうか。折角だから鬼と酒を酌み交わしたかったんだが。そういえば釜茹で地獄がなかったなあ。なんだか温泉に入りたくなってきた。

それはともかく問答無用で畜生道も納得がいかないので、とりあえず理由を聞いてみる事にする。

「あのー。俺の罪状ってなんなんですか？」

「黙れ黙れ！ 罪人が惚けるでないわ！ さっさと行ってしまえ！」

ぱかっ

納得いかないなあ。まあ何かあればいいんだけどなあ。

キュー キュー

次に意識を覚醒させた俺が最初に聞いたのはそんな鳴き声だった。そして目を開けて最初に見たのは白くて大きい、二本の尻尾を持つ狐だった。

なにこれすごい。

導入なんてこんなもん（後書き）

こんな感じに時間、場面はブイブイ進みます。きっと次回は狐っ娘
になっていることでしょうね。多分。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…（前書き）

一話だけじゃ良く分かったので急遽書き上げて二話目です。時間軸が飛び飛びですが、早く進めたかったのでごらんの有様です。

文章ばかりですが、なにぶん主人公一人ですので会話ありません。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…

昔々大昔に狐に生まれて早七百年。正直もう生物として長生きつてレベルじゃないぜ。二尾の白狐の母を見て仰天したのも今では懐かしい。

そもそも母含めて兄弟達とともにいたのは生まれて一年程度だった。みな早々に巣立ちをすませ散り散りにどこぞへと去っていったのだ。母狐ですら『夫捜す』的な事を言っただけで巣から出て行ったのだからこの時代の狐はまあずいぶんとアグレッシブだと思ったものだ。

実際、俺の知る現代と比べると狐に限らずこの時代に生きる生き物はどれも強かった。俺とて別に肉球パンチで戦うわけではないが、生体エネルギー？的なものを丸めてぽんぽん外敵に放り投げそのうちに逃げ出すといった風に生き延びてきたくらいだ。

それに異形の者を見ることがもままあった。巨大な蜘蛛であったり、ぬめぬめした蛇のようなものだったり、足がいっぱい生えているのに胴体がどこにあるか分からない謎生物だったり正直俺の知っていた世界とはまるで違う。

まあとはいっても俺もその化け物連中とある意味同類なわけでした。

母狐が二尾だったので、俺は母狐がいわゆる妖狐ではないかと考えていた。ちなみに生まれた当初の俺の尻尾は一本である。あたりまえだが。それはともかく、妖狐ならばもしかして人間に化けられるんじゃないかと俺は考えたわけだ。何せ獣の前足でできることなどたかが知れている。俺は以前のような便利な両手が欲しかったのだ。

が、この世界で百年を過ぎたあたりで俺はほとんど諦めていた。狐

の身でありながらこれだけ長生きするのも驚くべきことであつたが、しかし百歳になつても俺は一尾のままだったのだ。その上身体は1m足らずで、大して成長もしていない。母狐は少なくとも全長2mはあつたのに。そもそも尻尾が増える事はともかく人型になれることには微塵の保証がないのだ。長らく生きてきたが、人型の生き物は今のところうほ言つてるけどとりあえず二足歩行はしている猿八割人二割のものしか見た事はない。案の定意思疎通ははかれなかつた。というか食べられそうになつたし。原始人(?)こわい。

そんなこんなでさらに数百年は各地を転々としながら細々と生きながらえていたのだが、転機が来たのは五百年目のことだった。

その日は、朝起きてからとにかく違和感しかなかった。風景がいつもと違つて見えたり、動きにくかつたりとそんな感覚を意識しながらとりあえず俺は四肢に力を込めた。

そこでようやく気づいたのだ。自分に手足があることに。五百年ごしの人間の身体だったために違和感を感じるとは、ずいぶん狐の身体に慣れてしまったものだ。

ぶるぶると生まれたての小鹿のように足をふるわせながら立ち上がり、俺は自分の身体をよく観察してみると、身長140cmほどの少女、幼女?になっていた。…今更女になつてゐることは驚かない。そもそも狐に生まれたときから雌というカテゴリだったのだから。そして雌であることに違和感を感じる前に狐であることに違和感を感じていたため、いつの間にか自身が雌であることには慣れてしまつていた。まあついてるかついてないか程度の差だったわけで。人型になつた後もそれはあまり変わらない。

人型になつた俺の身体は狐状態だったとき同様非常に小さい。狐だったときよりも大きいは大きいが人間の中如果说ば小さい部類に入るだろう。

狐状態の俺の体毛は白だ。別にキタキツネだとかそういうわけじゃない。森の中でまるでカモフラージュできないその身体に頭を抱えたのは一度や二度ではなかったが。それはともかく人型になった今もそれは変わらず、真っ白な髪に真っ白な肌となっていた。また頭には真っ白な狐耳があり、腰には二本の尻尾があった。二尾になるまで五百年かかるとかどんだけーとか思った俺は悪くない。

ところであまりの衝撃にスルーしていたが、人型になった俺はなぜか服を着ていた。今まで狐として裸一貫で過ごしてはいたもののこうして体毛のないすべすべの身体になった今では服がある事は非常に助かる。しかしなんでこうなったのが全く分からない。結局突然人型になったこと以上に不毛だったので考える事は止めてしまっただが。

袖や裾で広がっているずいぶんとゆったりとした単純なつくりの白い着物、といったふうなデザインなのだが、妙に身体には馴染んでいた。それこそ狐だった頃のあることがもはや自然だった体毛のようにだ。つまるところ、これはその代わりのようなものなのだろう。

その後二本足では歩きなれない、というか歩き方を忘れてしまった俺はふらふらしながら近くにあった泉へと向かった。逃走手段として生存本能の賜物かいつのまにか空を飛べるようになっていたが、今回は徒歩を選んだ。早いうちに身体に慣れる必要があったのだ。さもなければミミズやらアリやらに食べられてしまう。無論魔改造的なミミズやアリだが。五百年と比べてずいぶんと力の増した俺だったが、この身体がどれほど使えるか分からないような状態ではどうにもならないのがこの世界の法則だ。

水面を覗きこんでみると、表情に乏しいが、狐の時とは違う丸い瞳孔の金色の瞳を持つ掛け値なしの真っ白な美少女がこちらを見てい

た。ぺたぺたと顔を触つてみると、水面に映った少女も華奢な手を顔に当てていた。どうやらこれが俺らしい。

ちなみに表情を変えてみようとかぐにぐに口やら頬やらをいじつてみたが、ほとんど無表情なままだった。どうやら俺は表情筋の使い方も忘れてしまったらしい。

さて話は戻るが、人型になったことを契機に俺はこれまで定住地を捜していた。人型になった俺の身体が相当ハイスペックである事を知ったためだ。ここ二百年は逃げる事を止め負け知らずである。もう住まいを転々とする必要はない。

五百歳になってから二百年、いい場所を見つけたのはそんな時だった。

俺は人型になったことをいいことに、行く先々で畑を作っていた。食は暇を潰す重要なファクターのひとつだったためこれは外せなかった。そしてそれに最適な場所をようやく見つけたのだ。

俺は畑のそばに小さな小屋を建ててそこに住む事にした。

畑には今まで集めてきた様々な植物が植わってある。にんじんみたいな大根だったり、植木みたいなブロッコリーだったり、毒のあるピーマンだったりもどきの類がかなり多いが、それでも俺は満足だった。

さて、ようやく安定した生活に入った俺は太古に生まれてほとんど諦めていたことに着手することにした。

そう、『S a k e』だ。

俺は人間だった頃酒が好きだった。

未成年ではあったが、隠れてよく飲んだものだ。初めての出会いは、酔拳を試みたときだった。いやいや、あの頃の俺はまだまだ若かつ

た。無論酔ったところで酔拳が出来るわけではないのでそちらは失敗したものの、俺にはそれ以上の収穫というか出会いがあったわけだが。

幸い、以前各地を放浪していたときに稲を見つけていたので、原料は何とかなる。…そういえば日本に野生の稲なんてあっただろうか。いや、元の世界を基準に考えても仕方ないか。そもそも諸説はあっても事実なんて現代には残っていないし。

稲の量産に二十五年、とりあえず飲めるものができるまで八十年。あくまで『飲めるモノ』↓『液状のナニカ』であり、正直言って不味い、不味すぎる代物だった。むしろほとんど何も知らずにここまで来れた俺を褒めてやりたいくらいだったが。時間がいくらでもあることは幸いだった。酵母菌の用意に特に苦労したのもいい思い出だ。

その手法を主軸に、結局妥協できるものが造れるようになったのは三百年後のことだった。その頃には俺の尻尾は三本になっていたが、それもおまけのようなものだ。俺の知る時代のものには未だまるで敵わないものの、長い時をかけてようやく作り上げたという達成感とはたまらないものだった。

ところで、さりげなく毒ピーマンとやらがあっただが、俺には毒は効かなかったりする。それは俺自身の持つ能力のせいだ。

『式を司る程度の能力』

生まれた時から、俺はこの能力の存在には気づいていた。が、俺は大して役に立たないものだと考えていた。能力の特性が数字の類には滅法強く、円周率など億単位で小数点以下が出せるが、正直野生

に生きる俺には意味がない。他に冠婚葬祭司ってどうすんねん、神職でもするんかいなとかやさぐれていたが、この能力の便利さに気づいたのは落ちていた木の実を広い食いしてしまった時だった。

小さい林檎のようなその木の実は実のところ非常に毒性の高いもので、特定の動物しか食べられないようになっていた。しかし、俺はそれをつかつにも口にしてしまったのだ。が、俺が毒に苦しむ事はなかった。食べた途端その毒の化学式が頭に浮かび、同時にそれを無害なようにばらばらにしてしまったのだ。なんらかの化学反応を生じたわけではなく、超上の力で無理やりいだ。

それから、今までは大して調べようとはしなかった能力頻繁に試してみるようになった。基本的には数式を解く時などに自動的に発動しているようになっていたが、化学式を操ったように意識的に使うこともできる。

空気中の分子式がいじれる事を知った時は特に驚いたものだ。同時に反則すぎる能力にも呆れたが。これで地球温暖化も解決だあとか思ってみたが、今はまだ手元の式しか操れないのでやってみたところで焼け石に水だ。そもそもそんな世界的問題もずいぶんと先の事のことだ。

今は爪の先ほどのフラーレンを作ってみたり、石を放り投げてあらゆる障害に至るまで計算しつつし落ちてくるまでの時間を誤差なく割り出してみるとか地味な使い方しかしていないが、未来ではとてつもなく使える能力となるだろう。特にネットワークでも発達すれば俺の独壇場だ。定められている一定の方式でつくられた世界は俺にとって鴨もいいところだろう。

そんな事を考えながら、また何年も酒造りや農業、能力開発にいそしむのだった。

俺の知らないことはまだまだいくらでもある。能力同様幼い頃から知覚していた生体エネルギーのことも未だによく分らない。結局俺だけでは説明させることはできなかった。俺が俺にとっての武器であり生命線であるこれの正体を知ったのは、それから千年ほど経った頃。狐になってできた初めての友人に教えられたのだった。

畜生道なめんな おや…？狐の様子が…（後書き）

いつになるかは分かりませんが三話目は他キャラ登場ですね。原作キャラじゃありません。えー。んはもっと先だったりします。びっくり。

色々と 違う気がする 日本神話（前書き）

また投稿です。はじめは縛りが少ないのでわりと書けるんですけど…

作中ではまた時間が飛びました。こんな飛び飛びで、大丈夫でしょうか。

また、今回からオリ設定がやってきました。さらに話を作るために日本神話まで蹂躪してます。ひらにー

色々　　違う気がする　　日本神話

俺の尻尾が丁度五本になったところ、二千歳になったところだ。正直この世界に来てからは時間感覚がおかしい。というより多分地獄にいたせいで元々おかしかったのがさらにおかしくなったような…まあいいや。正直一年なんてそれこそ『あつ』と言うまで、人間の頃の間で言えば千年が三年程度のものだ。特に何の代わり映えもしない毎日で、自分の中でかなり画一化されているのかもしれない。そろそろ変化が欲しいなあ…

そんなわけで俺はその日も造った酒を大きな瓢箪に詰めて、その瓢箪をなんとなくぶんぶん振り回しながら森をふよふよと飛んでいた。最近日課の散歩だ。飛んでいるのに散『歩』とはこれいかに。まあようするに暇つぶし兼不思議探しといったところで。

昔と比べて酒鑄造の技術もずいぶんと向上していたが、『清酒』と呼べるようなものができてからは少し行き詰っていた。俺が半ば満足してきたということもあるだろうが、今は長持ちするようなものを試行錯誤している。

能力を使って一気に糖をエタノールにしてみたりだとか裏技をしたこともあったが、妙に味気ないものになる事を知ってからは普通に作っている。俺の能力は広い分野に渡って使える便利な代物だが、その反面非常にデジタルで融通が効かない時がある。なので、時間をかければできるようなことは大抵能力を使わずやっていた。その方が日常にも味があると言うものだ。

また能力を使って構造式をいじり、リアルダイヤモンドダストとか馬鹿みたいなことをやってみたが、正直ダイヤモンドはフラーレ

ンやグラフィット以上に燃費が悪かった。俺の能力はパッシブならばともかく、意識的に何かを操るとそれに比例して俺のエネルギーは削られてゆく。その上多量の炭素元素をいじる必要があったせいで、いくらかダイヤモンドを作ったらほとんど動けなくなってしまう。効率悪すぎ。

さて、普段は何もなかったり、話の通じない非常識生物と遭遇したりとそんなことばかりだったが、その日は違った。

いつも通り『てーれれーてー』と意味のない音律を鼻歌交じりに口から垂れ流しながら森を徘徊していると、突然がさがさと近くの茂みが揺れた。俺は、すわ敵でも出たかと謎エネルギーを溜めて臨戦態勢をとった。普段はエネルギー玉をばらまけば大抵の相手は逃げてゆく。それでもこちらに向かってくるものは体術で相手をしていった。そして尻尾が五本に増えた今、力もそれに伴ってずいぶん増した。人型を手に入れた時からの不敗記録は未だに続いている。

果たして、茂みから現れたのは、一人の男だった。

正真正銘、男である。完全に人型の、男だ。

「おおお？」

俺は突然の二千年ぶりの人間？との邂逅に、声にならない声をあげた。男は上下のある布でできた服を着込み、腰には剣を下けている。俺は溜めていたエネルギーも霧散させ、しばしの間呆けていた。何せ久々の意思疎通のできそうな相手だ。例え彼が俺にとっての敵であつたとしても、羽根四枚体長一メートルの蝙蝠や群れをなして襲ってくる肉食のダンゴムシよりも断然いい。

しかし、驚いていた俺はあることに気づくことに遅れてしまった。さらにそれは俺にとって致命的な事実だった。

この男、俺より強い。

しかも、男が俺に殺意を持って腕を振るえば、それだけで俺は一瞬で散り散りになるだろう。それほどの絶望的な差だ。

どうやら俺はすいぶんと慢心していたらしい。ここら一帯の誰にも負けないほどの力を手に入れて、かなり浮かれていたようだ。だが俺はこれほどの相手を前にして、恐れてはいなかった。むしろ今の俺には歓喜しかない。鉄面皮な表情はまるで動かないが、心中では確かに笑っているように思う。

仮に致命的であろうと、俺にとって死は障害ではない。むしろ退屈のほつが敵だ。そんなことを考えてしまう俺は、本当におかしくなってしまうたのだろう。

おかしな声を上げてからまるでしゃべらなくなった俺を前に茂みから出てきた男はしばらく黙っていたが、俺が再び口を開く気配がない事を悟ると、一言こつ言った。

「ヌシは、何者だ？」

これはまたすいぶんと哲学的な問いだ。残念ながら俺も自分の事は大きく知らない。せいぜい『俺』自身であることと雌狐であることぐらいだ。

そもそもこの男は何者なのだろうか？ 俺や謎生物が持っているような気配、謎エネルギーとは違うものを、この男は放っている。どうやら俺のようなカテゴリ化け物ではないようだし、俺の知るこの時代のヒトはあのウホウホ達なはずだ。たかが千年やそこらでこんな人間状態になっているとは到底思えない。いや、仮にこの時代の生物が異常な進化スピードだとか言われてもまあ仕方ないのかなと納得するしかないが、だがこの男の持っている膨大な力は人間に力

テゴライズするには到底大きすぎる。

「俺は見ての通り狐だろうが。あんたこそ何者だ」

「我か。我はヒトだ」

「嘘付け」

ついそう言ってしまった。

しかしこれほどすごい力漲らせながらヒトなどとはおこがましい。
むしろ「私は神です」とか言ってくれる方が頷ける。今の俺は寛容だ、そんな超常存在だって受け入れられるほどにな。わはは。

「本当だ。名は『伊邪那岐』という」

「ぶはっ」

え、ちよつと待って。え、いざなぎ？ なにそれこわい。

「『伊邪那岐』という」

「二回言わんでも聞こえとるわい。イザナギで、え、神様？」

「神か。間違いではない。我はヒトであると同時に神でもある」

こいつはいったいどういうことだ。イザナギといえば日本神話最古の神ではなかったか。どうしよう、なんかよく分からないことになってきた。いや、面白いんだけどね、ただ超展開過ぎて。国産みの一柱を前に俺にいったいどうしろと。

「それで、主の名はなんというのだ？」

内心でおろおろとしていた俺に構わず、イザナギは今度は俺に名を問うた。名前はイザナギが勝手に言ったことだが、しかし相手に言わせといて自分が言わないのは俺の礼儀に反する。

…しかし困った。名乗りたいのだが、俺には名乗るべき名がない。何せ狐になってから今まで必要のなかったものだ。

『留見 流』。これは、前世での名だ。男でも人でもなくなった俺に、この名を名乗る気はない。

「悪いが…今まで名前は必要なかったからな。俺には、名前が無いんだ」

俺がそう搾り出すように言うと、イザナギは驚いたように言葉をまくし立てた。

「名を持っておらぬのか。力有る者にとっては真名とは何よりも大切なものであるのだぞ？」

「そう言われてもな…無いものは仕方ないだろう。何なら、あんたがつけてくれよ」

「我がか？」

「そうだ。どうせ呼ぶのはお前ぐらいしかないしな」

俺はイザナギに託すことにした。自分でつけるよりも、他人に付けてもらったほうがなんとなく気分が良かった。名前とは、ある意味祝福だ。真名とは何よりも大切なものだったイザナギはある意味正しい。短い音、文字の中に、つけた者の願いや想いが込められ

る。それはとてもいいものだと思っ。

俺がイザナギに頼むと、イザナギは顎に手を当てて考え込んでしまった。俺としては嬉しい限りだが、そこまで悩んでくれなくても。

「そうもいかん…真名が又シ自身に方向性を与えることもあるだろう。だからこそ相應しいものをつけねば」

名は体を表す、まさに言の葉に込められた祈り、言霊といったところか。特にイザナギのような力を持つものなら、名を付けた者に与える影響も大きいような気がする。

「うむ、思いついた。又シの名は、『ウカノミタマ』にしよう」

「ウカノミタマ？」

どこかで聞いたような。

「うむ。実は以前から妙な気配が森にあることは気づいておったのでな、又シの住まいの近くまで行った事があるのだ。又シは確か食物の世話などをしておったな。その時は珍しかったので見ていたけど、たのだが。ともかく、だからこそウカノミタマという名前にしたのだ」

え、全然気づかなかった。俺もまだまだ未熟ということか。てかイザナギ相手じゃ分が悪すぎる。仮に俺の力を与えると、イザナギは200000といったところか…うん、絶望的だな。

「『ウカノミタマ』になんか意味でもあるのか？」

「倉稻御魂。これには穀物や食物の神という意味があるのだ」

「ええ！ 神ってなあ、自分で言うのもなんだが俺は得体の知れない狐だぞ？ そんな大層な名前をもらってもいいのか？」

「『神』とは大なる力を以って世界に干渉するものの事を言う。又シほど力のあるものならば、構わぬだろう」

神の定義ってそんななのか。今の時代はそれが普通なのだろうか。というより、俺って一応力の強いほうだったんだな。イザナギと差がありすぎて自信消失していた。ということは今まであつてきた謎生物たちはこの世界の底辺なのだろうか。そんな連中相手に最強気取ってた俺、恥ずかしい！
とにかく、イザナギにもらった名前がありがたくいただくことにしよう。イザナギがわざわざ頭をひねって考えてくれたものだし。

「ウカノミタマ、ウカノミタマ…うん、いいと思う。あ、ウカノミタマじゃちよつと長いから、呼ぶ時は『ウカノ』って呼んでくれ」

「うむ、承知した、ウカノ。では我のこともイザナギと呼ぶとよい」

「分かった、イザナギ」

そうして、俺達は少しの間笑いあった。

「ところでイザナギ、俺に『何者か』って聞いてたけど、見れば狐って分かるだろう？ それに畑の世話してただけなのに珍しいって何でだ？」

「む？ ウカノは『禍物』^{まがもの}であろう？ 人のような姿をした『禍物』は、ウカノがはじめてなのだ。それに『禍物』は総じて知能が低い。

まさか畑を作り食物を育てているものがいるとは思わなんだ」

「待て待て待て。ちょっと待て。俺は『禍物』なんぞ知らんぞ。『禍物』って何だ」

「『禍物』とは『禍氣』によつて変質した生物のことであるが。又シも大量の『禍氣』を放っているではないか。紛れもなく『禍物』である証拠だ」

「また分からん単語が出てきたぞ。『禍氣』って何だ？」

「むづ。『禍氣』から説明するとなると長いのだがな？ 構わぬか？」

「…できるだけ簡潔に頼む」

「承知した」

『禍氣』。

これを話すにはまず世界の事から、と説明された。

ずいぶんと昔の事、世界に大地ができた頃は争いが絶えなかったらしい。そのせいで穢れがたまり、地上はずいぶんと汚染されてしまった。当時は地上はもう少し広がったらしいが、この穢れから逃れようとした者達がある場所の要石とやらを抜き、結果的に大地は天界と地上に別れてしまったそうだ。その時の余波で地上の生命の八割から九割は死滅してしまった。そのような大異変が起きてしまったために、地上はかなり歪んでしまったらしい。

そのままでは全てが崩壊する危険すらあったため、世界はむしろ歪みをカタチとして現出させることで安定化を計った。こうして世界

の歪みがカタチになったもの、それが『禍氣』だ。

今では地上に欠かせないものらしいが、元が歪みだったために影響も多々出てきた。それが『禍氣』によって変質してしまった生物、『禍物』だ。

どうやら俺の生体エネルギー？だと思っていたものは、この『禍氣』とやらだったようだ。

ついでとばかりに話してくれたが、イザナギは崩壊の危機は免れたものの未だに若干不安定な状態が続いている地上を調整するために天界から期限付きで降りてきたらしい。万が一地上が崩壊すれば、連鎖的に天界が崩壊するのは確実なので、必要なことなのだそうだ。

それにしても、『禍物』か。今までみてきたトンデモ生物達は、進化の過程をすつとばして魔改造されてたんだな。妙に機能的ではなさそうなものも多いとは思っていたが。それに、人型のものに遭遇したことがなかったのは俺以外にいないからだったようだ。その上、『禍氣』を丸めてみたり空を飛んでみたりしていたのも俺ぐらいだ。俺だけ他と違うのは、中身が俺なせいなのだろうか。

「ウカノよ。こうしていつまでも立ち話をしていても仕方あるまい。我の今住む地へ来てみぬか？ 招待しよう。我だけウカノの住居を知っているのでは、不公平であるしな」

「ん？ そうだな…ここから遠いのか？」

「歩いていくのならば、二日ほどかかるであろうな」

「なんだ、すぐじゃないか。行く行く、今から行こうすぐ行こう」

折角出会えた話し相手と早々にサヨナラでは、はなはだもったいな

い。そう思った俺は、案内するというイザナギにほいほいついていくことにした。しかし、同時に俺はイザナギの言葉に疑問も感じていた。

俺がこの地に住んで千三百年ほど、ここら一帯は大体探りつくしてははずだったのだが、イザナギの住居はここから二日程度行ったところにあるという。ならば、何故今まで俺はそれを見つけられなかったんだ？　…こんなに真剣になって考えてるのに、これで、数日前に越して来まして、なんてオチだったら怒るぞ。

色々と 違う気がする 日本神話（後書き）

イザナギさん登場です。出す必要があつたので出してみました。

ウカノや『禍物』は妖怪のプロトタイプです。ちなみに『禍気』
妖力です。 ≠

あ、はじめまして、奥さん（前書き）

朝出て夜帰りとか書くヒマねーですよ。寝る時間削るとか本末転倒なような気も…

四話目です。かなりオリ神話になってきたような気がします。あ、ヒルコとかも普通にいません。神話をいちいちなぞるのはさすがに時間がかかりすぎます。

あ、はじめまして、奥さん

夜が来て朝が来て夜が来て朝が来て。

今も昔も、空の顔は変わらない。いや、この時代の方がより澄んだ色をしているだろうか。科学など微塵もないこの世界では、自然のままの大気が広がっている。そんな空気の膜を通して、目には綺麗な空色に映るのだろう。

とはいえ、人間だった頃の空を見ていた時間と狐になってから空を見ていた時間は断然にこちらの方が長い。最近では昔、時系列的には未来の空色の方が夢に思えてくるほどだ。

空に限った事ではなく、前世の記憶はすいぶんと薄れてきた。実際、前世で縁のあった人達の顔はもうほとんど思い出すことはできない。自分の顔に至ってはとりあえず目と鼻と口がついていた、というところくらいしか覚えていないのだ。…それもう完全に忘れてるだろという突っ込みは受け付けていない。きつともう一度見たら思い出すことができるんだ。多分。

雲を見ながら胡蝶の夢について考えていると、イザナギが突然立ち止まり俺に向かって口を開いた。

「ここが、私の住処だ」

「…？」

既に昨日の内に森を抜け草原を歩いていたところだったが、イザナギはこの草原のど真ん中で立ち止まった。しかし、周囲にはそれほど高くない草しかない。風が吹くたびにさわさわと静かにざわめき

とてもよい雰囲気、だが建物らしきものはどこにも、まるでない。
…はて、こいつは地面に穴でも掘って住んでいるのだろうか。おい
おい神様、いくらなんでも泥臭すぎだろ。モグラかよ。

「ウカノ、何か失礼な事を考えておらんか？　又シの目に憐憫が見
えるような気がするのだが。…ふうむ、まあ、少し待て。——開^{ひらけ}」

俺が口を開かず目で自身の心情を語っていると、イザナギは心外だ
とばかりに一言と^{コトダマ}ともに右腕を振った。

ぴしりと、何かが切り替わったような空気を感じるとともに、俺の
視界には突如高床式倉庫が現れた。正倉院と言ってもいいかもしれ
ないが、実際はどちらとも造りが違う建物だった。大体は木造で、
屋根も瓦葺ではない。さらにこの建物の屋根は『へ』のような形で
はなく『ノ』である。それほど鋭角でもないが、ずいぶんと斬新な
デザインだな。ログハウスというには造りが簡単だが、この草原に
は妙に合っている気がする。

しかし、そこにはさつきまで何もなかったはず…いやちよつと待て、
俺はさつき周囲を見回した時確かにこの建築物を目に映していた、
ような気がする。いや、確かに視線をやったはずだ。なのにどうし
てもう一度目にするまでこうして認識できなかつたんだ？

「さて改めて。ここが我の住処だ。ふ…どうやら驚いたようだな、
我の屋敷の威容に」

「威容というか異様というか。つかそもそも建物そのものに驚いた
んじゃないよ。なんなんだ？　さつきのは。イザナギが何かするま
で、これは確かに見えていたはずなのに認識できなかつたぞ」

「そのことか…。何、屋敷の周囲に我が結界を張っていただけのことだ。視覚聴覚触覚嗅覚ついでに味覚、対象特定に必要な情報認識を阻害し、また正しくこの場所を認識できないものはここに入る事はできないようになっておる。とは言ってもこの結界はそれほど強力なものでもない。こうして一度認識してしまえば、再度先の結界を張ったところで一度根付いた認識を阻害する事はできんからな。阻害でなく認識遮断結界などでも張れば、別ではあるが」

つまり五感で捉えてはいても、それを明確に意識することができないということか。

しかしそれよりも、この世界では『結界』などという空想技術もまかり通るらしい。いや、そんなことも今更。『禍気』だとか『禍物』だとか、以前は非常識だ非科学的だといえるようなものが蔓延っているのだ。仮に『魔法』が出てきたところで俺はもう驚かない。

…この時代からしてみれば未来の科学技術の方が『魔法』か。

「…んー？　そもそもこの『結界』はイザナギにとっては技術なのか？　それとも能力だとかで感覚的に作っているのか？」

「いいや。一定の法則にのっとり正確に結界術式を構築し、我の神気を燃料とすることで起動させている。石を投げた時こめた力によって飛ぶ距離が変わり、また法則に従って地面に落ちるだろう。本質的にはまるで同じものだ、影響力が違うのだがな」

「ふうん…『結界術「式」』と言ったな？」

「うむ。何故そこまで念を押すのだ」

「いやいや、ただの確認だ。イザナギ、この『結界』というやつを俺に教えてくれないか？　いざという時に役立ちそうだ」

能力の新たな分野の開拓。いくら俺とてゼロからこんなよくわからんものを組上げるのはおよそ不可能だ。が、『結界』の術式を知る事ができれば、そこからさらに応用範囲を広げていくことは可能だろう。雛形さえあれば、あとはそれを組み替えていけばいいだけだ。それに、そうして試行錯誤して新しいモノを作っていくという快感は何事にも変えがたい。酒造りに何百年もつぎ込めたのも、造る過程も結果も俺にとっては娯楽のようなものだったからだ。

「教えるのは構わぬが…我が術式に使っているのは『神気』と『靈気』だぞ。又シは『禍気』を扱えるようだが、我の知る術式にそのまま使うことはできないのではないか？」

それは織り込み済みだ。式の根本の仕組みを理解できれば、機構を『神気』『靈気』？用から『禍気』用に変換することが出来るはずだ。まあそのためにはイザナギの『神気』『靈気』？を詳しく知らなければいけないだろうが…それも含めて教えてもらおう。いざとなれば、時間をかけて試行だけ繰り返していけばいい。いつかはできるだろ。

「いや、いい。術式、あるいは基礎だけでも教えてくれたら、こちらで何とかしよう」

「ふむ、了解した。…そう言えば屋敷の前まで来たというのに、何故我々はわざわざ立ち話をしているのであらうな」

「そうですよ。わざわざ結界を開けたというのに、いったい屋敷の前で何をしているのですか？…あら、お客さんが来ていたのですね」

と、イザナギと結局立ち話をしていると、突然俺でもイザナギのものでもない声が混ざった。その声のした方を見ると、建物の扉が開いておりその前には一人の女性が呆れた顔で立っていた。俺と目が合うとニコリと笑ってひとつ会釈をする様は、とても美しい。イザナギにも共通しているが、二人とも綺麗な黒髪と整った顔立ちをしている。

「うむ、帰ったぞ、イザナミ」

「お帰りなさい。それから、いらっしやい」

「あ、お邪魔します」

はっ。つい丁寧な言葉遣いをしてしまった。彼女の丁寧な雰囲気には自分の気も引き締まるようなものを感じる。そしてイザナギの次はイザナミさんが来ました。もうアマテラスと来ていいんじゃないかな。

イザナミさんにはイザナギと同等ほどの力を感じるが、イザナギと違いとても物静かな雰囲気で、そして神秘的な空気にあふれていた。イザナギはもう少し豪儀な感じだ、そして神秘的というか神々しい。決して騒がしいわけではないが、威風堂々としているといえいいだろうか。

イザナギの家に上がり部屋まで案内されたが、中の造りはとても単純だった。小部屋といえるような壁で区切られた部屋は2、3ほどしかないようで、大部屋一つが家の大体のスペースを占有している。

床は板張りで、しかしどのような技術で接合してあるのか軋みなどは一切なかった。つやつやとした表面はさしもの一枚の板のようで、未来の科学技術をもつてしてもこれほどのものはなかなか作れはしないだろう。

さて、俺は今大部屋の真ん中でイザナギと膝を突き合わせて座っているのだが、現在進行形で小さい敗北感と大きい感動に打ちのめされていた。そんな俺の手にあるのは一つの器。イザナギの手にも同じ物があり、なみなみと透明の液体がそそがれている。

「どうだ。なかなかのものであろう？」

イザナギの言葉に、俺は小さく頷いた。これほどのものは、前世も含めて味わった事はない。キリツとした辛口とほんのりとした甘味が絶妙に混在し、口当たりも良く、ずっと口から喉へと伝ってゆく。飲んでしまった後も身体の隅々まで何かが巡っているような気がして、とてもいい気分になるのだった。

「おかわりいかがですか？」

「あ、お願いします…」

そばに座っていたイザナミさんが空になった器を見てお代わりを差し出した。俺はなんとなく借りてきた猫のようになりながら注いでもらい、こうなった発端を思い出していた。

家に上げられた後は大部屋に案内され、用意された座布団に腰を下ろしたのだが、その時に肩にぶら下げていた瓢箪を下ろしたのが始まりだ。

どうやらイザナギも気になっていたらしいが、聞くタイミングが今

まで無かつたらしい。それは何か、との問いに俺が簡便に『酒』と答えるとそのまま酒の話題になったのだ。イザナギも酒を嗜むと聞き、まずは一杯ご馳走になったわけだが、結果は上の通り。

俺の作った酒ではこれほどの味を出すには、まだ千年単位の時間が必要では無いだろうか。俺の酒は今壁にぶち当たっている。その壁をまず越えなければならぬのだ、時間がかかるのは当然の事。しかもそれを取り越えたところで課題はまだいくつも残っていることだろう。それほどの代物なのだ、イザナギの酒は。まさに神酒^{みき}と言ったところか。

「ウカノはこの世界に生まれてどれほどになるのだ？」

「女に歳聞くなよな。別にいいけどさ。…そうだな、多分八十万ほど太陽と月を見たような気がするが。そう言うイザナギはどうなんだ」

「我か。我は、いやイザナミも我と同時期に生まれた事を考えれば我らとなるが、この世界ができた頃に生まれたことは覚えているのだが。どれほどかは覚えておらん」

「昔ってレベルじゃないな。生まれた時はどんな景色だったんだ？」

「ふーむ…虚無だったような気もすれば、何かが出来上がっていたような気もする。なんとも言えん曖昧な世界だったように思うがな」

生まれた時一番最初に何を見ましたかとかナンセンスすぎたか。俺は今世の最初が今ティニユーだったから覚えているが、イザナギはそういうわけでもないのだ。ましてや気の遠くなるような年月が過ぎているのに詳しく覚えていいるはずもない。イザナギの話からすれば、一応イザナギの前があったということだろうか。…俺が見たわ

けじゃないしな。イザナギもあまり覚えていないというのに考えたところで不毛か。

「イザナギは地上を調整する、とか言ってたよな。どういうところを変えるんだ？」

「ふーむ。まずは一番の大仕事となるであろうが、『禍氣』に手をつけることになるだろう。このままのカタチで地上に残るには劇物すぎるのでな、密度を薄めるつもりだ。量が少なければ問題は無いのだが、今の地上にはこれに満ち溢れている」

「そうすると、『禍物』はどうなるんだ？」

「どうもならんだろう。これ以上の変化は止まる、が、それどころなるといっわけではない。…いや、成り立ちが少し変わる事になるかもしれない。我らの天界の天人同様、地上には『禍氣』の影響で劇的な速度でヒトが生まれつつある。そうすれば感情も生まれる、正だけなればよいのだが、そういうわけにもいかんだろうな」

「よく分からなくなってきたぞ。簡単に頼む」

「むう。喜怒哀楽だけならばむしろよいのだが、憎悪や恐怖といった顕著な負の気は周囲に少なからず影響を与える。それらが深刻な変化をもたらす前に、何らかのおとしどころを作っておかねばいかんだ。…おそらく『禍氣』を薄くするためにそれらを使い、それらのおとしどころには『禍氣』を使うことになるだろう」

「…ふうん。ま、すぐの話じゃないんだろ」

「うむ。この案が形になるのはずいぶんと先になるであろうな」

「さて、俺はそろそろ帰るぞ。あ、イザナミさんもありがとうございました」

まるでうわばみのごとくかばかと器を空け、アルコールを微妙に分解しながらほろ酔い状態に調整し俺はようやく席を立った。

イザナミさんは、手を伸ばしながら微笑み

「おお!?!」

さりげなく俺の頭に伸びてきた手を、俺は寸前で反射的にかわした。かわされたイザナミさんは伸ばした手をふらりと彷徨わせている。その顔はどこかしょぼんとしていた。その視線は俺の頭の上、具体的にふさふさの耳に向いている気がする。

「む、すまぬな。イザナミは可愛いものが好きなのだ。前も三つ頭の犬を拾ってきて…」

イザナギはスルーするとして、なんだかイザナミさんの顔を見ていると俺が悪いような気がしてきたので、俺はおとなしく頭を差し出した。

するとイザナミさんはにつこりと笑うと改めて手を伸ばし、俺の頭を撫でるのだった。母狐になめられた記憶はあるが、撫でられた記憶は無い。それ以降はそんな繊細な動作をするものには出会った事は無い。狐になって初めての経験に、耳がぶるぶると震えている気がする。まあイザナミさんが嬉しそうなので本望です。

「しかしウカノよ」

ようやく解放された俺に、イザナギがふと声をかけた。さっきまでケルベロスもどきの話を熱く語っていた時とは違い、その顔には真剣味に溢れている。俺はそれにつられて自然と身体を引き締めた。

「我は、又シのその口調はどうかと思うのだが」

「気を引き締めた俺の緊張を返せ。んなことどうでもいいだろ…。それに、理由はあるぞ?」

「ほう、なんだそれは」

「実はな」

「うむ」

「俺の前世が男だったんだ」

「…うむ。それでその理由とは?」

おい神様、スルーすんな。

あ、はじめまして、奥さん（後書き）

東方でも結界とか魔法とかありましたし、いいですね。きっと。

あ、いくつか時代間の価値観や法則などを画一化してます。美醜を昔と今でいちいち表現するのはめんどいです。

心の揺れ幅、前代未聞（前書き）

少し短め？ 自分じゃ良くわかんないですね。

今回さらにオリ設定追加。黄泉の国＝地獄になってます。本来は違うらしいんですけどね、今作ではこの設定でお願いします。

最近はかなり暴走してるような…反響に戦々恐々してます。

心の揺れ幅、前代未聞

イザナギやイザナミさんと交流を始めてこれまたずいぶん経った。多分、五百年ぐらい。ちょっと前に俺の尻尾が六本に増えてたので、間違いは無いと思う。

そう、尻尾が六本だ。もふもふで、寝る時などに手足を折りたたんで身体を丸ごとこの尻尾に埋めると、それはもう最高の気分なのだ。が、その分とても嵩張る。そこで俺は何本か隠すことができないかと考えたわけだ。そもそも、俺の本体は狐なのだ。それが、こうして人の形をとって自然に生活している。ならばさらに人に近づけることができるのではないか？ その考えの下、尻尾が二本になった俺をイメージしてみると、思いの外簡単に成功した。ぱふっ、と空気をはたくような音とともに俺の身体の中に引っ込んでいったのだ。因みに狐の状態に戻ることもできるが、人型の方が便利なので四足に戻ることはあまりない。それこそ数百年に二、三度だ。

さてイザナギのところへはたびたび遊びに行っては酒を飲み交わしたり術式を学んだりこの世界のことを教えてもらったりと、することはいくらでもあるのだが、イザナギは忙しいのかよく家を空けている。その補佐らしいイザナミさんもよくイザナギについていくお陰で、家に行っても誰にいないなんてことはざらにある。

そんな時はふてくされて一人で飲んだくれたり、イザナギの家に張ってある結界をいじったりしている。ちゃんと元には戻してるよ？

ところで、イザナギに教わった結界術式だが、俺には使えないことが分かった。え、イザナギの結界をいじったりしてるじゃないかって？ うん、術式を組み立てたり組み替えたりすること自体はでき

るんだけど、残念ながらイザナギの術式じゃ『禍氣』を燃料にすることができなかったんだよね。

仮に『靈氣』を液体燃料だとすると、『禍氣』は気体燃料だ。かなり強引なたえではあるが、しかし同じ機構で使うにはこれら両者の質は違いすぎる。それもこれらは気体液体の関係のように熱や圧力など外部から力を与えると状態を変えるような、そんな単純な関係ではない。分かったことは、『禍氣』用の術式を新しく確立しなければならぬということだ。

因みに『神氣』とやらはかなり万能で、その上『靈氣』や『禍氣』との力の密度とはまるで違い、相当強力なものだ。：俺も『神氣』欲しいな！。天人の中でも力が強く、かつ靈格の高い者は持つてゐるらしいけど。イザナギ曰く、いつかは俺にも『神氣』が備わるらしいが、それも何年後の事か。俺を神と名づけたイザナギが言うのだから、間違いは無いだろうが。

以前にも記した気がするが、俺の能力は既存のものを読み取ったり学習する事などに関しては桁違いに優れているが、完全に新しい何かを組み立てるとなるとそうはいかない。

今回は『靈氣』方式とはいえの事象を確立するための術式を知ることができたので、まったくゼロからやるよりはましなのだが、それでも気の遠くなるような時間が必要となるだろう。

そもそも『力』であるのに何故これほど二つに違いがあるのかと言えば、それはおそらく成り立ちの違いのせいだろう。確かに俺は『禍氣』を放出し、イザナギは『靈氣』を発している。しかし、元から生体から生じた『靈氣』とは違い、『禍氣』は世界によって半ば偶発的に生み出されたものだ。およそ血と空気ほどの違いがあるのに、同じエネルギーとして使うことなどできようはずも無い。

結局大いに暇は潰せるているのだが、五百年経ってもまだ完成して

いないと言えばその苦難も分かってもらえるだろうか。無論術式開発ばかりしてきたわけではないが、それでも丸々二百年ほどはやってきたはず。必要になるのは能力より突発的な発想なので、一人ではどうしても時間がかかってしまう。発想、というかとっかかりさえ確立することができれば、俺の能力ならば瞬く間にそれを補完することができるだろう。最初の一步や二歩さえ踏み出せば、あとは筋斗雲に乗って一っ飛びーとでも言えるほどのだが、その最初の一步が遅々として進まないのが現在の状況だ。

「あ、そういえば出産祝いとかどうしよう。…果物詰め合わせでいいかなー」

百年ほど前にイザナミさんが妊娠していることが分かった。きっと二人でくんずほぐれつ夜のプロレスをした結果なのだろう。そろそろ出産時期らしいのだが、臨月まで百年とかどんだけー。妊娠している間にかなり弱体化しているということなので、贈り物は酒なんかより果物のほうがいいだろう。

俺はくびくびと瓢箪に口をつけながら、果物類を集めている畑のほうへとよさそうなものを探しに、小屋の外へと出た。ちなみに中身はイザナギにもらった酒だったりする。いまだにあの味に勝るようなものは作れてはいない。

空を見上げると、いつもと変わらず青い空が広がっている。天気が悪くなりそうな様子もない。

が、それを確かめ歩き出そうとしたとき、その空が一瞬で真っ赤に染まった。

「え…！？」

夕焼けなど、こんな時間ではありえない。そもそも数秒前までは青空だったのだ、何の前兆もなく赤色になるわけがない。

俺はいつそ空まで飛んで原因を確かめるかと、宙に浮いた。が、木々を越えたあたりですぐにその原因を見つけることができた。

「しまった…！ カグツチか！」

イザナギの家がある草原から立ち上がる巨大な紅蓮の火柱。それはまさに天まで届く、いや、むしろ天すら焦がしていた。触れるもの燃えるものは一瞬で消し炭にしまつているため火事はおきていないが、外周でこれならば火柱の中心は溶解してしまっているのではないだろうか。

俺が草原のほうへと行つてみると、草原は案の定ほぼ完全に焼失していた。灰すらも残っていない。

そのせいでイザナギの家の場所を捜すのに手間取ってしまったが、だいたい焼け跡の中心あたりにくぼみのような場所にイザナギらしき人影がいるのが見えた。しかし、イザナミさんの姿はどこにもない。

俺はイザナギの少し後ろに降り立ち、周囲を見回した。あの高床式の家も元から無かつたかのように、ただただ更地が広がっている。そして、イザナギのそばにはいつもイザナギが腰につけていた剣が突き刺さっている、真っ黒な炭のようなものがあつた。それが、何であつたのかなどは考えたくは無い。イザナギがここにいて、イザ

ナミさんがここにいないということが分かれば、それで十分だ。そして、それも風に吹かれるとぐずぐずになり灰のように散り散りになってゆく。

「イザナギ」

俺は、俺が来ても微動だにしなかったイザナギの背中に声をかけた。何をしたのか、イザナギの力はかなり弱体化してしまっていた、それでも俺よりは大きいのだが。
イザナギはピクリと震えると、ようやく俺のほうを振り向いた。しかし、その瞳は俺を見るはいない。光の反射もなくなってしまったかのように、とても虚ろなものだ。

「ウカノか」

「ああ。何が、あった？」

「…我らの子が、生まれたのだ。しかし、奴は天を焼き、イザナミを焼いた。だから我が殺した」

やはり間違いないらしい。神話では火傷程度だったが、実際のこの状況では火傷などというレベルではない。そして、イザナギが天之尾羽張で刺し殺した。天界から万が一のためにと持って来ていたものらしいが、その万が一で役に立ってしまうとは皮肉なものだ。

「…」

「…」

しばし、その場に静寂が満ちた。俺は黙祷するために。イザナギは

…何を考えているのだろう。

数分後、俺は再度口を開いた。このままここにいても、仕方が無い。

「さっさと行くぞ、イザナギ」

神話のようににはさせたくはない。イザナギに聞いた話を考えれば、時間が経てば経つほどまずいことになる。

「どこへ、行くと言うのだ。ウカノ」

空っぽの声で、俺に返事をするイザナギ。なんだか、イライラする。俺は、いつまでもこんな虚ろで弱々しくてうじうじしている親友^{イザナギ}を見ていたくはない。

放って置けば、こいつはいつまでもここにいるだろう。我を取り戻すのがどれほど先か。しかしそれでは駄目だ、間に合わなくなる。

「馬鹿野郎！ 黄泉に決まっただろうが！ 『我らにとっては死と消滅は同義ではない』って前教えてくれただろうが！」

はるか昔、天界が地上を離れた頃、地底には同時に巨大な空洞が出現した。まるで天にできた世界に対する反作用のように。そしてそこは最大の『禍気』の集積地帯でもある。まさに下界における最大の歪みでもある。

地上で器が死んだとき、魂はこの地底の大空洞、黄泉へと自然に落ちてゆく。ならばこの地上で死んだイザナミさんも黄泉に行くはずなのだ。…しかしいかにイザナミさんといえど、いつまでもそのままでいれば『禍気』に魂を蝕まれ、イザナミさんはイザナミさんで無くなってしまうだろう。そうなった時は、それが本当の死で、イザナミさんの消滅だ。たとえ地上に戻すことができなくとも、それを避けることの意味は大きい。

「このままいつまでもお前がこいたら、イザナミさんは本当に死
んじまうんだぞ！ … もういい！ お前が行かなきゃ、俺が行く！」

どうしてこんなに心が乱れるのか分からず、俺はただただその激情
を言葉に乗せて呆然としているイザナギにたたきつけた。…これほ
どの感情の波は、前世すらも含めて初めてだったかも知れない。そ
の波とともに浮かんでくるのは、いつもの威風堂々としたイザナギ
と今のイザナギの姿、そしていつものイザナミさんの微笑みと、灰
となって空へと散り散りに消えて行った消し炭。その食い違いが、
たまらなく俺をかき乱した。

そんな俺を見られるのが嫌で俺は踵をかえし飛び立とうとした。

「…待て」

しかし、その前に俺の肩に手が置かれた。その手はいつもと比べ
ると、頼りないほど弱々しい。だが聞こえた声はいつもの調子を取り
戻してきていた。

「いざなぎ？」

俺が振り向くと、イザナギは俺の肩から手をどけて地面に深々と刺
さっていた天之尾羽張を引き抜いた。そしてそれを腰の定位置に挿
すと、もう一度俺のほうを向いた。しかし、なぜかその端正な顔が
少し歪められる。

「すまなかった、手間を、かけさせてしまったな。…我はウカノの
そのような顔を初めて見るぞ。いつもと変わらぬようにも見えるが、
しかしどこか辛そうだ。そんな顔をせずともいい。我はもう、大丈
夫だ」

そして安心しろ、とばかりに笑うのだった。

俺はぺたりと自分の顔を触った。なるほど口も頬も動いてはいないが、しかし強張っているような気がする。見ただけでこれが分かるとは、存外イザナギも俺の事を見ていたらしい。

と、そうして顔に触っているのをイザナギが見ているのに気づき、ばつが悪くなった俺はそっぽを向きながら答えた。

「ふん。俺には、分からんな」

ぶっきらぼうな俺の言葉にイザナギは苦笑をもらした。その顔は、もう完全にいつもの調子を取り戻している。そして空中に飛び上がり俺のほうを向いて言った。

「さて、我は行くとするが、ウカノも行くのか？」

「お世話になったからな。俺もありがとうぐらいは、言いたいさ」

前は、何も言わずに逝ってしまったからな。

俺は一度死んだときのことを思い出して、そう言葉には出さずに続けた。

心の揺れ幅、前代未聞（後書き）

今日は急ぎますので、後で付け足しに来るかもしれません。それでは。

赤黒い地の底で（前書き）

おはようございます。

この話を入れるかどうか迷ったんですが、一応書き上げられたんで入れちゃいます。

前話含めてシリアス風味ですかね。

赤黒い地の底で

むき出しになったごつごつとした地面にある、巨大な罅割れたような空洞。その向こうにはコールドタールのようなどろりとした闇が広がり、生者の侵入を拒んでいるようにも見える。そこから質量すら感じさせるほど濃密な『禍気』が、飽和状態をこらえるかのように漏れだしていた。

黄泉への入り口。生者でここに入りまともでいられるものは、それこそ地上では一握りだろう。なにせ死者でさえこの環境では変質してしまうのだ。

俺はこの場所を知らなかったためイザナギに案内されて来たのは、先刻のことだ。入り口から見えた中同様しばらく濃厚な闇が広がっていたが、もうしばらく奥へ行くと少しずつ闇が晴れていった。それでも薄暗く、むしろうつすらと見えるだけの周囲の風景には寒気すら感じる。赤や黒や茶や、そんな色が滅茶苦茶に混じったような地肌がむき出しになっている。第一印象は、汚染物質で完全に汚染された荒廃した大地といったところだ。以前俺が行った地獄も、この風景と比べればまだましだ。獄卒の鬼がいたぶんこちらより断然過ごしやすかったとも言える。彼らは人ではなかったが、ある意味とてもまっすぐな気性をしていて付き合う側としては気分が良かった。

しかしここはどうだ。濃密な『禍気』は目に見える風景すら歪ませているようで、ただただ禍々しい。そして身体に纏わりつきこちらの歩みを遅くさせた。かなり強力な部類の『禍物』である俺でさえ、あまり長くいると俺が俺自身でなくなってしまうだろう。

「……イザナギ、イザナミさんがどこにいるかは分かるのか？ どう

やらここの広さ、半端じゃないぞ。元が天界の反作用であることを考えると、それも当たり前か」

「ふ、我は長き時をイザナミとともに過ごしてきたのだ。我にイザナミについて分からないことなどは無い。…うむ、それほど遠くはない、イザナミも我に気づいたようだ。それに、どうやらまだ『イザナミ』のようであるな」

「だがここにくるまでも時間がかかったんだ。あまり、時間も無いだろう。急ぐぞ」

「うむ」

俺にはまったくイザナミさんの居場所が分からないので、俺はとにかくイザナギについて行くことしかできない。特にこの場所は『禍氣』が濃すぎて、他の何かを感じるには俺の感覚は鋭すぎた。どれだけ嗅覚が優れていようと、激臭の中では役に立たないといったところだろうか。

「む」

しばらく行つたところで、前を進んでいたイザナギが止まった。てっきりイザナミさんを見つけたのかと思つたが、前にも、そして周囲にも誰もいない。ただ死の大地がどこまでも続いているだけだ。

「どうしたんだ、イザナギ。急ぐんだから、立ち止まつてる暇はないだろ」

すると、イザナギは不思議そうな顔をして俺のほうを見た。そして

前の空間に両手を伸ばすと俺にこう言ったのだ。

「何を言っているのだ。イザナミならここにいるであろう」

「え？」

首を傾げてイザナギが両手を伸ばしたところへと目を向けるが、そこにはやはり何もいない。訝しげな視線をイザナギのほうへと向けると、イザナギは反対に呆れたように言った。

「ウカノ。ヌシは『眼』を閉じているではないか…その状態で魂を見ることが出来るはずがなかるう」

「????」

そのイザナギの言葉にさらに首をかしげる。俺は今こうして眼を開いているはずじゃないか。

俺はもう一度イザナギの両手のあたりを眼を凝らすように見つめた。俺に分からないことを言っているても、基本的にイザナギの言っている事は全て正しい。なので俺はイザナギの言葉に従い、『眼』が開くようなイメージを浮かべるのだった。

すると、目に見える風景が途端に変わった。具体的に言えば視界が広がり、今まで見えなかったようなものが見えるようになった、という感じた。後々気づいたことだが、どうやらこのときの俺は眼の擬態を外し、禍物狐としての眼に戻していたらしい。丸い瞳孔が縦に割れ、金色も増していたようだ。まさにイザナギの言うとおり俺は『眼』を閉じていたのだ。

その状態でイザナギの両手の先に見えたのは、漆黒と紅蓮が混ざっ

たようなぼんやりとした光の塊である。さらに良く見るようにすると、それに重なるように半透明のイザナミさんの姿が視界に浮かんできた。

この環境にあつて、イザナミさんは変わらず穏やかに笑っていた。赤い何かを大事に抱えるようにして。

ぱくぱくと半透明のイザナミさんの口が動き、それに合わせてイザナギが頷く。なにやら話しているようだが、俺にはさっぱり分らない。イザナギの顔が驚いたり暗くなったり複雑そうになったり嬉しそうになったりするのをただ見つめているだけであつた。

二人の話に区切りがついたところで、俺はイザナギに何を話していたのかを聞いた。

イザナギが言うには、イザナミさんは既にギリギリの状態らしい。つまり、完全に変質し彼女の本質が暴走してしまうのも時間の問題だとか。なのでイザナミさんをここ、黄泉の奥に封印してしまうらしい。封印式には魂の浄化式も含め、長い時間をかけて歪みを戻し天界に戻すという計画だそうだ。…概算では億単位の時間がかかるらしいが。

因みに、二人の子、カグツチの魂はイザナミさんと一緒にいて、しかも融合しかかっている。それをゆつくりと剥がすことも含めての、気の遠くなるような時間の封印のようだ。

カグツチの名前は産まれる前から決めていたらしく、ここに来てようやくちゃんと名づけることができた、複雑そうな中にも嬉しさを見せながらイザナギはそう言った。愛せるのか、と問うと、『我らが愛さなければ誰が愛するのだ』と当たり前のように言われてしまった。かくも深きは親の愛、とな。本当に、幸せ夫婦だよ、イザナギとイザナミさんは。あんなことがあつたというのにな。

封印場所選ばれたのは、イザナミさんと出会った場所からさらに少し行った場所。掘り鉢状に窪んだクレーターのような場所の中心である。

イザナミさんがそこに立つと、イザナギは地面に宙に、無数の線を描いていった。さらにはそれと符合するように何本かの短い線でできた記号をいくつも連ねてゆく。イザナミが教えてくれた封印式の術式であることに気づいたが、今までに無いほどにそれは強固なものだ。普通の術式に注げる力の限界値を桶一杯分とすると、これの限界値は湖ほどはあるだろうか？

その間俺と言えば、状態ができるだけ進まないようにと簡易的にイザナギがイザナミさんの周囲に張った結界の補強を行っていた。力こそ注げないが、術式に干渉することぐらいは俺にでもできる。イザナミさんはその様子を、にこにこしながら眺めていた。その間中もずっと、大事そうに何かを抱えているが、それが気になった俺は少し身を乗り出した。イザナミさんもそれに気づき少ししかがんでくれる。

イザナミさんの腕の中にいたのは、一人の赤子である。紅蓮色の髪が既に生えていて、穏やかにすやすやと眠っていた。それを見て、俺は安堵するように息をついた気がする。どうやら幸せ夫婦の子供も、いつの日か幸せになれそうだと。

イザナミさんに少しだけお礼を言った後、俺は術式が完成したと言うイザナギについて窪地の外へ出た。これからイザナギが力を注ぐことでようやく封印術が発動する。

イザナギは術式を束ねるような場所に天之尾羽張を刺しており、そ

れを中心に術式全体へと力を行き渡らせ行く。

その操作自体は非常に順調に進んで行き、何も無く終わると思われた。が、異変が起きたのは終盤にさしかかったところである。

「――！」

身体を押さえて、イザナミさんが苦しみ始めたのだ。口からは音にもならない悲鳴が漏れ、俺達の目の前で何かがイザナミさんを変えていく。封印式には魂情報保存効果も仕込んであるようなのでイザナミさんそのものが消えてしまうことはもうないのだが、それでもこの様子を見ていて心中穏やかでいられるはずがない。

そして、その変化は直に臨界点を越えた。

「――■■■■■■■■■■！！！！！！」

音にもならなかった悲鳴が、ある時を境に空気を揺るがす大叫声へと変わる。だがそれは到底人に発音できるようなものではない。それと同時にイザナミさんを中心に真っ黒な靄のようなものが噴出し、イザナミさんを覆い隠してゆく。そしてそれだけに留まらずイザナギの構築し完成しかけていた封印とぶつかり凌ぎを削る。見たことも無いほど強固だったはずの結界は、その黒い靄に押されぎしぎしと音を立てて軋み始めた。

「イザナギ！」

「……っ……っ！」

かなりまずい状況に思わずイザナギのほうを見るが、イザナギも脂

汗を大量に流しながら力を止まることなくどんどん放出している。前代未聞の大封印なのだ、他にかかずらっていられる暇は無いだろう。しかし、封印はそれに構わずなおも軋みをあげる。黒い靄は完全に封印内を埋め尽くし、イザナミさんの姿は全く見ることができない。

「くそっ」

俺は封印術式に手を触れた。じゅっと、すさまじい熱さが伝わるとともに手が焼け爛れてゆく。しかし、俺はそれに構わず術式へと介入した。

確かに、この術式は今まで見たことの無いほど高度なものだ。イザナギにとっても最高のものを作ったのだろう。しかし、こと術式の構築技術ならば、『式』に特化した能力を持つ俺はイザナギの上に行く。

綻んだ部位を補強し、そしてより緻密に強固に術式を後付けで構築してゆく。今の状況で基盤の術式をいじれば、一気に崩壊してしまうだろう。だがその上から被せてゆくような形をとれば問題ない。

そして、どれほどの時間が経っただろうか。

イザナギと俺の疲労がピークに達した時、途端に封印が収束し始め、黒い靄も押し戻してゆく。そしてぎりぎりまで収束すると、封印から真っ赤な炎が溢れだし封印を覆っていた。炎は際限を知らないかのように窪地に溜まっていき、淵でようやく止まった。深紅の炎はまるで海のようにそこで波打っている。

イザナギも俺も封印が完成したことを悟り、深々と息を吐き出した。

赤黒い地の底で（後書き）

はて何を書きたかったのか忘れてしまったので、また今度。メモとかしとか無いと駄目ですね。

能力って結構すると思う（前書き）

もう七話目ですね。鈍亀としながら更新してますけど、こんなのは最初だけです。

なんていうか今更ですけど文章多いですね。眼が疲れます。

ところでこの話ってゆっくり進んでるんでしょうかね、早く進んでるんでしょうかね。時間はぽんぽん飛んでますけど。

能力って結構ずるいと思う

イザナミさんを黄泉に封印した後、イザナギは一度天界へと戻っていった。著しく減退してしまった力を回復しなければと言うと、挨拶もそこそこにふらふらと天へと上って行ったのだ。なるほど封印を終えた後のイザナギは俺ですら勝てそうなほど力が落ち込んでいて、あの状態で地上で仕事が続けられるかと言えば自信を持ってノーと言える。

イザナギは完全に力を取り戻すまで最低でも千年はかかるのか言っていたが、いくらなんでもスケールでかすぎだろ。

さて、俺はと言えばまたわりと暇な日常に戻っていた。

イザナギやイザナミさんと交流していた頃は毎日が充実していたために、一人でぼんやりしている毎日は少し堪えた。人間も信じられないほどの速度で進化しているが、未だ俺と意思疎通をはかれるほどではない。

また人間の進化に伴い、『禍物』ではない異形も生まれ始めた。イザナギが以前やっていた仕事が、ここに来てようやく形になり始めたのだ。

彼らは人間の負の気が『禍気』と結びつくことで、それを器として生まれる。そして負の気が核であるためか、彼らは基本的に人間に対して敵愾心を持っていた。いや、というよりも『本質的に人間を害する存在』と言ったほうが良いだろうか？ 彼らが感情的な理由無く人間を害するとき、人間に対して明確な悪意を持つものは実のところ多くはない。悪戯のようなもの、人間にとっては堪ったものではないが、しかしそれこそが彼らの存在意義とも言えた。

人間を襲い、その際に出される人間の負の気で自身の存在を補填する。そして彼らが人間を襲うたびに、人間の彼らに対する恐怖は増してゆく。そのような循環ができていた。

彼らは『禍物』と比べると少し力が劣るが、しかし知能という点では『禍物』の上を行った。彼らは日々順調に増えているが、彼らを生み出したのは人間の負の感情である。それがこれほどの現象を引き起こしているのだ、イザナギが危惧したように彼らのような存在でおとしどころを作っておかなければ負の気がどのような作用を引き起こしていたか、想像もつかない。それを思えば、イザナギの仕事はうまくいったと言ってもいいだろう。

そして今まで地上に蔓延っていた『禍物』はと言えば、日に日に減少してゆき、彼らに取って代わられつつある。

原因はいくつかあるが、一つは彼らが生み出されていることで『禍気』の濃度が減少していること。『禍物』の出現原因も彼ら同様『禍気』だが、この場合彼らのほうが優先される。負の気は『禍気』に引き寄せられやすく、『禍気』が通常生体を無理やり『禍物』へと変容させることを考えれば、非常に自然な流れだ。

二つは『禍物』が彼らと同じものへと変わっていつていること。上で述べたように負の気は『禍気』へと吸い寄せられてゆく。そして『禍物』は『禍気』を放出している存在だ、負の気が『禍物』とながることもむしろ自然な流れと言える。

そうして、徐々に『禍物』は彼らになってゆくのだ。元々『禍物』は変異した存在。それゆえ新たな変化に対して順応してしまっていた。

最終的に、世界からはほとんどの『禍物』が消えてしまうだろう。
…俺のような例外を除いて。

それに気づいたのは、俺の尻尾が八本になった頃のことだ。そろそろイザナギ帰ってくるかなー、と日々心待ちにしていた俺は、愕然としたものだ。俺が彼らと同様の存在に近くなっていることに。

俺は、正直俺がどういう存在なのか分かってはいない。今までは俺が『禍氣』を放っていたため『禍物』なんだと判断していたが、ここに来て、俺の力が一つ増えたのだ。

人間は、イザナギ同様『靈氣』という力を持ち、イザナギはそれに加えて『神氣』を持ち、そして『禍物』は『禍氣』を持っている。彼らも当然力を持っているが、しかし上であげたもののどれとも違う。…と言って良いかどうかは迷うところだ。何せ彼らの持つ力は人間の『靈氣』と本質的にはまるで同じものだからだ。それでも違うといえるのは、『靈氣』と、仮に『反靈氣』とするが、これらはそれぞれ正反対の力なためだ。

人間は専ら正の氣のほうが多い。そのため、正の氣というフィルターを通すようにして外に放出されるのは正方向の『靈氣』だ。そして、彼らは元々負の氣が元であるため、当然負の氣のほうが多い。結果的に、負の氣というフィルターを通して外に放出されるのは負方向の『反靈氣』というわけだ。

さて、ここまで来たら分かると思うが、俺に増えた力というのがこの『反靈氣』というわけだ。俺の場合他の『禍物』とは違い、『禍物』の特性たる『禍氣』を失ってはいない。つまり完全に彼らと同じにはなっていないのだ。しかし、今更例外だと慌てることもない。俺が例外だったのは『禍物』だったところからだ。そもそも、イザナギは突発的事態で急に天界に戻るようになった。イザナギの機構に不具合があってもおかしくはない。

そして俺が何故愕然としたかと言えば、実のところ歓喜のためだとも言える。この『反靈氣』は『靈氣』の正反対の力だが、しかしその本質はまるで同じものだ。

つまり。

「ようやく、イザナギ式術式を使うことができるってわけだ！」

イザナギに教えられた術式は基本的に『靈氣』に対応したものだ。今までは全く質の違う『禍氣』であつたためにどうしようもなかったが、今度の『反靈氣』は違う。『靈氣』用の術式を『反靈氣』用に変換する程度のことは俺からすれば容易なものだ。

それからの俺は、近年稀に見るハイテンションで森を豪風のように駆け巡った。他にこの嬉しさを表現する方法が思いつかなかったというか、衝動のままに森の中を疾走していたのだ。尻尾も五本ばかりだして『禍氣』や『反靈氣』を撒き散らしながら走り回っていたものだから、血氣盛んな異形を呼び寄せることになったが、俺がそのことに構うことはなかった。

普段ならば二本ほどに抑え、面倒の外敵を呼び寄せないように力の放出も控えている。眼を擬態していると機能が下がっていたように、尻尾も擬態していると俺の全体の力は減退する。上のような理由からむしろ好都合とは考えていたが……

しかし、この時の俺は故意に連中を呼び寄せたとも言えるだろう。

俺は使ってみたかったのだ、『反靈氣』を。

そして、その日引つ掛かった異形は俺もはじめて見るほどの警級の異形だった。

轟々と木々を揺らしながら森の中を爆走していると、そいつは木々をばきばきと破壊しながら現れた。しかしそのくせ足音などは不気味に静かで、そして異常に速い。

そして、がさがさと木々を踏み倒し掻き分け俺のまえにやってきたのは、一匹の蜘蛛だった。

無論ただの蜘蛛ではない、正面から見える高さで既に三メートル強でかいなんてものじゃない。八つの紫の目はどこを見ているのか分からないが、なぜか全て俺を見つめているような気がした。身体には八本ではなく十二本の脚がついており、さらに先端には鋭い鎌がついている。そして全身真っ黒で鋼のような剛毛がびっしりと生えており、全体的には『ずんぐりむっくり』という印象を俺に与えた。

その上、俺を驚かせたのはそいつは『禍氣』と『反靈氣』の両方を放っていたのだ。どうやら俺同様の例外らしい。

「ぎ、ぎぎ、ぎ」

蜘蛛から、錆びた金属と金属を擦り合わせたような妙に濁った音が漏れ出た。どうやらこれが彼？の鳴き声であるらしい。

「とりあえず、はじめまして。ってか？ 初対面ならまずは挨拶からだよね、分かってるよ、お前。さあ、そんじゃ後はまあ…分かるよな」

さて、こうして広大な森の中で出会い、目と目があった以上そこには一つの縁が出来上がるわけでした。まるで一目惚れの恋人同士ようにお熱い関係がこれから始まるわけです。

それはもちろん殺し合い。

「ぎゅ、ぎゅ、ぎゅぎゅぎゅ！」

「わはは、それだそれだ。いやー少々だなー、この感じ！別にバトルジャンキーってわけじゃないけど、男としては闘争本能がうずくというか…今は女かね。まあいいや」

殺気を撒き散らしながら振り上げられた脚の一撃を、俺は余裕を持つてかわす。そうでなければ続く他の脚の攻撃をかわすことなど不可能だ。こいつの脚はまるで伸縮自在の武器のように、次から次へと俺へと飛んできた。しかもそれが移動しながらというのがたまらない。こちらも避けながら禍弾をばんばんばらまいたが、それらをことごとくそいつの身体にぶつかると簡単に霧散してしまった。どうやらあの鋼のような黒い体毛は伊達ではないらしい。

「手数…というか脚数多い上に堅すぎだろ、お前」

「ぎゅ、ぎゅぎゅ」

俺はそいつのあまりの防御力に、俺は呆れ混じりに呟いた。望外な堅さにスピード、そして重量がついたとき、それだけでそれは何物にも勝る凶器となる。俺だからこそ避け切れているが、普通の輩ならば既に脚に貫かれるか、あの巨体に押し潰されているだろう。

この分では近接戦闘も無理がある。この世界に生まれて三千年余り、『禍気』によって魔改造された俺の体躯では想像もつかないほどの異常な怪力を有するが、それでもこの蜘蛛の防御を貫ける気はしなかった。

しかしまあ、それならそれでやりようはあるわけで、そして試したいこともいくつかあった。蜘蛛の脚の攻撃はなおも続いていたが、

俺は避けるのを止め急に足を止めた。

そうすると、もちろん今まで当たらなかった攻撃は俺へと殺到し、激突する。蜘蛛は串刺しにされた俺でも想像するだろうか？　そこまでの思考力を持っているかどうかは不明だ。

ガキン！

「ぎ、、、、」

「わは！　成功だ！」

蜘蛛の脚は確かに俺に直撃した。しかし、それは俺の身体数ミリ手前で何か堅いものとぶつかるような音とともに停止していた。

俺が自身の身体に貼りつくように構えていたのは、遮断結界。イザナギの教えてくれた認識遮断結界の汎用性を高めた上位術式だ。

単純に他者のありとあらゆる干渉を遮断するもので、それが物理的だろうが霊的だろうが構わない。

だが、仮に俺の未知の干渉、例えば能力によるものなどは少々別だ。ただそれも最初の数度しか効かないが。

能力干渉はあまりにも抽象的すぎて普通では解析する事はできない。だが、相手が能力で俺に直接干渉してきたときは別だ。俺を一つの受信端末と仮定することで能力を逆算し、定型化あるいは式化することパターン
プログラムで遮断結界式に打ち込む。

こんな無茶な力技ができるのも、俺の持つ能力ゆえだ。他のやつには絶対に真似をする事はできないだろう。

「んじゃ、次行くぞ」

遮断結界の性能を確かめると、次に俺は宙に浮かんだ。大体蜘蛛よ

り少し上ぐらいまでだ。蜘蛛はどうやら飛べないらしく、脚を伸ばし攻撃してきたが、地上で避けるよりも楽にすいすいと避けることができた。

今度は腹の部分から器用に俺のほうへと糸を飛ばしてきたが、何のことはない。例えこんな巨大蜘蛛であろうとその糸の組成は所詮たんぱく質だ。

俺は糸が俺の領域に入ると同時に、その組成をばらばらに、散り散りにした。

それがすむと同時に、俺は今度は『反霊気』を『禍気』同様丸めて投げた。それはひゆるひゆると蜘蛛に向かっていき、やはり簡単に跳ね返された。

「うーん、大体同じか」

そう呟くと、俺はまたいくつも反霊弾を作り出し蜘蛛へと投げた。そして当然のごとくその全てが跳ね返される。

それを確かめると、俺は再び蜘蛛の前へと降り立った。

「ぎ、ぎぎ、ぎ、」

「何言ってるか分からんけど、もう終わりだ」

「ぎ、ぎ、ぎ、」

俺は蜘蛛が何かする前に、指を振った。

すると、先ほどばら撒いた反霊弾が弾同士で共鳴し線を結び、宙に幾何学的な図形を描き出した。そして、それは蜘蛛を閉じ込めるような形になっている。蜘蛛は本能的に危険を悟ったのかその囲いから出ようとしたが、もう遅い。

ががががが

「ぎ——！！」

線によって形成された面は、蜘蛛が胴体を叩きつけても脚を叩きつけても破れない。そして直に結界内の蜘蛛の姿が不自然に歪み、蜘蛛は尋常ではない鳴き声をあげながら苦しみ始めた。

捕殺結果。

相手を閉じ込め、物理的、あるいは霊的圧力を加え圧殺するかなり物騒なタイプの結界術だ。封印結界の亜種ではあるが、こちらのほうがより攻撃的であることは否めない。無論イザナギに教えてもらったものではなく、俺のオリジナルである。作った当初は使われないんじゃないかと考えていたが、必殺不殺を任意で調節できることに気づいてからは有効活用することを決めていた。

蜘蛛の鳴き声が聞こえなくなったところで、俺は結界を消した。

「概ねうまくいったか成功か。けど便利すぎだろ、この能力」

三メートル強の巨大蜘蛛が倒れ伏し、ピクピクと足を動かしている前で、俺は改めて自身の能力に戦々恐々しながら独りごちた。

能力って結構ずるいと思う（後書き）

ようやく術が使えるようになりました。結構いい加減ですが、勘弁してください。

ちなみに、イザナミやら主人公やらの神気＝神力は信仰には依存しません。主人公はまだ出てませんけど。

莊嚴なる天照大御神 わらわら（前書き）

今回短いですね。つなぎみたいな話でしょうか。

アマテラスまで出せましたし、えー。んも近そうです。がんばれ自分。

莊嚴なる天照大御神 わらわら

イザナギが天に上って1500年ほど。俺の尻尾がとうとう九本になった頃に、ようやくイザナギが帰ってきた。

そのときはもうほとんどの禍物の姿は消え、妖怪が世界主流の異形となっている。ちなみに妖怪とは人間の呼んでいた呼称だ。俺も彼らだとか異形だとか言うのは分かりにくいので、妖怪に統一することにした。しかし妖怪とは、なかなか言いえて妙ではないか。妖しき怪異とな。まさに人間側からすればそんなところだろう。

今の地上をイザナギが見たらどう思うだろうか？ 妖怪の出現に困惑するか、禍物の消失に驚愕するか、予想通りの結果に満足するか。

それはともかく、突然俺の家にやってきたイザナギは一人の少女を連れてきていた。髪や顔はイザナミさんに似ているが、雰囲気というかそういう感覚的なものはイザナギに似ていた。髪は頭の横で二本に縛っており、この時代にはそぐわないが、彼女にはとても似合っていた。

「久しぶりだな、ウカノ」

「…ああ、本当に久しぶりだ。千五百年ぐらいだったか、結構長かったな」

最低でも千年、とは言っていたが、振れ幅五百年は長すぎる。そう思った俺は、少々不機嫌さを混じらせながらイザナギに暗に理由を聞くと、イザナギは渋い顔をして言った。

「回復は予想通り千年と少しで完了したのだがな。しかし少々仕事

が溜まっていたようで、上の連中に引き留められておったのだ…あそこは人は多いのだが怠け者も多い。時折我らにしわ寄せが来るのだ」

「なんだそりゃ。天界の癖に世知辛いな、おい。怠け者が多いって、天人の気風か？ 高貴なお人は仕事はしませんってか？」

「どうだろうな…しかし地上人は勤勉であるのに情けない。それでウカノ、ずいぶんとまた尻尾の数が増えたのではないか。それいたいどうなっておるのだ」

「俺に聞くなし。俺だって知らんよ。まあどうせ九本で頭打ちだろ」

現代で聞いた話では九尾の狐が最多だったはずだ。十尾だとか聞いたことないし。あれ、そもそも俺は妖怪九尾に分類されるんだろうか。反霊気というか妖気？は持つてるけど、元は禍物だしな。

「ほんとだ、すごい！ ねえねえ、その尻尾私に触らせて？」

と、イザナギと話していると、イザナギが連れてきた例の少女が口を出してきた。イザナミさんとは違いずいぶんと活発そうな子だ。別にイザナミさんが暗いと言ってるわけじゃないが。きらきらとした目を向けている先にあるのは無論俺のもふもふの尻尾である。とっさに俺は尻尾を背中にかばった。しかし、九本だ。俺の小さな身体では隠しきれない。擬態して隠してしまえば良かったのだが、そのときの俺は慌てていて思いつかなかった。

「おいイザナギ、誰だこの娘…ってぎゃああああ！ ひっぱるな！痛い、痛いって！」

その少女は瞬間移動のごとき速さでイザナギの後ろから俺の横に移動すると、俺の尻尾をもふり始めた。それも、それがあまりに熱烈であるために、少しひっぱられて正直痛い。強烈な痛みよりも、こういう地味な痛みのほうが存外響くものだ。

「む、すまぬ。…こら！ 勝手にそういう事をしてはならぬと、いつも言っているだろう！」

「だって父様！」

『父様』だって。なんだか親子みたいだな。もしかして、もしかするのだろうか。

イザナギは少女を引き剥がすと、少女の腕をつかんだまま再度俺の前に立った。少し尻尾の毛が持っていたが、笑って許すのが大人げあるだろうか。

「すまなかったな、ウカノ。この娘は我らの娘、アマテラスという。補佐はイザナミのはずだったのだが、しばしの間地底から動けなくなってしまったのでな、代わりに連れてきたのだ。が、イザナミに似て可愛いものが好きでな。それにイザナミと違って遠慮せぬから困っておるのだが…というわけで犠牲になってくれんか」

「嫌じゃ！」

神が『人柱になってくれ』とか冗談じゃなさすぎる。しかし、アマテラスか。こちらではアマテラスはカグツチの姉になるのだろうか？ ずいぶんと子供っぽい。とはいっても、流石神の一柱といったところか、持っている力は大きい。まあ、俺よりも幾分か大きいというぐらいで、イザナギとは比べるべくもないが。イザナギはアマテラスを俺のほうへ少し押し出した。

「アマテラス、彼女はウカノミタマだ。地上にいる間は世話になるだろう」

「はじめまして！ アマテラスです！ よろしく、ウカノミタマちゃん！」

「ウカノでいい。そして『ちゃん』をつけるな」

世話になるつつつても、俺は大して何もしたことないけどな。イザナミさんの封印式の時にちょっと手を貸したぐらいで、あとはイザナギの家でごろごろしていたぐらいか。そういえば、イザナギはどこに住むのだろう？ 前住んでいた場所は、千五百年経った今でさえぺんぺん草一本生えていない。神殺しの炎はどうやらあの場所の生気すら焼き払ってしまったらしい。はて、あの場所に生物が蘇るのはいつのことやら。

「よろしくね、ウカノちゃん！ 尻尾と耳触らせて！」

「聞いてやしねえ。それと触らせるのは嫌だ、お前引つ張るもん。俺だって痛いんだよ」

「うむ、それではウカノ、我は丁度いい土地を探してくるからな。この辺りは森ばかりで少々我らには不便なのだ。というわけで、アマテラスのことはしばらく任せたぞ。終わったら迎えに来るのだな」

「へ？ …世話になるってそういうことか！ おいイザナギ！ 俺を円形脱毛症にするつもりかっておい、行くな！」

訴え虚しく、イザナギは俺とアマテラスを置いてどこぞへと飛び去っていった。その場に残ったアマテラスは、止めていたイザナギがいなくなればもう歯止めは効かないわけで。

「ウカノちゃん！」

「どうあ！ 結界！」

「え？ はぶっ」

襲いかかってきたアマテラスを遮断結界で物理的に止めると、俺は溜息をついた。落ち着いた俺は尻尾や耳を隠せることを思い出し、耳も、尻尾も九本全て擬態して隠してしまった。アマテラスは『あー！』とか言いながらしょぼんとしていたが、罪悪感は大して感じない。イザナミさんとの人徳の差を思い知るがいい、小娘！ …俺のほづが年下だろうか。まあいいや。

「はあ…とりあえず、上がってけ。前、茶の木に似たものを見つけたからな、茶ぐらいは出そう」

「あ、うん！」

そういうと、アマテラスはおとなしく俺についてきた。尻尾や耳の絡まないアマテラスはずいぶんと素直だった。

ちなみに、俺の家は昔に建てたものとはもう違う。何度か壊したりして建て直してきたが、これは何代目だろうか。どちらにせよ、普通に建っている間は俺が組成式を固定しているため、腐ったり劣化したりということはなく、自然に朽ちたものはひとつとしてない。昔は低気圧や強風に破壊されたこともあったが、結界を使えるようになってからはそんなことも一度もない。

今の家の構想は純和風といった感じた。

俺は引き戸をからからと開けて、アマテラスを中に入れた。アマテラスは和風の家が珍しいのか、ずいぶんときよろきよろしていたが。

イザナギがアマテラスを迎えに戻ってきたのはそれから三週間ほど経ってからだった。その間俺の精神力はアマテラスの苛烈な攻めによつてがりがりと削られ、最終日にはせめてアマテラスが尻尾を乱暴に扱わないことを条件に妥協したぐらいだ。しかし、その特訓？のお陰か常時結界を張り続けていられるようになったのは幸いである。

アマテラスの帰った後に、俺が少しくたびれた尻尾の手入れをしていると、小さなはげを見つけて涙したのは蛇足である。次の日には元に戻っていたので結果的には俺の精神はぎりぎりまで平穩に保たれていた。

そして、俺はこんなことはこれで最後だと思っていた。

イザナギの定住地が決まっただけからはむしろ、頻繁にアマテラスが俺のところ遊びに来ることや、イザナギの地上における魂循環システムや彼岸づくりなどの仕事をなぜか手伝うことになるなどは、この時の俺は知る由もない。

それでも、そんな日々には不満を感じなかったのは、何だかんだいって俺が彼らのことを好いていたからだろう。

騒がしい毎日だろうと、充実しているというのならば、それはきつとこれ以上ない幸せなのだ。

莊嚴なる天照大御神 わらわら（後書き）

あの世づくりまで書いてるとぐだぐだしそうなのでそれはスルーです。あとあとちまちま出すかもですが。

九尾の次は八尾？（前書き）

今回もオリ設定注意。

主題にようやく引つ掛かりました。

副題は八尾になってますけど、厳密にはやっぱり尻尾は九本です。
こんなオリは納得できねえな方は今更ですがブラウザの戻るのボタンをクリックしてください。

九尾の次は八尾？

イザナギが地上に戻ってきてからは、本当に騒がしい日々だった。アマテラスがあまり頼りにならないのか、俺が手伝うこともしばしばあり俺もあちこちを飛び回ったものだ。まあイザナギの仕事の手伝いは基本的に俺の善意なので、イザナギにどうこう言うつもりはないが。

件のアマテラスとは言えば頻繁に俺の家にやってきては、俺の尻尾を狙ってくる。天界の怠け者ってこいつじゃないのか…。一応結界で防いでいるものの、俺の結界は概念結界だとかそういうぶつとんだ代物ではないので、こちらの出力を大幅に上回ると突破されてしまうことがばれてしまった。特に物理攻撃には弱かったりする。まあそのたびにこちらも結界術の腕を上げているので悪いことばかりではない。どちらにせよ、欠点を残したままなのは否めないが。とりあえず新しい結界作りは今後の課題だ。そしてアマテラスにあえて言わせてもらうなら、もう少し自重して欲しいものだ。もう少しおとなしくしていれば、尻尾を触るぐらいなら許可するのだが。

彼女も時折数年単位で来ないときがあつたが、そんなときはマガラゴと遊んでいた。

マガラゴというのは以前殺り合った大禍蜘蛛のことで、それから何度か顔を合わせていた。殺りあつたのは最初の一度だけで、今ではお友達だ。よくよく見てみると愛嬌のあるような顔をしている、様な気がする。名前はなかったそうなので俺がつけた。彼の顔を見ているとなんとなく浮かんだ言葉がそのまま名前になっただけで、大した意味はない。幸い彼はこの名前を気にいってくれているようだが、『ぎ』としか言わないので意思疎通が容易でないのが難点か。多分この辺りでは俺同様唯一の禍蜘蛛だろう。他の禍蜘蛛は大体妖

怪蜘蛛になってしまった。とはいってもマガラゴも純粋な禍蜘蛛というよりは、妖怪とのハイブリッドだ。禍物の力に妖怪の知能を持ついいところ取りである。そんなわけでここら一帯妖怪の頭をやっているらしい。最近一方的に妖怪が人間にやられることが増えているようで、そのことを愚痴っていた。

そういえば、最近酒を造る暇があまり取れず難儀していたが、相変わらず瓢箪はぶら下げている。少し前に瓢箪の中に虫が棲みついたのだ。外見はつるつるのサンショウオモドキ。きつと『酒虫』というのはこういうのなんだろう。虫というか、酒の精みたいなもので、水を入れてしばらく置いておくと美味しい酒が勝手に出来上がっている。

おそらくこの瓢箪を数千年も酒瓢箪に使っていたために、この中に生まれたのだろう。実害は無いし、むしろ利益ばかりだ。まだ意思疎通を図るほどの知能はないらしく、俺の呼びかけには反応しない。また放っている霊気も極少量だ。いつか話せるぐらいに成長してくれたら、話し相手に最適なんだがなあ。

さて、それは俺の尻尾が九本になってから千年ほど経ってからのことだった。

とある朝のことである。起きだしてきて早速尻尾に違和感を感じた俺は、ぼうつとした頭で自分の腰を見た。

「なんじゃこりゃあっ！」

擬態して隠しているとかそんなことはなく、俺の尻尾が一本消えて八本になってしまっている。それを理解した時、俺の眠気は一発で

吹き飛び、しかし混乱した頭のままで俺は家を飛び出していった。

「イイイイイザアナギイイイイイッ」

多分このときの俺の行動原理は『困ったときの神頼み』だったように思う。戸を壊しそうな勢いで吹き飛ばし（壊れた）、地を踏み碎いてイザナギの屋敷のある方へと空気を摩擦で燃やしながら飛んだ。実はここ五百年ばかり、アマテラスがこちらに来たり、マガラゴと遊んだり、酒虫と戯れたりといザナギの家には行つてはいなかった。だからイザナギの家が見えるはずのところまで飛んでいった俺はさらに仰天した。

「なんじゃこりゃあつ！」

そこには、五百年ほど前はなかったはずの街ができていた。しかもただの街ではない、元現代人の俺から言わせてもらえば、所謂未来都市である。

様々な人間があちこちの舗装された道を行き交い、たくさんの車が音もなくすいすいと車道を走っている。世界の風景にそぐわない高い建物が立ち並び、ガラスらしきものが太陽に反射しきらきらと光っている。

何故気づかなかったし！

こちらのほうにはしばらく来ていなかったとはいえ、これほどのものが作られていることに気づかなかったことに俺は頭を抱えた。そもそも、以前見た時の人間は弥生だか縄文だか、それぐらいの文化しか持っていなかったはずだ。それがいつの間にかこんなことに……人間といえど、成長スピードが半端じゃない。

とにかく、人間のど真ん中にこの姿のまま飛び込むわけにはいかず、俺は耳と尻尾、さらに禍気を隠し、特殊な結界をフィルターに見立てて張ることで、妖気を靈気に見せかけてから人間達の街に入り込んだ。このときも少しの違和感を感じたが、未だに慌てていたためにそのことを気にしている余裕はなかった。

街に入るにも、入ってから警備がしつかりとしてあったが、人間に擬態しかつ高度な認識遮断が使える俺にはまるで効果がない。街の中には人工的な風景に満ちている。風情のある風景など一切なく、とても無機質な世界だった。イザナギの家がこんな街の中にあるなどあまり考えたくはなかったが、イザナギの気配は間違いなく街の中心辺りにあった。

俺がぱたぱたと小走りにそこまで行くと、イザナギの家はこの未来都市の中で変わらず存在していた。俺の和風の家を真似て作られたらしい和風の屋敷。五百年前に見たものとまるで同じものだ。変わっているのは周辺の風景だけで。

「イザナギッイザナギッ」

ぱしぱしと入り口である引き戸を叩き、俺はイザナギの名を叫んだ。アマテラスが出てきたらどうしようとか考えないこともなかったが、今の俺にはそれ以上に優先すべきことがあった。はたして出てきたのは、運よくアマテラスではなく久しぶりに顔を見るイザナギだった。

騒ぐ俺を、イザナギは宥めながらとにかく俺を家に上げてもらった。そして、座敷で俺が一息ついたところで、イザナギは口を開いた。

「ずいぶんと久しぶりではないか？ ウカノ」

「そうだな。しかし俺は思い出話をしにきたわけじゃない。この街のこととか色々聞きたい事はあるが、まずはこっちからだ。なあ、お前こいつを見てどう思う?」

と、俺は今出せる尻尾を全て出してイザナギに見せた。九本だったはずの尻尾は今は八本。これにイザナギはなんと答えるだろうか? 慌てて来てはみたものの、俺は少し冷静さを取り戻してきていた。よくよく考えれば、イザナギ自身狐に詳しいわけではない。九尾狐なんかも、この地上では俺ぐらいのものだ。が、イザナギはこともなげにこう言ったのだった。

「おお…霊格が上がったのだな。我はウカノにおめでとつ、と言えはよいのだろうか?」

「へ?」

「ううむ。やはり、五百年というものは短いようで長いということか…以前会った時はまだこんな兆候は見られなかったのだがなあ」

「ちょっと待ってちょっと待って、五百年が長いか短いかはいやどうでもよくて、え? 俺の尻尾が八本になっちゃったことに関しての反応は無し?」

俺がイザナギの意外な反応に戸惑いながら言うと、イザナギは俺がいつか見たような顔をした。どこか呆れたような顔である。イザナギのこの顔を見るのは黄泉でイザナミさんを見たとき以来で…

「前にも言ったはずなのだが…。『眼』を閉じていれば見えるものが見えないのも当然であろう…」

「え！」

確かにこのとき俺は眼の擬態はまだ解いてはいなかった。しかしそれが尻尾と何か関係があるのだろうか？ とにかく俺は、あの時と同じようにイザナギの言葉にしたがい眼の擬態を解いた。瞳孔が縦に割れ、瞳がますます金色を帯びていく。

すると、八本の尻尾の間に半透明の尻尾が一本見えてきた。その感覚はいつかの魂状態にあったイザナミさんとどこか似ている。

「俺の尻尾が霊体化してる…？ なんだこれ、聞いたことないぞ」

「ヌシはもともと例外だらけであつたろう、今更だと我は思うのだが。おそらくは霊格の上昇に伴って肉体から逸脱してしまったのであろう。だが、それなら逆に受肉させることもウカノには可能はずだ。自身の領域内での操作はお手の物であろう？ それに、気づかぬか？ ずいぶん前に我の言った通りになったぞ。今のウカノには神気がある」

次から次にイザナギの口から出てくる言葉に、俺は目を回した。しかし、その一方で頭のどこかは冷静だった。

まずは神気の確認。なるほど俺からはイザナギのものと同じ、高密度の力の塊、神気が放出されていた。これが禍気と隠したり、妖気を霊気に擬態していたときに感じた違和感の正体だろう。これでかなり使える術の幅は広くなることが見込まれる。

そして、霊体と化してしまった俺の尻尾の受肉作業。これは存外簡単だった。擬態の時と同様だ。俺の意思一つで尻尾は霊体実体と切り替えられるらしい。そこではじめて気がついたが、尻尾を霊体化しているときは俺の力は著しく上昇していた。これがイザナギの言う、霊格が上がるというやつなのだろうか？

「ようやく神気が出てきたってのに実感が無いな…一応妖気で事足りてたし、尻尾が消えたってことや、ここにいきなり未来都市ができてた方にびびってたし。…ってそうだ。いったいどうなってるんだ？　ここは確か五百年ほど前はお前の家しかなかったんじゃないか？　それがどうしてこんなことに…」

五百年ほど前、確かにここにはイザナギの似非和風の屋敷しかなく、あとは以前のイザナギの家のように草原が広がっているだけだった。以前ほど広大な草原ではなかったが、しかし周囲に人間の集まりはなかったはず。この劇的ビフォーアフターが気にならないわけがない。

しかしイザナギは首をかしげながら軽く言った。

「ううむ…ウカノとともに地上の魂の輪環機構を創り上げてからは、各地で最終微調整を行っていたのだがな…いつの間にか人間が集まってきたな、気づいてみればこんなことになっていたのだ。しかし今代の地上人は凄まじいな。この短期間でこれほどの発展を遂げようとは…さしもの我も仰天した」

はははと笑いながら事も無げに言うイザナギに俺は嘆息した。いつの間にか、って相変わらず時間感覚ぶっ飛びすぎだろ。…俺も人のこと言えないか。

しかし、他に重要そうなことを言っていたイザナギが、俺は気になり思わず尋ねた。

「…最終、ってことは、そろそろ戻るのか」

少しトーンを落として問うた俺に、イザナギも笑いを潜めて真顔になると言った。

「近いうちに、又シに挨拶に行こうと思っていたのだがな、丁度よかった。…あと数年もすれば、我は天界に戻る。やることはほとんど終わったのでな、いつまでも地上にいるわけにもいかぬ」

「…そうか」

「うむ」

「……」

「……」

しん、と清涼な座敷が静まり返った。俺もイザナギも何も言わない。

イザナギ、イザナミさんと出会ってからおよそ三千年。イザナミさんは今は地底にいるし、イザナギも千五百年ばかり天界に戻って地上にはいなかったが、こうしてみればとても感慨深い。感覚的には十年も経っていないように思えるが、それは俺がどこか人間だったときの感覚を捨て切れていないからだろうか。俺の異常に気の長い時間感覚は確かに人外のものだが、過ぎ去った時間への思いはまるで人間のようなものだ。

俺はイザナギのことを親友だと思っているが、イザナギは俺のことをどう思っているのだろうか。時折、こうして俺の臆病な部分が顔を見せる。気恥ずかしくて怖くて、面と向かって聞くことはできない。せめてイザナギも俺といえる時間を楽しんでくれていれば、それは俺にとってもとても嬉しいことだ。

別に今生の別れというわけではないのに、何故こう湿っぽくなっているのだろう。俺もイザナギも、多分無限に近い寿命を持っている。

百年後か千年後か万年後か億年後か、いつなど想像もつかないが、生きてさえいればいつかまた出会うこともあるだろう。あの日、ぱったり森の中で出会ったように。

とにかく、こんな空気は俺にもイザナギにも似合わない。だから俺は瓢箪をつかみイザナギの方に掲げて、肅々とした雰囲気を一掃すべく一言、こう言った。

「…呑むか」

「うむ」

困ったときの酒頼み。今日から少なくとも数日は夜通し酒盛りになるだろう。

俺は器と酒を取りにいくイザナギの背中を見ながらそう思った。

「なあイザナギ、さっき自分で取りに行ってたけど、この家お前一人なのか？ アマテラスはどこ行っただんだ？」

「今は確か天岩戸の方に行っておるはずだ。む、言い忘れておったが、アマテラスは我が戻った後もしばらく地上に残るようだぞ」

「ふーん。って、天岩戸って何だよ。さりげなく知らない単語出すのは止めてくれ」

「ふむ、言ってなかったか」

「ああ、聞いてない」

「…話の腰を折るでない。我は人間には過干渉はせぬようにしてあるので詳しくはないのだが、この街は三つの部門で全体を統括している。一つは『行政部』、一つは『軍事部』、もう一つは『技術部』。天岩戸は『技術部』の中樞で、アマテラスはその長というわけなのだ」

「へえ…三権分立ねえ。最近妖怪が狩られてんのはその『軍事部』の仕業なのか？」

「いや…『軍事部』は基本的には防衛しかせんはずだ。妖怪を狩っているのはおそらく『行政部』の私兵だろう。確かに権力は三つに分けられているのだが、完全にというわけではないのだ。『行政部』や『技術部』が些細とはいえ独自の軍事力を持っておったり、『軍事部』や『技術部』が少しだが行政権を持っておったりな。それで権力の平均化を図っておるのだろうが、いつかはそれも崩れるのだろうな。どういう形かは分からぬが」

「人間てなそんなもんだろう。純粹な力だけで全体を纏められるほど、簡単な生き物じゃない。それで、暴走してんのは『行政部』か？ その長…ついでに『軍事部』の長は何ていうんだ？」

「ふむ、実は二人とも私の養子なのだ。どうやら力が大きいゆえに捨て子になっていたようなのだが、たまたま我が拾って育てておつた。どちらも優秀な子らだ。『行政部』の長は『ツクヨミ』、『軍事部』の長は『スサノオ』という。どうだ、良い名だろう？」

「……なるほど。——そうだな、良い名だ」

九尾の次は八尾？（後書き）

ああ…ようやく原作キャラが出せます。長かったですよ。
大昔東方の定番、大古の未来都市です。

ちなみに、しばらく後に時間が大幅に飛ぶと思うので、**霊尾**が増えていくのは描写されません。ごめんなさい。

薬剤少女（前書き）

来ました。都合上短くなってしまうましたが、原作キャラです。けど口調とかわけわけかめなので、半ばオリキャラと化しています。ご了承くださいのほどを。

薬劑少女

イザナギの屋敷を出た俺は、早速アマテラスの天岩戸に向かうことにした。別にアマテラスに進んで会いたいわけではなかったが、『天岩戸』自体には興味がある。アマテラスへの挨拶はそのついでだ。それにアマテラスの仕事をしている様というのも見てみたい。普段の様子からは全然想像がつかないので。

ところで、俺の服装は人型になった時にいつの間にか着ていた白い着物から何も変わっていない。言うならば、とても古めかしいものだ。仮に現代の街で歩いていれば目立つ、それは目立つ。それでもこの未来都市で俺が堂々と歩いていて目立たないのは、認識障害のせいもあるが、他に多種多様の服であふれているという理由もある。急激に発展したせいか服飾文化が安定しておらず、通りには様々な種類の服を着た人間が歩いている。俺の白いシンプルな着物なんぞは、その中では街の景観の一部にすぎない。また人間の髪や目の色も様々で、丸ごと染めているんじゃないかと思うぐらいだ。俺の真っ白な容姿が目立たないのはいいんだが。

イザナギに聞いた『天岩戸』を見つけたのは、屋敷を発って一時間ほどしてからだった。一際立派な研究所といった風情で、これまた多種多様の人間が出入りしている。

俺はその中の一人にぴったりとくっついて侵入していった。警備員？だとか監視カメラ的なものはあったが、指紋認証だとかそんなハイレベルなものはない。一応結界に属性を付加して透明になってみたり、体温も偽装してみたりしたが、認識障害もしているので意味

はない気がする。

それから、アマテラスのいる場所を見つけるのにも苦勞した。結局『主任室』とか言う場所の情報を、受付嬢の認識を騙しながら受付にあった機械から入手したのだが、その主任室の入り口にはこれまた障害があつた。…指紋認証である。ここかよーとか思つたりしてみたが、俺でもこれはどうしようもない。認証端末を騙くらかすことはできないし、破壊するのも論外だ。扉をすり抜けでもできたらいいが、そんなことができるのは尻尾だけだ。尻尾だけ通り抜けてもしようがない。

俺は諦めて、他の端末からクラッキングでもしてみようかと考えていると、俺の歩いてきた通路から一人の少女が歩いてきた。長い白い髪をお下げにして一本に縛り、青赤のおかしなナース服の上に白衣を羽織っている。

少女は『主任室』の扉の前で立ち止まると、指紋認証端末に指を差し入れた。ぴつ、ぴつと、無機質な電子音とともに端末の画面が目まぐるしく変化してゆく。俺はといえば、それを真横から眺めていた。相変わらず認識障害を行っているため、少女が気づく様子はない。

ほどなく、しゅいんとほとんど無音で扉が開く。少女は特に臆することなくつかつかとそこに足を踏み入れた。俺はすかさず少女がそこに入ると同時に、身体をスルリと中へと入れた。

が、そこはアマテラスの部屋ではなかったらしく、彼女はいなかった。

そもそも、そこは主任室というよりは研究室だった。隅っこには申し訳程度に執務スペースが置いてあるが、ほとんどはさまざまな薬剤や器具で埋め尽くされている。

少女は執務机で何事かしていたが、その何かを終えた後は、栓をして並べてある試験管の方へと歩いていった。どうやらこの主任室は少女の部屋らしい。

「という事は、^{天音}ここでも結構上の人間なのかな」

主任室の主ということは、多分そういうことだ。つまり、アマテラスの場所も知っている可能性が高い。そう思い、俺は少女に話しかけることにした。何気に人間に話すのはこれが初めてなのだが、俺は大して気にしていなかった。

「なあ」

「!!!? 誰!?!」

認識障害を解いて少女に話しかけると、少女は身体を強張らせて叫んだ。しかし、その時点で少女は一本の試験管を手にとっていた。少女が驚いた拍子に持っていた試験管は少女の手から滑り落ち、試験管は床にぶつかって割れ、中の溶液も無残に床に飛び散る。

「あーあ……」

「!?!」

さすがに驚かせた俺が悪かったかと思い、俺は少女の足元まで歩いていくと、飛び散った溶液や試験管に指を乗せた。瞬間、それらが落ちて割れてしまう前の姿へと戻った。……ただし完全に元に戻ったのは試験管だけだ。溶液が反応してしまっているのかいないのかわからない俺ではどうしようもない。

それに栓をして、とりあえず試験管たてに戻した俺は、改めて口をぱくぱくとさせている少女の方を見た。彼女との距離は既に50？程度、ほとんど目の前にいる。そこで、俺ははたと気がついた。

「俺の方が背が低い…」

2cmほど、負けていた。数千年前から少しの変化もない身長では仕方がない。…と、俺は思っていたが、尻尾が霊体になると同時に少し成長していたことをこのときは知らなかった。幽霊みたいになったのに成長つてどゆこと？と首をかしげるのはずいぶん後のことだ。

「…貴女、誰？ どうやってここに入ったの？」

少しは落ち着いたのか、警戒の現われか身構えながら俺に向かって誰何する少女。俺の目的は彼女ではないので、特に何かをするつもりはない。…場所聞くために暗示とかするかも！

「俺はウカノミタマという。天岩戸にいるはずのアマテラスに会いに来たんだがな、どこにいるのか分らん。ここは、『主任室』はずれだったしな。で、どうやって入ったかといえば、あんたについて入ってきた。あんたが気づかなかっただけだ」

「わけが分からないわ…アマテラス様に会いに来たって、知り合いなの？」

「そうだな、そこそこ古い知り合いだ。それで、アマテラスのいる場所を教えてくれたらありがたいんだが」

「…信用できないわ」

「だろうなあ」

「でも、以前アマテラス様が白い狐の友達のことを話してたわね。ふかふかの尻尾が九本もある、言葉は乱暴だけど可愛い娘だって。私も、それを聞いた時はアマテラス様が何を言っているのか、良く分からなかったんだけど、もしかして…」

アマテラスに他に狐のお友達がいなければ俺のことなのだろう。だけどそれって妖怪がお友達っていつてるようなものだろ。尻尾が九本ある普通の狐とか、ないわー。いいのか責任者。いいのか少女。妖怪は基本的に人間の敵なはずなのだが。

「俺のことだろうな。で、妖怪？が入り込んでるわけだが、どうする？」

「…でもあなたには尻尾がないわ。それにどう見たって人間でしよう」

俺が妖怪、というか禍物だけど、めんどいのもう妖怪でいいか。少女から俺が妖怪であることに反応はない。

妖怪を相対したときの人間の反応は、恐怖、逃走、失神、とこんなところだが、たまに突然変異的な人間がいて、そういう人間は闘いや様子見を選ぶ。それは他の人間と違い余裕がある証拠だ。会った事はないが、イザナギが言っていたツクヨミやスサノオがいい例だろう。つまり、妖怪に劣らぬ力を持っているということだ。

少女もおそらく突然変異的な、力を持っている方の人間なのだろう。

俺は少女の言葉に答えるべく、尻尾を九本全部を一瞬出してまた尻

した。

少女は呆氣に取られた顔をしていたが、直に冷静な顔つきに戻すと俺の要望に答えてくれた。

「…この部屋を出て右に10m、突き当たりでさらに右に14m、そこから今度は左に8m行ったところに扉があるわ。データ上には記載されていない場所だけど、アマテラス様の趣味でロックはない扉だから、そのまま通れるはずよ」

「そーか、助かった。じゃ、ばいばい」

「ば、ばいばい」

と、俺は颯爽と扉に向かった。しかし、その歩みは途中で止まる。

「あー……っ!!」

突然の叫び声に振り向くと、少女が例の試験管を持って中の溶液を見ていた。そういえば、俺があれを元に戻したことに對しては何も言わなかったが、よくあることなのだろうか。

「ちよつと！ これ作るの苦労したのよ!? どうしてくれるのよ！」

「あん？ 何がいけないんだ？」

俺は扉から執務机の方に移動しながら少女に聞いた。少女は試験管の中の青い液体を指差しながらなおも叫んだ。

「これは元々は緑色だったのよ、それが空気と反応したせいで青色

に：ああもう！　またやり直したわ！」

俺は執務机の上の記録紙をざっと見やり、それから少女のほうへと歩いていった。それから、その手にある試験管を奪い取り、栓を抜いて少し振ってからすかさず栓をしなおし、少女の手へと戻した。その間僅か四秒。

突然の俺の謎の行動に、ぽかんと口を開けている少女を尻目に、俺は今度こそ主任室を颯爽と去っていった。

部屋に一人残された少女は、ウカノが出て行った後に我に返り、扉を恨めしげに見つめながら肩を落とした。『どうしてくれる』と、見るからに門外漢の少女に言ったところでどうしようもない。

言いようもない虚無感を感じながら、少女は手の中にあつた試験管を何気なく見つめた。

「な…！？　何で…？」

一度酸化してしまったものが、そう簡単に戻るわけがない。ましてや、少女が扱っているのは通常の溶液よりもはるかに高度で繊細なもの。そして、それを扱えるのはこの天岩戸の中でも少女ぐらいのものだ。だからこそその主任、だからこそその専用の研究室である。

しかし、少女の手の中にある試験管の中では緑色の溶液が静かにゆるめいていた。

薬剤少女（後書き）

書いた話とか読んできると、文章がへたくそで恥ずかしくなってくるんですよ。ところどころ修正はしていますが、文章全体はそのままにしているので、なおさらですよ。前よりかはマシになってると思いますが。

神代の三貴子は斯くの如し（前書き）

例の二人が早速来ました。スサノオには注意です。激しくオリを含みます。これほとんど毎回言ってますけど、そろそろくどいですね、正直。やめましょうか。

神代の三貴子は斯くの如し

少女に言われた通りに通路を歩けば目の前には普通の扉。豪華でも華美でも荘厳でもなく、無機質なこの通路においても絶妙に浮いている、どこまでも“普通の”扉だ。むしろ民家にあるほうが自然な扉が目のある。アマテラスの趣味と言っていたが、あいつはこんなアンバランスを楽しむやつだっただろうか。

扉にはなるほど鍵というものは一切なく、取っ手を掴んで押し開ければ簡単に扉は開くだろう。無用心と、思えるかもしれないが、少なくともアマテラスの相手ができる人間は此の都市にはいない。無用な用心ならば、彼女は趣味を優先するだろう。しかし仮に用心の必要があったとしても、趣味を先に置きそうだと思えるのは、あのアマテラスだからだろうか。

扉を押し開け中を見ると、そこは一種の別空間だった。部屋の中の雰囲気はアマテラスのイメージとかけ離れている。床には絨毯がひかれ、部屋の奥には重厚な執務机が置いてある。壁にはいくつもの棚が並び、その中には無数の紙媒体があった。そして部屋の中央には低いテーブルがあり、それを囲むように置いてあるソファには三人の男女が座っていた。テーブルにはその人数に合わせて、ソーサーに乗った三つのカップがめいめい湯気を立てている。

一人は銀髪の男で、尖った雰囲気醸し出していた。美形の顔も、その空気のせいでどこか神経質に見えてしまう。そして、男のかけているソファには一本の両刃の剣が立てかけられている。

一人は金髪の女で、男とは違い落ち着いた感じだった。飄々としていて、その態度に大人の余裕が見受けられる。こちらは壁に巨大な

黒い大剣を立てかけていた。その存在感は男の剣とは段違いである。そしてもう一人は黒髪の女で、言わずと知れたアマテラスである。前二人は人間なのでアマテラスが一番年上のはずだが、しかし三人の中では一番子供っぽい。人間二人も、どちらかといえば少年少女ぐらいの容姿だが、少なくともアマテラスよりは大きかった。

俺が扉を開けたのに最初に気づいたのは、扉がすぐ見える位置に座っていたアマテラスだった。アマテラスはその子供っぽい顔に喜色を表し、つかつかと扉の方にやってくると、

「あ——————誰？」

俺の腰を見ながらそう宣いやがったのだった。

「顔を見る顔を。俺を尻尾の有無で判別するな」

「あはは！ ごめんごめん。久しぶり、ウカノちゃん！」

「それほど久しぶりでもないと思うが、うんまあ久しぶり」

「久しぶりだよー、ああ、もう私はウカノちゃんのもふもふ成分が足りなくて…あ、とにかく入って入って！」

アマテラスは俺の手を取ると、部屋へと招き入れた。アマテラスと話していたらしい二人の男女は、アマテラスの突然の行動には慣れているのか、特に大きなリアクションもなくアマテラスと俺の方を向いている。金髪の女は俺と目が合うと笑顔で会釈をしたが、銀髪の男の方はといえば、剣呑な目つきで俺を見つめていた。その手は、ソファに立てかけられている剣に伸びている気がする。

それはいくら美形でも、『何あれ感じ悪い』とでも言われそうな態度だった。

えてしてその言葉が使われるとき、態度が悪いのはむしろそう言っている方であることも多いが、この男の態度には熟考の余地はない。何せ俺に向けられる視線には、殺気すら混じっているような気がするのだ。

「あ、二人とも、前言ったような気がするけど、この子がウカノミタマだよ！」

ガキンツ！

と、アマテラスが言い終わるか言い終わらないかのうちに、俺の左手の人差し指と中指は剣を挟んで止めていた。止めずとも、彼の腕では俺を斬ることは出来なかっただろうが、真剣白羽取りをリアルでやってみたかったがためにやってしまった。失敗しても切れやしないので、危機感もスリルも爪の先ほどもなかったが。

そして、俺を攻撃して来たのは無論銀髪の彼である。俺に一体何の恨みがあるのか知らないが、正直場所はわきまえて欲しい。

「姉上を惑わす穢らわしき妖怪め！ さつさと死んでしまえ！ この、有稲姥痴が！」
ウケモチ

有稲〓多分俺の名前。姥〓婆。痴〓愚かなこと。
要約すると、『ウカノのクソババア』？

「あゝあゝ？ 喧嘩売ってんのか、てめえ」

「黙れしゃべるな空気が穢れる！ 貴様らが息を吐き出すたびに、

空気が穢れてゆくのだ！ 何故妖怪がこの神聖な場所に…さつさと去れ！ いや、ここで死骸塵芥残さず消滅しろ！」

「はっ、四千年は早いぞ、糞ガキ！」

俺が指から剣を離すと、男は流れるように剣をひき戻し再度構えた。その切っ先は、微塵もぶれることなく俺の方を向いている。先ほどよりも強い殺気がぴりぴりと空気を焦がす。マガラゴのものには劣ってるものだったが。

「止めなさい、ツクヨミ！」

しかし、一触即発の空気をアマテラスが破った。むしろ、今まで黙っていたほうが珍しいくらいだ。どうやら突然の男の、ツクヨミ？の行動に驚いていたらしい。ツクヨミはアマテラスの怒声にびくつと震え、しかし抗議するようにアマテラスの方を向いた。…どうやらこの男、こういう荒事は専門ではないらしい。剣を向けた相手から目を逸らすなど、素人でもない。

「し、しかし姉上！ 姉上はこいつに騙されておられるのです！ こいつは真正正銘穢らわしき妖怪で…」

「黙りなさい！ 私の友達に剣を上げるなんて、どういっ了見なの！」

おー。なんだかお姉さんっぽい。俺は少し小さくなっているツクヨミから目を離し、叱るアマテラスの方を見た。黒髪で、頭の両脇で紙を縛っていて、身体もちっこいが、その姿は弟を叱る姉である。背の高いツクヨミに負けじと胸を張る姿はとても微笑ましいが。

「ウカノちゃんに謝りなさい！」

「そ、それは…」

「ツクヨミ！」

「う…シツレイシマシタ」

どう見ても謝ってないだろ的な謝罪を、俺に向かって二秒で済ませると、ツクヨミは即座に背を向けて扉から出て行った。というか逃げて行った？ どちらにせよ、彼は最後に俺に向かって一瞥、と言うより精一杯の心のこもった一睨みをしていくことを忘れなかったが。

「ツクヨミ！ …もう！ ごめんねウカノちゃん…ツクヨミが妖怪が嫌いなことは知ってたんだけど、まさかウカノちゃんにまであんなことするとは思わなかったから…」

「人間一人に傷つけられるほど弱くないから、別にいいけどな。やつぱり、他のやつに俺のことは言っていたのか？」

「うん！ 『もふもふの尻尾が九本ある可愛い女の子』って言ったよ！」

「ああ、そう…」

いいのかなあ。

少なくとも、今まで俺が見た妖怪の中では、人間と同じ姿をしている妖怪は俺だけだった。しかし、存在する妖怪の姿も千差万別であ

る。元が人間の負の気なのだからそれも当然なのだが、だからこそ人間と似た姿をしている妖怪がいてもおかしくはない。

そして尻尾のある人間などはいない、つまりアマテラスの話を聞けば俺が妖怪であることは一目瞭然だということだ。

「あ、まだ紹介してなかったね。さっき出て行ったのは、この街のもっぱら行政を担当してる『行政部』の長のツクヨミね。父様の養子で、私の弟なの！」

「ああ、それはイザナギに聞いている」

「そうなの？ ま、いいや。こっちに座ってるのはスサノオ、父様に聞いてたのなら知ってると思うけど、この街の防衛を司る『軍事部』の長だよ！」

そう言っアマテラスが指したのは、ツクヨミが飛び出してからもずっと動かずにソファに座っていた、金髪の女だった。なるほど『軍事部』の長というのは伊達ではないらしく、力も空気もツクヨミとは段違いだった。この歳で、おそらくマガラゴにも相打ちぐらいには持ち込めるのではないだろうか？というぐらいだ。

彼女は上品に笑顔でぺこりと頭を下げた。こういう余裕のある態度も、ツクヨミと比べると月とすっぽんだ。月読みなのにすっぽんとはこれいかに。

「はじめまして、スサノオです。ウカノミタマさんの話は、姉さんにも父さんにも聞いてますよ」

「みたいだな。おっと、はじめまして。挨拶には挨拶で返さないと。ウカノミタマじゃ語呂悪いから、俺呼ぶときはウカノって呼んでくれ。しかし、『スサノオ』っていうぐらいだから、男だと思っ

てたんだが」

「そうでしょうか？ 私には似合わないぐらい女の子らしい名前だ
と思いますけど…」

「ああ、そう…」

スサノオは自然な動作で首をかしげながらそう言った。俺は肩をすくめながらそれに返す。こんなところに感性の違いがあったとは。カルチャーショックにしても大世代違いすぎだろ。

「スサノオは、妖怪がここにいることに何か反応はないのか？」

「ここにいらつしやるのは、妖怪である以前に姉さんのご友人です。そのような方に向ける刃は、私は持ち合わせておりません」

なんだろう。アマテラス、ツクヨミ、スサノオで色々の違いすぎる。同じところはアマテラスとスサノオの性別ぐらいしか見つからないんだが。何この出来すぎた妹は。アマテラスはイザナギに似ているけど、スサノオは血もつながってないのに、雰囲気がいざナミさんに似ている気がする。

「あ、ウカノちゃん、とにかく座つてよ！」

アマテラスが俺の背をソファの方へと押した。遠慮する理由もなかったので、大人しく従うことにする。俺が座ったのはさつきツクヨミの座っていた位置で、スサノオの正面だった。テーブルの上にはツクヨミのものであろうカップが乗っていたが、さすがにこれに口をつける気はしない。

それに気づいたらしいアマテラスが、執務机の上にあつたおかしな

機械に手を伸ばした。

「あ、もしもーし？ うん、私私。飲み物のお代わりを持ってきてくれないかな？ あ、運ぶのはオモイカネちゃんに任せてね。ついでに、オモイカネちゃんの分の飲み物もお願い。…うん、うん、それじゃよろしくー」

どうやら電話の類らしい。

新しい名前が出てきたのは気になったので、話を終えたらしいアマテラスに聞いてみることにした。

「なあ、オモイカネって誰だ？」

「ここ、『天岩戸』の研究主任だよ！ ホントはもつと長い名前何だけど、長すぎるし発音も面倒だから、最後の『オモイカネ』だけで呼んでるの。まだ小さいんだけど、私より優秀なんだよ！」

「だろうな…」

「？ 基本的にここの研究業務の最高責任者はあの子なの。私はお飾りみたいなものかなー。あ！ 別に仕事してないわけじゃないんだよ！？」

「大丈夫よ姉さん。姉さんの仕事はここの看板なんだから、何もしなくていいの」

「うわぁん！ スサノオちゃんが虐める！ 助けてウカノちゃん！」

「…うん。アマテラスはアマテラスらしいのが一番だよな」

「わぁん！ オモイカネちゃん早く来て！」

しばらくしてやって来た、さつき出会った赤青白衣の少女にアマテラスが縋り付いたが、理由を聞いた少女にけんもほろろに扱われていた。アマテラスの直属の部下が少女なのだから、訳は言うに及ばず。

太陽神とはすなわち斯くの如し。言わば太陽のような彼女ではあるが、神秘など欠片もない天照大御神である。

しかし天照〃彼女が既に染み付いてしまった俺は、もうこの時代に毒されているのだろうか。月夜見尊は狭量で姉命の妖怪嫌い、建速須佐之男命は大人な女。

けれど、そんな後世に語られない神の姿が見られるこの時代を、俺は心底楽しんでいると思う。

神代の三貴子は斯くの如し（後書き）

えーりんの名前。『八意 × × オモイカネ』。最後だけそう聞こえるような気がするという無理矢理設定。

ツクヨミさんは多分もう出ません。狐を徹底的に避けるでしょうか。

似非未来都市での日常（前書き）

ようやくこの時代に出すつもりだったキャラを出しきりました…。
というわけでもうすぐで都市滅亡ですね、w k t k。

それにしても、今回はなんだかぐだぐだなような…

似非未来都市での日常

俺がこの未来都市を見つけてから五年後、イザナギは宣言どおりに天界へと帰っていった。五年程度は、俺達にとってはそれこそたいした期間じゃない。だから、イザナギとの別れもずいぶんとおつさりとしたものになった。イザナギが行くことを惜しんだのは無論俺だけでなく、多くの人間がいたが、イザナギは派手なことを嫌ったために盛大な送別会などは無く。俺とも二言三言言葉を交わしたぐらいだ。

アマテラスはまだ地上にいるものの、彼女もあと数年もすれば天界に戻るそうだ。『天岩戸』はやはりオモイカネに任せるとのこと。ちなみに俺とオモイカネは相性がよかったのか、最近はおモイカネのところに入り浸っている。

「G - 97からG - 283までお願い。詳細はこの紙に書いてるから」

「へいへい」

俺はおモイカネの差し出した紙を手に取り、試験管群に手を伸ばした。

俺が最近はおモイカネのところに入り浸っているのは、こうしておモイカネの仕事を手伝うためだったりする。はじめて会った時にたまたま見せることになった俺の能力が、彼女のニーズに合致したらしく、彼女からの協力要請がアマテラスを通して俺のほうに来たわけだ。躊躇いなく妖怪に何かを頼むところ、おモイカネも本当にい

い性格してると思う。

俺にもメリットがあつたので快く引き受けたのだが、しかし何分オモイカネの仕事量は多すぎた。だから、俺がこうして忙しく働いているというわけだ。

五年が経って、オモイカネはまた成長していた。既に俺との身長は比べるべくもなく、また胸部も張り出してきた。人間って成長早かつたんだなあ。

「どうしたの？」

「オモイカネも昔はあんなにちっちゃかったのになあ…今ではこんなに可愛げがなくなってます…」

「あなたは最初に会ったときから私より小さかったでしょう。それに私達人間からすれば成長しない妖怪のほうが不思議よ。それと胸を睨むのは止めてくれない？」

「はっ。俺がでかい胸を欲しがっているとしても？ 残念ながら、俺も自分の身体にそこまでのこだわりはない」

「そうよね…大きい胸なんて邪魔だし、肩が凝るし、およそデメリツトしかないわ」

「今お前は全俺を敵に回した」

「めちゃくちゃこだわってるじゃない！」

とは言ったものの別にでかい胸が欲しいわけじゃない。ただなんとなくまな板を見ていると砂丘ぐらいは欲しいとか思わないか？ い

つからこんなこと気にするようになったらなあ。精神は男のままのはずなのだが、俺は妙にこの身体に適応している。おそらく男からそのままこの身体になっていれば、こう簡単には馴染めなかっただろう。しかし、この身体になる前に狐の身体のスパンがあったことが幸いだ。なにぶん狐の身体しかなかったときは、ついていかついていないかより、動物の身体に慣れることのほうが重要だった。

「出来たぞ、97→283。えーと、次はCの方をやればいいのか？」

「ええ。…相変わらず馬鹿みたいに早いわね。しかも不純物一切なしって…。いちいち反応物を推測、生成物を分離抽出とかやってた私が馬鹿みたいじゃない。それだけ手間をかけても、不純物がいくらか混じるのに」

「そっちの方が正道だろ。俺のは正直邪道だぞ。あんまり楽には慣れるなよ、応用が効かなくなるぞ。…ああ、オモイカネの能力ならそれも無意味か？」

オモイカネの能力は『あらゆる薬を作る程度の能力』。

物理的に作れるものであれば、材料さえあればどんな薬でも作るこ
とが出来るといい。例えば、以前作っていたがん細胞を過程はどう
あれ結果的に駆逐する薬とか、もう謎過ぎる。がんって遺伝子疾患
じゃなかったっけ…。

さらに俺がいることで、自然界にはありえないような組成の物質を
作ることもできるので、オモイカネの能力の反則ぶりに磨きがかか
っている。そのうち不老不死の薬でも作るんじゃないだろうか。

「あなたの能力のほうが大概反則でしょう…。意味不明の構造をし

た石を持ってきたときは気が狂いそうになったわよ」

「あれか。あれは失敗作だな。もう少しで成功しそうなんだが……」

「何が？」

「できたらオモイカネに見せる。それまでは言えないな」

首をかしげるオモイカネをよそに、俺はこの試験管を仕上げた。この後はスサノオのところに行くつもりなので、あまりのんびりはしてられない。

スサノオは存外忙しい。いや、おそらくツクヨミが一番多忙なのだろうが、彼とは接点がないのでどうでもいい。とにかく、スサノオが時間を取れることはあまり多くはない。だからこそ、遅くなるわけにはいかなかった。

俺は仕上げた試験管を置き、オモイカネへと声をかけた。

「んじゃ、俺はそろそろ行くわ」

「ええ、今日もありがと。スサノオ様によろしくね」

「ういいうい」

この都市に来て俺が一番頻繁に通う場所はオモイカネのところだが、その他にも時折通う場所がある。それが、スサノオのところだ。

最初は、スサノオの腕鳴らしに誘われたのが始まりだったが、あれ

よあれよと言う間にその交友は今まで続いている。最近では彼女の副官、タケミカツチとも模擬戦をやっているほどだ。ちなみにタケミカツチも俺が妖怪だということは知っているが、特に文句はないらしい。彼も、いわゆる強者なのだ。

「おーい、スサノオ。…あれ、どこか行つてたのか？」

「あ、こんにちは、ウカノさん。ええ、街の近くまで妖怪が来ていましたので、追っ払ってきました。例の『蜘蛛』です」

真っ黒な戦闘装束を身に纏い、黒い大剣を背負って歩いていたスサノオに、俺は声をかけた。その身体には木の葉などが付いていて、そしていつもは櫛の通ったつややかな髪も少しほつれてしまっている。さらに、彼女のそばにはタケミカツチも付いていたのだからなおさらだ。

精悍な顔つきの、中年に入る前の青年、といった感じの男がタケミカツチである。極限まで鍛え上げられた細マツチヨ。理想的なその肉体は、戦闘においてもその見た目を裏切ることはない。そして、タケミカツチはどちらかと言えば寡黙なタイプの人間だった。話を振られなければあまり口を開くことはない。

例の『蜘蛛』…マガラゴが来たということは、二人だけで行つたのだろ。一般兵の未来的武装な光線銃ではあの身体には傷一つつけることはできないのだ。

彼女も、そしてタケミカツチも銃を使わずに剣を使っているのは、ただ単純にその方が強いからだ。禍気は、人間の外見を大きく変貌させることはないが、進化を早めたり、こうしてたまに異常な能力を持った人間を生んだりする。おそらく、禍気が今以上に薄れてしまってもこれがなくなることはないだろう。

さて、二人と戦ったマガラゴだが、今回も死んでしまっていることはないだろう。普段マガラゴと話している俺だからこそ知っていることだが、実はマガラゴは、人間に対する感情は種族の確執程度のものしか持つてはいない。ようするに、マガラゴは必要以上に人間と敵対することはないのだ。

それが分かっているのかスサノオもタケミカツチもマガラゴを殺すことはない。マガラゴが死んでしまえば、頭がよくなったとはいえお世辞にも人間ほどではない妖怪達が無秩序に動き出してしまうためだ。今でこそマガラゴが頂点に立つことで纏まっではいるが、それが居なくなってしまうえば？ 人間に対し個人的な感情を持たないマガラゴのようなものが、また上に立つとは限らない。もしも人間に対し憎悪を持つものが立つてしまえば…行きつく先は泥沼だろう。

二人は相対するマガラゴの態度から、なんとなくそこは察していた。

「ツクヨミはどうしてるんだ？ 相変わらず妖怪に手を出してるのか？」

すると、スサノオの端正な顔が嫌そうに歪んだ。彼女にしては珍しい面だが、スサノオとツクヨミの相性は実はとてもよろしくはない。この二人は、アマテラスが間に立つことでようやく纏まっているようなものだ。二人だけで一つのテーブルにつくことは、まずありえない。アマテラスが天界に戻った後はいったいどうするつもりなんだか。

「どうやら、そのようです。ウカノさんが来られてからは減っているのですが。勝手なことはほどほどにして欲しいものです」

ふう、とスサノオは不愉快そうな表情で悩ましげに息を付いた。ツクヨミの私兵は誰もが一般兵だ、スサノオやタケミカヅチのような単体で妖怪を蹴散らせるような者はいない。そのため狩られているのは、力の弱い小妖怪ばかりだが、それでも妖怪側に不満が出てくるのは当然だ。

今回マガラゴが街の近くまで来ていたのも、そういう不満を払拭するためだろう。

確証はないが、二人が動かなければマガラゴは街へと本格的に侵攻していたはずだ。結局、事なきを得たわけだが。

「ま、それなら今回は模擬戦無しだな。また暇が出来たら呼んでくれ」

「あ、すみませんウカノさん…通信符をいただけませんか？ 戦いの最中に紛失してしまっただんです…」

「ん、ああ分かった」

頭を下げるスサノオに、俺は袖から出した、いくつもの短い線で作った記号が書かれた短冊大の紙を一枚渡した。

『式紙』。

決して大層なものではない、紙に術式を打ち込んだだけの単純なものだ。力さえ注げば誰でも使える上に、俺にとっても術式をショートカットできる便利な代物である。未来のアニメとかに出てきた御札を参考にしたのだが、存外にうまくいった。欠点は、妖気タイプと霊気タイプがあることだろうか。残念ながら二つともに対応した式は作ること出来なかった。

ちなみにスサノオに渡したものは、通信符の名前そのままに離れた場所にいる相手と会話ができるものだ。ただ、この式紙では出力があまり高くなく、あまりにも隔たりがあると効果を発揮することは

出来ない。

ゆくゆくは、この式紙の性能を上げることと、式紙よりも上位のものを作ることが目標である。実はこの目論見は、未だ完成こそしていないものの、五年前に神氣が使えるようになったことでかなりの進歩を遂げていた。

「ありがとうございます」

「今日はもう戻るわ。また暇が出来たらその式紙で呼んでくれ。タケミカツチもまたな」

「はい。お氣をつけて」

「…ああ」

スサノオのにこやかな声とタケミカツチの重厚な声を背に、俺は街を出て森へと戻って行った。街の近くの森が、ぼろぼろになっっていたが、おそらくあそこがマガラゴと二人の激闘地だったのだろう。

街を出た後の俺は、マガラゴのことが気になり彼を探していると、俺の家の前で座り込んでいる巨大な蜘蛛を見つけた。その脚は三本ばかり折れてしまっている。

が、マガラゴにとっては外傷は重傷とはなりにくい。特に脚ともなると数日後には再生しているほどだ。あな恐ろしきは妖怪の再生力おそらく人間とは違い、妖怪はその器ゆえに肉体の欠損を空気中にある禍氣で補えるためなのだろう。

俺がマガラゴの前に降り立つと、ガサゴソと彼は小さく動いた。その様は巨大蜘蛛なのに何故か微笑ましい。

そしてその日は、最近発生している解決しなければならない問題諸々にめそめそと嘆く、意外と繊細なマガラゴを慰めることになるのだった。

俺としては、こういう時は酒だ！　なのだが、生憎彼の身体というか口は酒を呑むのには適していない。結局俺がしたのは一人で瓢箪に口を付けながら、ぐちぐちと愚痴るマガラゴに相づちを打つぐらいのものである。

似非未来都市での日常（後書き）

魔法というか魔術というか、ファンタジーの技術って便利なんですけど、加減が難しいんですね。

後々はさらにチート化が進んでしまいます。攻撃手段が少ないので、そのあたりを特に。あとはチート式神とか。

俺もツクヨミも、きつと臆病者（前書き）

ふはー…。今回は怒濤の展開です。もっとゆっくりすべきでしたね。

今回は狐がなんだか冷たいような。なので注意です。

話の展開についていけないなどの指摘もお待ちしております。改善できるかどうかは、…なのですが。

俺もツクヨミも、きつと臆病者

イザナギがこの地を去ってさらに五年。今度はアマテラスが天界に戻って行った。イザナギ同様多数の人間に惜しまれていたが、それは彼女なりの人徳があつたためだろう。俺が見た彼女は自由奔放だったが、それでも誰からも好かれていたと思う。

最後は、俺の尻尾を千切れんばかりにもふってから、名残惜しそうに去って行った。数本ばかり毛を抜かれていったが、最後だと思えばお安いことだ。：別にさつさとして行って欲しかったというわけではない。俺も彼女を好いていた一人だったのだから。

さて、アマテラスがいなくなったことで都市の情勢は大きく変わった。もともと水面下でくすぶっていた事が表面化しただけのことだ。

『技術部』の現トップはアマテラスに代わってオモイカネ。彼女がそうなることは決まっていたことであるし、そもそも彼女自身は街の流れに関してはそれほど興味はないらしい。『技術部』はあくまで技術畑の運営する勢力だ、少なからず行政権を持つていようと使う気かなければ意味はない。『技術部』の立場は『行政部』『軍事部』の中立といったところか。

しかし、『軍事部』は違う。『軍事部』のトップ、スサノオと『行政部』のツクヨミは、ツクヨミのしゃばりを発端として、静かではあるが幾度か衝突していた。アマテラスがいたからこそバランスが崩れることはなかったが、そのアマテラスももつけない。

場合によつては本格的な抗争にまで発展しただろうが、スサノオ自身はその展開を望んではいなかった。そして、結局ぎりぎりで均衡を保っていた三貴子の二人は、スサノオとツクヨミが互いに完全に愛想を尽かす形で、崩れる過程もなく完膚なきまでに崩壊した。

スサノオの都市からの追放。ツクヨミが裏から動いたこともあるが、スサノオ自身もこのままツクヨミのいる都市に留まるつもりは微塵も無かった。『軍事部』のトップはタケミカヅチに受け継がれ、スサノオは一人都市を去る。

「姉さんもういませんし、この都市にいつまでも居るつもりはありません。それにあれが近くにいることは、私にはとても耐え難いものなのです」

「以前から都市を出て一人旅をしてみたいと思つて居ましたし、後悔はしていません。無責任かもしれませんが、それでも私は私がしたいこともやつておきたいのです」

そう言つて、スサノオは黒い装束を纏い大剣を背負い行つてしまつた。

イザナギもアマテラスも、彼女の行動を責めることはないだろう。幼いときから真面目に仕事に打ち込んできたスサノオが、ようやく自分のしたい何かを始めたというのだから、むしろ喜んでいるかもしれない。天界に行つてしまったので、実際どうなのかは預かり知らないが、あの自由奔放な二人ならきつとそうだ。

さて、スサノオの後任のタケミカヅチは良くも悪くも、軍人というより武人気質なところがあつた。ツクヨミに大きく反発する事こそないが、しかし曲がつていると思えるようなことは絶対にしない。ツクヨミからしてみれば、スサノオよりはマシだろうがそれでも扱いにくい相手だろう。そんなタケミカヅチは、前線で戦う者であり

ながら妖怪に対して、これまた種族間の隔意しか持っていない。そういうところは、とてもマガラゴに似ていた。

タケミカヅチもマガラゴももう幾度もなくぶつかっていたが、そこに相手に対する負の感情は微塵もなかった。ただただ、自分の帰属するもののために剣と爪を交え、互いの根が尽きるまで自身の全てをぶつけあう。

それは恒例行事のようで、人間と妖怪のバランスを保つために必要なプロセスだったように思う。

が、それも限界に近づいていた。いや、イザナギが危惧していたようにいつかは来るはずのものだったのだ。それが、少し早かっただけで。

マガラゴの言った、妖怪による都市の人間に対する総攻撃、徹底抗戦。

アマテラスとスサノオが都市からいなくなること、激化した妖怪狩り。既にマガラゴが妖怪を抑えるのは不可能だった。それでも、マガラゴは彼らを最後まで纏め上げることをやめはしない。

そして、同じ時期にオモイカネの言った、月移住計画。

三年ほど前に採決され、既に最終段階へと入った壮大な地上からの脱走計画。まるで図ったようなタイミングの実行日が告げられた。

結果的には、妖怪の進行を食い止めるために月移住組と残留組に別れることになった。『軍事部』は、間違いなく残留組である。

主導は無論『行政部』の長、ツクヨミ。

この計画が地上の穢れとやらから脱却するためなのか、今は天界に上にいるアマテラスへ何らかの思い入れがあるのかは分からない。それでも、彼は確かに何よりも上を目指そうとしていた。

「あなたはとうするの？」

天岩戸でフラスコの中の溶液を見つめていた俺に、オモイカネがそう聞いた。

「どうって？」

「『行政部』の情報からでは、計画決行の日と妖怪達の大進行の日がほとんど重なっているのよ？　あなたは、人間と妖怪、どちらに付くの？」

「どちらにも、付かない」

少しの不安を声に滲ませながら聞いたオモイカネに、俺はそう答えた。

仮に俺が人間につけば、俺がマガラゴを殺せばそれで終りだ。他の妖怪が俺やタケミカツチに勝つことはない。
が、俺がマガラゴを殺すわけではない。

仮に俺が妖怪につけば、この都市の主要人部を全員殺せば終りだ。既にこうして中枢に入り込んでいるのだ、その程度は造作もない。しかし、俺がオモイカネやタケミカツチを殺すわけではない。

仮にツクヨミを殺せば？　断じてノーだ。形はどうあれ、ツクヨミは間違いなく人間側の指導者なのだ。俺は頭を失った人間を放り出すほど無責任でもなければ、人間を導くほどの器量も義理もない。

そもそも、マガラゴもタケミカツチも俺が味方に付くことを望まなかった。自分達の問題は自分達で付けると、そう言い張っていた。なるほど、俺は今まで両者間の問題に首を突っ込んだことは、一度たりともない。似たもの同士のマガラゴとタケミカツチのことだ、今度の衝突で、双方の全てを終わらせるつもりなのだろう。

「そう、それならいいわ」

オモイカネは俺が人間に付くことはないと言ったのに、安心したように息を付いていた。

「怒らないのか？ 俺が傍観者でいることに」

怪訝に思った俺がそう問うと、オモイカネはおかしそうに笑って言った。

「何で？ ウカノらしいじゃない。あなたは他人との関係は大切にしてくせに、とても淡泊ところがあるわ。どちらも大事だからこそのいなくなることを承知しながら、どちらにも肩入れしないんでしょ？」

「…ああ。俺は臆病者だからな。片方を拾うために片方を捨てなければならぬのなら、俺はどちらも捨てないし拾わない。今の俺に、両方拾えるほどの力は無いんだ。…が、」

そこまで言っつて、俺は袖から一つの小袋を取り出してオモイカネと渡した。

少しずしりと感触と、ごろごろとした感触がする袋である。

「これぐらいはいいだろ。力はあつても、オモイカネは非戦闘員だからな、それはお守りみたいなもんだ」

「これって……」

オモイカネが袋の中を見ると、そこには朱色の石が入っていた。そして、それは自然界にはまずありえない構造をした物質である。

俺は式紙を作り、しかしその術式の弱さには頭を抱えていた。しかし紙一枚ではそれがほぼ限界で、段階を越えるにはそれこそ式紙の改良だけではまるで足りない。

そして思いついたのが、物質を構成する構造式だ。

ファンタジーには、あらゆる魔術的要素を取り入れ、要塞のような堅固さを持つ屋敷や、迷宮構造を一つの封印式として作り上げ、超巨大な牢屋を作ったりと、一つの要素に三次元的な術式を盛り込んだものが時折あった。

俺は自分の能力を利用し、それをミニマムサイズで行使した。

無論、簡単なことではない。妖気禍気では根本的に力が足りなかったり、あまり術式側を重視するとカタチを保つことが出来なくなったりと、問題はいくらかでもあった。

しかし、神気によって力不足は改善され、さらにオモイカネとともにいることでその膨大な知識を吸収し、最終的にはようやく俺なりの答えを導き出すことに成功した。

その集大成が、今オモイカネに渡した朱色の石だった。その性能は式紙とは比べ物にはならない。式紙に対し『式玉^{しきぎょく}』と言ったところだろうか。

「ちょっと前、お前にとってはずいぶん前にか、言ったる。出来上がったから見せるってさ。俺からオモイカネへの餞別、贈り物ってわけだ」

「…ありがと。——ねえ、オモイカネって、私の名前じゃないのよ。今更だけど。そもそも、そう聞こえるというだけで『オモイカネ』っていう単語すら入ってないわよ」

「いや、知ってるけどな。だが、俺に××と呼べというのか。呼ぶたびに神経使うのは嫌だぜ、俺は。言いにくいんだよな」

「ええ。だから、私のことはオモイカネでも××でもなく、『永琳』と呼んで」

「…偽名か？」

「そんなところね」

「—そんなじゃ、『永琳』」

「何？」

「そろそろ、行くわ」

「…そう」

「ああ。じゃな、永琳」

「ばいばい、ウカノ」

それから何日も、俺は自分の家で瓢箪を傾けていた。瓢箪の中の酒虫も、なんとなく俺を責めているような慰めているようなそんな気がした。

マガラゴは既に街へと侵攻している。彼と顔を合わせたのは数日前が最後だった。そして、タケミカツチともだ。タケミカツチも体制を整えマガラゴを待っているだろう。

俺の知る限り、全体的に優勢なのは人間側だ。だが、今回の大戦ではおそらく妖怪側のほうが優勢だろう。単純な数では人間のほうが多いが、ここの戦闘力では妖怪のほうが上で、そして地上に残るのは『軍事部』の人間だけだろう。つまり数の利はそれほど大きくはない。

『軍事部』に限らず戦える人員全てに武器を渡して応戦すれば勝てるだろうが、被害も甚大ではなくなることは明らかだ。増してや、あのツクヨミがその策を選ぶわけがない。

確証こそないが、しかし間違いなくツクヨミは故意的に妖怪の大侵攻に時期を合わせたのだろう。『軍事部』の人間を一掃するためにおそらく彼は月にいけば『技術部』にでも都合のいい存在を創らせるはずだ。『軍事部』のように自身の意に沿わないものではなく、人間に逆らわない従順な奴隷を。この都市の『技術部』なら、それが可能だろう。その上、穢れの無いという月に行けば時間などいくらかでもあるのだから。

俺が一人酒を呑んでいると、式玉の発動を感知した。広域遮断結界、これが発動したと言うことは、戦争も最終局面に入っているのだろ

う。しかし、永琳が死ぬことはない。あれの作る遮断結界は、マガラゴでも壊せない。

結局、人間に肩入れしてるんだな。

不意に俺はそう思った。

なんだかんだ言っても、死んで欲しくはないものだ。永琳は元より、マガラゴやタケミカヅチにもだ。が、両者の争いに首を突っ込むわけにはいかない。何せ、そもそも成り立ちからして人間と妖怪は敵同士だ。そこに憎しみなどの個人的感情がなくなるとも、ぶつかりあいは避けられない。そこに、どっちつかずの俺が入る隙などないのだ。

そうしてしばらくして、俺は瓢箪に栓をして立ち上がった。せめて、見送りぐらいはしたかった。

少し前に見た街の面影は既にある。あちこちの無機質かつ整然としていた建物は、そのどれもが破壊され雑然とした様相を呈していた。いくつもの人間や妖怪の死体が散らばり、まさに死屍累々といったところだ。…その中に、ただの一人も顔見知りなどはいなかったが。空を見上げれば、煙をたなびきながら凄まじい速度で一つの光が天へと昇って行っていた。そのうち大気の間も突き破って宇宙へと飛び出し、俺にも見えなくなることだろう。玉石と、そしてその持ち主がその中にいることを確認して、俺はまた歩を進めた。

街の中心より少し手前にいたのは、一人の男と巨大な蜘蛛だった。しかし、男は、タケミカヅチは何本もの爪が刺さり、完全に絶命していた。血が完全に乾いていないことから、ぎりぎりまでマガラゴ

と戦っていたのだろう。苦悶の表情など少しも浮かべておらず、どこか満足げだったことは救いになるだろうか。

巨大な蜘蛛、マガラゴは、十二本の脚のうち九本が既にもげ、身体のあるところが焦げ付き、そしてタケミカツチの持っていた剣が胴体には深々と刺さっていた。

「――」

虫の息でも、それでもギリギリの状態で生きていたのは、彼だからこそだろう。音にならない、かすれた空気のようなものしか、彼の口からは聞こえないが。

「……死ぬのか？」

俺は彼の前に立ち、聞いた。仮に神の奇跡があったところで、彼の魂をつなぎとめておくことは出来ないだろう。何せ、彼はもう死が確定してしまっているのだから。それでも、こうして俺と話が出来るのは。

「俺を、待ってたのか？ 来るのかも分からないのに。お前を助けてやれるわけでもないのに」

「――」

「……そうか。お前らホントに、俺のこと良く分かってるよ」

マガラゴにこんなに想われるほど、俺はいいやつじゃない。むしろ俺は選択から逃げた卑怯者だ。タケミカツチやマガラゴが死ぬことを容認した愚か者だ。

「――」

「…分かったよ。どうせ俺は死なないだろうから、億年だって、この地上で待つててやる。だから、また戻ってこい。お前の居場所ぐらいにはなれる。しかし、地獄の閻魔の裁定は厳しいぞ。あいつらはどうもお固いからな」

こんな時なのに、なぜ俺の顔はなおも動かないのだろうか？ 泣き顔だつて見せはしないが、笑い顔だつて見せられないじゃないか。

「――ぎ」

「…ああ。またな、マガラゴ」

最後に、ようやくいつもの鳴き声を発し、そしてそれっきりマガラゴは動かなくなった。

俺は、最後まで静かな瞳でそれを見つめていた。

いつの間にか、俺は人間だったころより凍り付いてしまっているらしい。タケミカツチも、マガラゴも、死んでしまったというのに俺はこんなにも揺れてやしない。

転生というものを、死が消滅ではないことを、知ってしまったからだろうか。

永い永い時の中で、いつか再び出会えるからだろうか？

「ん？」

深く沈んでいた俺の心中に水を挿すように、俺はナニかが動いているのを感じた。既に動くもののない、俺しかないこの場で、何か

大きい力が感じられる。

そして、それはとある建物からだった。マガラゴたちがいた場所より少しいったところ、そこは比較的無傷で、細部に傷はあるものの倒壊などはしていなかった。

『行政部』の本拠、『月宮戸』。

俺も入ったことはない。

中が気になった俺はそこへと脚を踏み入れた。セキュリティは大方停止しており、その類の妨害を受けることはない。造りは大体天岩戸と同様で、迷うこともほとんどなかった。そして、ツクヨミの部屋もアマテラスの部屋と同様の配置である。なんとなく何かの執着を感じないでもないが、とにかく俺はそこへと向かった。

扉はさすがに重厚な作りで完全に閉じてしまっていたが、もう壊さないように気を付ける必要はなかったので、扉を構築する式をとにかくばらばらにしてやった。

00:18 00:17 00:16

中は天岩戸のアマテラスの部屋よりもずっと広がった。いくつもの機器が配置され、それに付随するようにいくつもの椅子が置いてある。この部屋は、執務室というよりもまさに何かの指令室と言った具合だった。

00:15 00:14 00:13

さらに、中央にあった一際大きなモニターは不吉なカウントダウン

を刻んでいた。既にロケットは飛び立ったのだ、なおさら何かを起動しているとは思えないのだが。

しかし、今なおさら何かが動いているのだ。この数字は、その制限時間を示しているはず。

00:12 00:11 00:10

言いようのない不安に付き動かされ、俺は近くの端末を高速でいじった。もともとこの類に強い俺には造作もない。
そして、じきにこのカウントダウンの答えは導き出された。

00:09

「あの、^{シクヨミ}糞ガキ…！ やつてくれたな…！」

00:08 00:07 00:06

小さなモニターに映し出されたのは、この地上を破壊し尽くす、この都市の科学の粋と人間の霊力による神秘をふんだんにあしらった、まさに夢のような爆弾だった。^{ドリームボム}俺が感じたのは、この爆弾に込められた膨大な霊力だろう。起動することによってやく俺にも感じられたのだ。

永琳は間違いなく関わってはいないだろう。彼女がこんなものを作るとは思えない。ということは、俺はずいぶんとツクヨミを見くびっていたらしい。永琳にも場合によってはスサノオやアマテラスにも知られずに、これほどのものを作り上げたのだから。

00:05

逃げる？ 無理。どこにさ。

00:04

タイマーの停止？ 可能だが、タイマーを止めたところで爆弾は止まらない。タイマーはただ表示されているだけで、爆弾とはシステムが独立している。

00:03

爆弾の破壊、もしくは解体？ 無謀。刺激を与えることは元より出来ない、解体する時間などもない。

00:02

「クソ！」

俺は八尾と、そして霊尾を一本、つまり今の全力を出し切り強固な結界を作り上げた。しかし、それだけでは全く足りない。袖から今持っているだけの式紙、式玉をばらまき、幾十、幾百、幾千もの結界を作り上げる。俺の手札はこれで全部だ。

00:01

最後に、俺は出来るだけ身体を縮め丸くして、結界を極限まで凝縮した。

00:00

そして、次の瞬間には俺の視界も意識も全てが真っ白に染め上げられた。

この日、地上の生物のおよそ九割が死滅。

永琳が気づいたときには、地上はおよそ全てが火の海と化していた。
青かった地球はその時、まるで太陽のようにも見えたという。

?年後、某所。どこぞの地中より狐這い出る。

「う」

ずしん ずしん

「え？」

ギヤアツ ギヤアツ

ガアアアアアツ

「？」

人間↓恐竜

「????」

俺もツクヨミも、きつと臆病者（後書き）

かなり大雑把に、地球史？

地上の覇権推移

第一世代 現天人

V - C 境界

第二世代 現月人 その他ほぼ絶滅

P - T 境界

第三世代 恐竜 絶滅

K - T 境界

第四世代 現地上人

こんな感じです。大体の年代は分かるでしょうか。矛盾点等見逃し
てくれたらありがたいなと…

SFのAIはすごいと思う（前書き）

また暴走です。チート式神作りました。投稿するか迷いましたが、もういけるとこまで。

式神ってあれ鬼神を使役するものなんですね。ファンタジーでは色々な使い道が出てくるので、良く分かんなくなってます。今回の人型式神のモデルは某薬味漫画のちびせ。なです。

SFのAIはすごいと思う

最初に俺が目を覚ましたのは、深い土の中だった。自身の記憶の最後に張った結界はかなり綻んでいたが、しかしぎりぎりに残っている。

身体の頭の天辺から足のつま先までがっちり土で固まっていたが、このときほど本当に能力を持っていて良かったと思ったことはない。どれほどの腕力があるうとも、これほど積もった土の下で、動かせない手でどかすのは無理と言うものだ。とにかく少しでも動く隙間が必要だった。

周囲の土を構成するものをバラバラにしながら、俺は少しずつ結界を広げていった。これなら、十分俺が動くスペースを作ることが出来る。

そうして上だと思われる方向に必死に掘り進んでみれば、唐突に目に光が飛び込んできた。しかし、俺の目に飛び込んできた光景は以前のものとはまるで違っている。

周囲には絵や化石でしか見たことのない植物が生い茂り、これまたスクリーンやらでしか見たことのない巨大なトカゲが堂々と闊歩していた。

原生植物に恐竜、進化した哺乳類が本物を目にすることのないもののオンパレードである。

起き抜けの頭で必死で考える。

何故こうなつたと。

恐竜が出現したのは現代を基準に約2億5000万年前。が、地を

揺らすほどの大型恐竜が出現したのは、恐竜全盛期頃の白亜紀だろうか？　だとすると今は約1億4000万年前ほどになるのか。

あれ？　だとすると俺達がいたのはいつごろになるんだ？　爆弾で吹き飛んで、次は恐竜。あれが中生代最後の大量絶滅だとすると、俺は2億5000万年前ぐらいにいたってことになるのか。…あの時の生態系は謎だったな。なんで後世に残らなかったんだ。

つか俺どんだけ寝てんだよ。いや、生きてるだけマシかな。どうりで土に埋もれてるわけだ…

…そういえば、今の大気に含まれる禍気の濃度があの頃と比べると濃い。つまり、今の地上には人間、ひいては妖怪がいないということになる。完全に恐竜の天下、というわけだ。

「さすがに、恐竜とお友達にはなれそうにないな…」

正直、何をすればいいのか分からない。現在位置など分からないし、仮に分かったところで無意味だ。恐竜がここまで進化しているということは、少なくともあの時から数千万年は経過しているのだ。俺の家はあの時消し飛んだだろうし、もし壊れなかったとしても埋まっている。そもそもそれがどこか分からない。

あの時の知り合いは、イザナギ、アマテラスは天界、永琳は月に辿り着いているのだろう。これだけの時間が過ぎたのだから、生活環境も整っているはずだ。…しかしまあ天界も月も今の俺には接点がないわけで。スサノオだって、あの頃の時点で所在不明になっていたのだ。長い年月の過ぎた今となっては生存はもう絶望的。ぶっちゃけ完全に独りなのだ。

「人間が生まれるまでって、流石に永すぎる。1億年話し相手がい

ないのは堪えるな…」

唯一の救いは、瓢箪をがっちりと抱えていたことだろうか。そういえば丸まったときに瓢箪をお腹に抱え込んでいたのだ。中の山椒魚も、我関せずといった風に無事だった。しかし妙にでかくなっている気がする。相変わらず話しかけても反応を返してはこないが。だが、酒は呑める。俺にとっては非常に大きい事柄だ。

そういえば、他に変わっていたこともある。

俺の尻尾九本全てが霊体と化していた。霊体が見えないものが今の俺を見たら、狐の耳だけが頭に生えている、尻尾無しのおかしな妖怪に見えることだろう。

また、これはおまけなのかどうかは分からないが、九本の霊体実体を切り替えて遊んでいると、うっかり全身が霊体になってしまっていた。慌てて戻そうとしてみると簡単に元に戻れたが、これは看過できないことだ。何せ尻尾しかすり抜けられなかった扉も、今は全身が通り抜けられるのだ。…扉の無いこの時代では何の意味もないが。しかも全身霊体にしてたらさながら幽霊ですぜ、俺。

おまけ機能はともかく、俺は霊尾が増えたことで同時に爆発的に増えていた力にも驚きながら、霊尾七本を隠し残り二尾の霊体を解いて表に出した。俺にとってはやはり、この状態が一番落ち着くのだ。

「って、なんか地面までの距離が少し遠い！ 成長してる！」

これに最後に気づいたことに心中泣きそうになったが、ショック同様そこには喜びもあった。以前男だったものとしては、いつまでもちびっ子では自信の喪失？につながるって言えよう。それゆえ、10cmも伸びたのは俺としては大快拳なのだ。幼女からの脱却、これ以降成長することがなくとも、その事実が俺を一時的に高揚させた。

しかし、今まで成長しなかったのに、幽霊みたいになったら成長ってどういうことだろう。相変わらず俺の存在自体が謎過ぎる。

さてそれはともかく、1億年の間ぼっちで過ごす度胸のなかった俺は話し相手を創ることにした。科学技術で人工知能搭載のロボットだとか造ったりする発想があるのだから、俺の術式技術でもなんかできるんじゃないの？ 最初はその程度の考えではあったものの、他にやることのない俺は適当な場所に結界を張って引きこもり、その作業だけに没頭していた。

最初にやったのは、式紙のバージョンアップだ。そして、まずはこれを核として人形を創ることから始めることとする。

その上で思い出したのが、妖怪という存在だった。人間の負の気と禍気を器とし、それに魂が入ることではそれは妖怪となる。ならば器をつくり、その器を動かす器官、魂を式紙で代用してみれば？

簡単なことではないが、それを思いつくと同時に俺の頭の中には既に設計図が出来上がりつつあった。式紙では自由意思を持たせるには弱すぎるが、初期段階としては十分だった。次段階には式玉があるのだから。

俺にとって運が良かったのは、禍気の特徴を知っていたことだろうか？ 禍気は負の気に引き寄せられ一つの器となす。俺に負の気そのものを造ることなどではしないが、禍気には詳しいこともあり、負の気の禍気を吸い寄せる機能を再現することは可能だった。似たようなことは、今までもやってきたのだ。

だが、これは一枚では不可能だった。やはり式紙は強化しても弱す

ぎる。結局、それに気づいた後に辿り着いた答えは式紙同士の連結だった。うまく術式を乗せ組み合わせることで、複数枚の式紙は互いに相乗しあい、ようやく基準値には達せられた。

式紙三枚を使い、禍気を集め器とする器官にする。さらに式紙を五枚を使い、それらにありつただけのプログラムを打ち込んで魂代わりの器官を創った。いや、簡易AIといったほうがいいだろうか。最終的には、自身で思考し、俺の指令を遂行するような人形が完成したのだが、そこに柔軟性は微塵もなくどこまでも機械的なものだった。なんというか、どうもしっくりこない。

が、これはあくまで式紙を核としたもの。本番は式玉からだ。一応、人形は最初に式紙を使ったと言うことでそれにちなみ、『式神』と名づけたが。

ちなみに、俺の情報を式神の器の術式に打ち込んでいるため、できた式神の姿は俺自身だ。ついでに白い小袖と赤い袴も付属させてある。イメージは巫女装束だ。なぜかロリサイズなのだが、耳もあれば尻尾もある。…そして、俺同様に無表情だった。それに見つめられるのはなんだかあれだったので、狐の仮面を上に着せておく。複数体作ったときに同じ顔がずらりと並んでいるのも怖いので、この仮面はこのままでいいだろう。

そういえば、式神を造る仮面で憑依型の式神もできたが、正直今はほとんど使い道がないので置いておこう。

式紙核タイプはひとまず放置すると、俺は次に式玉のほうへと手を付けた。

ただこちらは構造が複雑ではあるものの、基盤や工程はほとんど式紙の方から流用できる。式紙という下地がある分、発想ゼロからやるよりはマシだろう。

こちらは式紙のように連結することはしなかった。式紙より断然体積が大きいこともあるが、こちらは禍気を集める器官と核を分ける必要が無かったためでもある。

ただ誤算だったのは式玉の構造をいじる必要があったことだろうか。そのお陰で、全体構造のバランスをとるためにこれまた苦勞することになってしまった。

最終的に完成はしたものの、結局それまでの時間は式紙の時よりもかけてしまっている。

しかも、完成したのはまたしても人形だった。いや、式紙のものより比べるべくもなく高性能なのだが、やはりどこか無機質だった。自己進化していくという可能性もあるが、確証はない。どれだけかかるかも分からない。やはりAIでは限界があるのだろうか？

行き詰った俺は、最後の手段を選んだ。

「いつそ、人工的に魂を造ってやろう」

正直どうかしてたと思う。

魂を作るために以前以上に結界に引きこもり、それからもう何年経ったのかは分からない。外にいる恐竜がどうなったかなんて知らない。世界がどう変わったかなんて、今は興味ない。

俺はただただ完全自律式神を目指していた。

最初は話し相手が欲しい、それだけだったが、途中からはもう意地になっていた。存外俺は、作る者だったらしい。

本物の魂は作れずとも、それと同じ機能を持った物は作れる。俺はその信念の赴くまま、式玉を改良し続けた。

魂というものは、イザナミさんを見たとき以来幾度となく見てきている。今の時代だって、恐竜が死ねば魂は遊離してゆく。今は人間がいないせいで地獄の管理機関は凍結されているため、魂は元々あった法則に従いあちこちを飛び回っている。

それらを思い出しながら、俺は創ることだけに打ち込んだ。

緻密に、複雑に、そうしていくたびに、式玉は朱色からどんどんと赤を増してゆく。

それを見るたびに、俺は完成が近づいていることを感じた。

思えば、俺は正気ではなかったのだろう。式神を作る過程でも然り、俺の思考は彼ら同様どこまでも機械的なものになっていた。さもないければ魂を作ろうなど考えるはずもない。その機構を知っているからこそ、俺は余計にそう感じられた。

ならば、こうして完成が近づいているというのは俺の執念故だろう。人間が生まれるまでの時間全てをそれだけに費やし、冷静な気狂いのごとく、正気ならば発狂しそうな代物を精密に組み上げていった。

そうして、その時は呆気なくやってきた。

カチリと、そんな幻聴が聞こえるとともに、俺の手の中にあつた未完成品が完成品へと変わった。式玉とは違うつるつるとした表面が、その瞬間は一際大きく輝いた気がする。

元々は朱色だった式玉は今血色など通り越して、目を細めそうなほどの紅を呈していた。

「起きろ
…式」

紅の玉を掲げ、俺は一言つぶやく。所詮これは魂の偽物。だが、きつとナマモノの真似事は出来るはず。この構造は、ほぼ妖怪のものと同一なのだから。

俺は確信を持って、玉を放り投げた。

ぱしつと、そんな音とともに玉は急激に眩く光り、そして周囲の禍気を凄まじい勢いで吸い寄せていった。その濃度は従来の式神のものとはまるで違う。そう、妖怪並みの器を構成できるほどだ。玉は禍気を吸うたびにぎらぎらと発光していた。その様はまさに『禍々しい』のだが、密かにてんぱっていた俺にはどうでもいいことだった。

これと同じ物はもう作れない。完全に同一の魂は、同じ存在というものの一つの世界に同時に存在することはできない。きつと同じ物を作ればどこぞへと跳ばされることだろう。つまり、俺はそれほど完成度の高い偽物を作ったのだ。

数分後、もう一度ぱしつという音とともに発光はぱたりと止んだ。周囲の禍気の流れも完全に止まっている。

俺は玉があったところへと足を進めた。そこにはもう玉はなく、以前の式神達同様人型が、多分俺そっくりの少女がいる。だが、今までのものとは違いそれは赤い髪をしていた。

「おーい」

そもそも、従来の式神は立った状態で現れていたのだが、こいつはうつ伏せで現れた。まるで俺のような不精者だ。赤い髪も、無造作に地に散らばっている。そして顔が見えないせいで俺と同じ姿なのかは確証が持てない。ただ、身長は相変わらずロリサイズだ。何だろうか。

うつ伏せになった頭を、俺は容赦なくしばしと叩いた。正直起きてくれないと成功なのかどうか分からない。今の状況的にはほぼ成功なのだが、それもどこまで正確であろうとあくまで推測だ。

しばらく叩いていると、こいつは徐にむくりと身体を起こし、これまたゆっくりときよろきよると辺りを見回していた。その顔は、俺の造りとまるで同じだ。しかし…

「…」

「おい？」

そいつが何も言わないので、俺はもう一度声をかけた。そいつはぴくりと動くと、またゆっくりと俺と目を合わせた。その目は、髪同様に真っ赤に染まっている。そして、そいつの顔を見ると同時に俺は悟った。こいつは俺でも、自由意思に欠ける機械のような今の式神でもなく、完全に別の存在だと。

「う？」

なぜなら、機械も俺もこんなに無邪気な顔はしない。

しかし、話し相手になるにはまた時間がかかりそうだ。

SFのAIはすごいと思う（後書き）

というよりも、モデルはアリスさんの人形かもしれない。完全自動人形とか…

子供って、よく分からない（前書き）

いそがしす。書けましたので、投下。こういう話の表現って、余計難しいです。

あと、恐竜はまだ絶滅していない時代になりました。恐竜って美味しいんでしょうかね。さすがに分かりません。

子供って、よく分からない

「あう」

俺の生み出した完全自律式神、見た目は髪と眼が赤いロリ状態の俺そっくりである彼女に、俺は『紅花^{べにばな}』と言う名前をつけた。紅花は他の式神とは違い、ほぼ完全に一個の存在だ。いつまでも名無しでは心もとない。

しかし、紅花はまだ自分の名前も認識できていないようだった。しかしむしろそういうところが生き物らしく、完全自律式神の成功の証でもあるのだが、かつての俺の姿とまるで同じということに奇抜さを感じた。俺にもこんな時期があっただろうなと思うと、感慨深いものではあるが。…前の人生でだけどな！

「うー」

だがやはりしゃべれないというのは残念だ。幸いなのは、俺の情報を少なからず打ち込んでいることだろうか。元俺の知識も、今は使えないと言っただけで十分に彼女の中に蓄積しているはずだ。あとは使い方を教え、経験を積ませればいい。それと精神の成長か。どれもゆっくりやっていけばいいことだ。

しかし。しかしだ。

「とりあえず、尻尾を引っ張るのは止めなさい」

「う？」

アマテラスもそうだったが、お前らはもふもふをもつと丁寧に扱えるのか。てか紅花にも尻尾はあるじゃないか。

そう、他の式神にも言えることだが、俺を元にしたせいかどいつにも耳と尻尾は付いている。ただ尻尾の本数はどの式神も一本だけだ。紅花は成長する可能性はあるが、他の式神は尻尾を増やすなら俺がバージョンアップさせるしかないだろう。

紅花は自分の尻尾には興味がないのか、俺の尻尾が気になるのか、執拗に俺の尻尾を引っ張っている。その顔に悪意など欠片もなく、注意してみても首をかしげているだけだった。しかし俺は痛いのだ、ちくちくしてもう地味に。

口頭で注意しても伝わらないのか止めてくれないので、今度は注意しながらぱしりと引っ張る手を叩いた。すると、しばらくきょとんとした顔をしてからぴぎゃーと泣き出してしまったのだ。

正直、俺は紅花にどう接すればいいのかわからない。何かをされるたびに、見た目はそこそこの歳をしていても、中身が赤子であることを思い知らされる。道理の通じない相手というものを、俺は特に苦手としている。相手が何を考えているのかわからないし、推測も出来ない。

泣き出した子供を目の前に俺に出来たことは、逃げることでも慰めることでもたたくことでもなく、ただ見つめていることだった。紅花の目からはぼろぼろと涙がこぼれ、悲鳴のような泣き声が周囲に轟いている。だが俺は見ているだけ。その様子を、痛ましく思わないでもないがしかし、見ているだけ。

子供というものは、えてして視野が狭い。それは視界のことではな

く、意識の範囲という意味だ。せいぜい同時に考えられるのは一つか二つ、だから子供の行いというものはいつも傍若無人に見える。何かをしていれば、周囲に配慮することほどの余裕は彼らにはほとんど出来ないのだから。

結局何がいいたいのかと言えば、紅花の泣き声は周囲に対する配慮は少しもない。ぶっちゃけて言えばうるさい。結界を張っていないければ恐竜が寄ってきていただろう。

そもそも、彼女はいつたい何故泣いているのだろうか？ 俺が叩いたことが原因なのだが、しかしそれが泣く理由になるのか？ 叩かれた、と感じる程度の強さだったのだが、紅花にはそれが痛かったのだろうか。

そんな益体のないことをただつらつらと考えながら、俺は泣きに歪んだ紅花の顔をぼんやりと眺めていた。紅花は子供らしくその感情の起伏はとも大きい。些細なことをきっかけにこれほど大泣きするほどに。同じ顔をしていても、その様は俺とはまったく似ていない。

今の泣き喚く紅花を見て、うらやましいと感じることはない。しかし、紅花が笑う様子を見ても俺は同じ気持ちでいられるだろうか。

結局、紅花は泣きつかれて寝入ってしまうまで泣き止むことはなかった。数日間ぶっ続けて泣き続けたのだから、大したものだと言わざるをえない。その様子をただ眺めていただけの俺も大概だが。どうせ起きれば今回のことは忘れてしまっているだろう。幼い紅花に過去にいちいち目を向けるほどの思考力はない。

俺は式玉二つで式神を二体作り、取りあえず食べられそうなものを探しに行かせた。俺は酒だけあればいいのだが、紅花はそうはいか

ない。いや、食べずとも支障はないだろうが、俺は幼い頃の味覚って大事だと思うんだ。そうでなくとも、うまい物ぐらいいは経験として食べさせてやりたい。この原生植物生い茂るこの世界に何があるかは知らないが。

「あ。じゃあ式神に任せてたら分らないかな。食べられそうなのを探して来てなんて指令、曖昧すぎだろ」

が、行かせたところでそれに気づき、俺は急遽式神を戻し眠る紅花の元に付かせると、自分で結界の外へと出て食べ物を探しに行った。一応紅花が結界を通り抜けられないようにはしているが、万が一ということもある。紅花の居場所は分かるものの、うっかり出てしまつて恐竜と遭遇してしまえば目も当てられない。紅花に戦闘力はないはずだ、多分。俺をある程度コピーしているから、生存本能のままに戦えるかもしれないわけだが。

結界の外へ久々に出た俺は、改めて周りを見回した。今まで周囲に注意を向けることはなかったために、風景が変わっていることには気づけなかった。この場所は、俺が来た時は岩や木々で囲まれた概ねただの平地だったのだが、いつの間にか少しなだらかな斜面が出来ていた。それにともない周りの生態系も多少変わっている気がする。ただ、恐竜は相変わらずこの地上を支配しているらしい。そこかしこにそれらしい足跡を発見することが出来た。

「木の実探すと…、あとは、恐竜って食べられるかな…。トカゲみたいなものだし、大丈夫か」

ということとは、この世界は弱肉強食真つ只中。俺に見つかった運の悪い爬虫類？諸君は、諦めて俺の経験値と紅花の血肉になって欲しい。

「うー」

もぎゅもぎゅと幸せそうな顔で肉を食べる紅花を見ながら、俺は溜息をついた。食材集めでの収穫はいくつかの木の实と、草食恐竜を狩って持ってきた肉である。全部は持ってきていないが、他の肉食恐竜が食べつくしてしまうだろう。

木の实は、幸いわりと現代まで形態が変わっていないものもあった。しかし数は少なく、探すのには苦労したが。イチジクとか妙にでかい気がする。

草食恐竜を選んだのは、肉食恐竜は肉が固そうだからという理由からだっただが、しかし草食恐竜の肉も固かった。仕方なく能力でたんぱく質をある程度分解し焼いたのだが、本当はナマモノにこの能力は使いたくはなかった。何が足りないのかは知らないが、そうして出来たものはどうしても味を物足りなく感じてしまうのだ。旨み成分まで再現しているはずなのに、何故か天然物に負けてしまう。美味しそうに食べる紅花を見ると、少し申し訳なく思ってしまう。いつか天然の肉を食べさせてやりたいものだ。：よくよく考えれば、この時代でも哺乳類やその他の動物はいるはずだ。今回は大きい恐竜にしか目が行かなかったが、今度から探してみよう。でも一応残った肉は干し肉かな。

ちなみに炎は術を使って出した。自然界において、なんらかのエネルギーが熱になることなどはまあある。では、妖気とかも他のエネルギーに変換できないかと試行錯誤した結果、実現させられたのが

発火だ。ぶっちゃけありえないとか止めて欲しい、これでも複雑な工程を踏んでいるのだ。今は改良が進んだので簡単な術式で発火させることができるが、最初は調節が難しかった。それこそ周囲を暖める程度の熱エネルギーしか出せなかったり、二十メートルにも及ぶ火柱を出してしまったり。

「う？」

俺が相変わらず酒を呑みながら紅花を眺めていると、紅花はこちらを向き首をかしげた。その様はとても可憐ではあるが、しかし如何せん口の周りは肉汁で汚れ、小袖もえらいことになっている。俺は作り置きしていた紙を取り出して、それで紅花の口の周りを拭いた。紅花はくすぐったそうにしているが、抵抗はしていない。

そんなことをしながら、俺はふと思った。

紅花は俺のことをどう思っているのだろうか？ と。紅花を生んで、大した時間は経っちゃいない。そんな生まれただかりの紅花は、俺をどう見ているのか。紅花は確かに子供だが、何も出来ない人間の赤ん坊というわけでは実はない。歯は生えそろっているので肉を食べることだって出来るし、あるいは歩くことだって出来る。それは、身体は出来上がっているということもあるが、無意識下で俺から受け継がれた情報を使っているためだろう。

だが、その精神はやはり子供なのだ。言葉はまだ分からないし、簡単なことで笑ったり泣いたりする。

そんな子供な紅花は、生まれてからずっと目の前にいる俺のことをどう感じているのか。

問題は、俺自身ですら紅花のことをどう思っているのか分からないことだろうか。ただ言えることは、俺は紅花のことを道具だとは思

っていないということだが。

「なあ、紅花」

「う？ ニヤア、ベ二八な？」

俺が紅花に話しかけると、紅花はたどたどしくも俺の言葉の真似をした。やはり、早い。俺の真似とはいえ、何かをしゃべろうとすることは出来ている。

俺は、一言一言を区切るようにゆっくりと繰り返し紅花に言った。

「ベ・に・ば・な。お前の名前だ」

「ベ・に・ば・な。なまえ？ ベに・ばなの、なまえ？」

「そうだ、紅花の名前だ」

何度もいったが、紅花には既に十分な知識がある。単語の意味を合致させてしまえば、十分彼女とでも会話になるはずだ。元々赤ん坊は周りの人間が話している言語を聞き、言葉を学習するものだ。ならば、紅花がしゃべれるようにするのなら、会話が一番のトレーニングではないか。

「その肉は、おいしいか？ 俺が、取ってきたものだ」

「その、ニク？ おいしい、ベにばなは。とてきた？」

「この肉は、おいしいか。それはよかった、とって来た、甲斐がある」

「このニク、おいしい。ヨカッタ？」

「ああ、とても、いいことだ」

そんな風に、途切れ途切れにゆつくりと会話しながら俺は紅花に言葉を教えていった。まだ言葉はたどたどしいが、しかしどのようなものか覚えてしまえばあとは慣れでどうとでもなる。何だかんだいっても、こうして実際に会話は成立しているのだ。なにより、紅花は俺の言う言葉を考えトレースしている。言葉を使おうとしている意志があることが、俺には喜ばしかった。と、そこで俺は忘れていた事を口にした。

「そういえば、言ってなかったな。俺の名前は、ウカノミタマだ」

「オレ・ウカノ？」

「……それでいい。だがあえてもう一度言わせてもらおう、私の名前は、ウカノミタマだ」

別に俺が『俺』を使うのはいいんだが、紅花が『オレ』と言うと不安になるのは何故だろう。そう思った俺は、急遽一人称を『私』と偽った。

が、次に紅花から出た言葉に俺は固まった。

「おかーさん？」

「そうだ。……………あれ？」

無邪気に言う紅花に思わず頷いてしまった後に、首を傾げる。そんな単語は、俺は教えてないぞ。いや、単語は知っているだろう。し

かしそれが正確に使えるかどうかでいえば、別の話だ。
それも、俺が『おかーさん』だと？ 俺がおかーさんである要素が
いったいどこにある。

「おかーさん！」

「げふっ」

突然、紅花が俺の腹にぶつかってきた。しかも頭からである。紅花
の思わぬ頭突きに、俺は上体を折り空気を吐き出した。境界を張っ
ていなかったために思わぬダメージを受けたが、しかし紅花が怪我
をする可能性を考えるとむしろこちらの方がよかっただろう。

「お、私は、紅花にとって、母親なのか？」

分からないのならば、本人に聞けばいい。俺のこんがらがった頭は、
そんな答えをはじき出した。そもそも、何故俺はこれほど戸惑って
いるのか。

俺はきりきりと腕で腹を締め付けてくる紅花に尋ねた。もしかして
これは締め上げているのではなくて、抱きついているのだろうか。
紅花の力が強すぎて、攻撃にしか思えない。

もぞもぞと紅花は俺の腹部で動きながら、ぐっと俺の方に顔を向け
た。

「ワタシ、ハはおや？ ワタシ、の、おかーさん。ウカノ・は・ワ
タシの、おかーさん！」

そう舌足らずな口調で、しかし赤い耳と尻尾を嬉しそうにはたはたと
動かしながら、紅花は俺に笑顔でそう言った。そして、一層強く
俺に抱きついてきた。それはそれは嬉しそうに。

紅花に、言葉の知識はある。

ならば、自身を生み自身を叱り自身に食べ物を与え自身を守るものがどう言う存在なのか、その存在がどの言葉に当たるのかを自分で考え探し出したのだろう。

紅花が俺をどう思っているのか、だって？

『生まれてからずっと目の前にいる俺』。そんな女を生まれたばかりの子供がどう見るかなど、そんなことは考えるまでも無かったよ
うだ。

俺にしてみてもそうだ。今まで俺は、無意識に紅花のことを気に掛けていなかったか？ わざわざ食べ物をとってきたり、紅花が美味しそうに食べていたり紅花が成長しようとしている様を見ると嬉しくなったり。

永い、永い時間を掛けて、俺は紅花を生んだ。腹を痛めたわけではないが、苦勞しながら生んだそんな存在に、愛着がわかないわけが無いじゃないか。

「そうだったんだな。紅花は、俺の子供らしい」

俺は紅花の赤い頭に手を置いて、そつと撫でた。初めて触ったその頭は、とてもさらさらしていて俺のものより触り心地が良い気がする。紅花が自分の物ではなく俺の尻尾を触っていた理由は、こういうことなのだろう。

「あー」

目の前で嬉しそうに揺れる尻尾を、俺はいつになく穏やかな気持ちで見つめていた。子持ちの親というものは、いつもこんな気分にいるのだろうか？ それは、とても幸せなことじゃないか。

…イザナギがあのかぐツチを愛し、イザナミさんがあのかぐツチを大事に抱いていた事も、今では分かるような気がした。

子供って、よく分からない（後書き）

私、を使っちゃいましたね。親心ってやつです。これからどうなるかは分かりません。両方混ざってしまうかも。

過保護親ってモンペかな（前書き）

今回短いですね…。何でこんなに描写がうまく書けないんでしょう。
時間を掛けてごらんの有様です。

過保護親ってモンペかな

紅花は基本的に活発な子である。

結界の中においても十分元気なのだが、紅花は外に出るとさらに活動的になるのだ。結界の外に出した途端に、紅花はびゅんびゅんと地を走り、空を飛び回り始める。中身がまだ精神年齢の低い子供なのだから、動きたいという身体の不ずきに抑えが利かないのは当然のことだが、しかしその身体能力は普通の子供どころかそこいらの生物を軽く凌駕している。さらに精神的未熟さに付随して、紅花はただその力のコントロールすら未熟なことが問題だった。

例えば走り回っている時にうっかり小型の恐竜にぶつかりでもしたとしよう。おそらく恐竜はその衝撃で首の骨でも折れて、ぽっくりあっさり死んでしまうことだろう。そんなことになってしまったらその恐竜はとりあえず食べることになるだろうが、それでも『うっかり、偶然』殺してしまった等という経験が紅花に悪い影響を与えらるだろうことは想像に難くない。…いや、俺は紅花がもしも何かの命を奪ってしまった時に、彼女がそのことに何も感じないでいるかも知れない事を恐れているのかもしれない。俺自身がそうだったゆえに、そうなる可能性も十分にある。

だから俺は、紅花が結界の外に出ている時に彼女から目を離すことはない。

ただそんな時、俺はこう思うことが多い。俺じゃない俺がもう一人欲しいと。

紅花を外に出した時は、大抵数体の式神を遊び相手兼護衛に付けて

いるため、意識の全てを紅花に向けることは出来ない。なぜなら、確かに式神はある程度自身で行動し、自身で思考することはできるが、その式神という術式を維持しているのは間違いなく俺だからだ。割かれる意識は一体ごとでは微々たる程度であるが、しかし間違いなく意識に隙はできる。式神を増やせば増やすほど手は増えるものの、しかしその分俺の思考能力は式神維持に割かれてゆく。そして俺の情報処理能力とて馬鹿げた性能こそあるものの、決して無制限というわけではないのだ。

できるだけ外に出た時は、俺は紅花の自由にさせている。そもそも、厳しすぎる抑圧など子供にはストレスにしかない。ならばガス抜きは必要であるし、適度に自由に走り回っている方が子供としてはとても健康的だ。しかし自由にさせる分、万が一の時のために紅花のサポートをする式神は多く必要になる。それだけ、紅花にも注意を向けなければならないはずの俺の隙は増えていくのだ。

紅花に集中する俺と、式神に集中する俺。もしも身体も思考も分けることが出来れば、その利便性は計り知れないだろう。今とて紅花の面倒に苦労はしているものの手に余っているわけではないが、もしもの事態が起こってしまった時にこのままで大丈夫か？と思うことはままある。結局、紅花の世話がメインとなっているため、その構想には着手できずにいたわけだが。

結界の中にいる時は、紅花には俺の知る術式について教えていることが多い。核に負の気の特性を打ち込んだために偶発的に後付けされたのか、紅花は俺同様妖気を放っていた。そのため、妖気用の術式を教えることも無駄にはならない。紅花は術式についての知識も持っているはずだが、全てを持っているわけではないし、そもそも

今の紅花に使えるものでもないだろう。紅花に何かを学習させることで、紅花の思考力を養うためとも言えいいだろうか。幼い頃に培われたものが後々に与える影響も大きい。

ただ問題は、やはり子供な紅花には堪え性がないと言ったところか。やはり自由に元気に走り回ることが好きなのだろう、俺が教えていてもどこか上の空で、身体がうずうずしていることは良くあることだ。だが、時には我慢することも大切だ。遊ぶ時は遊び、学ぶ時は学ぶ。食べる時は食べ、寝る時は寝る。俺とてそこまでキチンとしているわけではないが、しかしこういうことは親として模範とならなければなるまい。将来紅花にだらけた娘になられると、きっと俺は後悔しても仕切れないだろう。

うーん。俺ってなんか過保護だよなあ。

俺は式紙や式玉状態の式神を調整しながら、術式を刻んだ複数枚の式紙をしかめ面で睨んでいる紅花を横目で見ながら、そんな事を考えていた。

確かに俺は紅花には幸せでいてもらいたいし、いい娘に育って欲しいとは思っているが、ちょっと神経質にきちきちし過ぎてやしないか。ここにいる俺は本当に俺なのか、本気で考えそうになる。しかし紅花を前にすると、やっぱり過保護な母親になってしまう。本当の俺はもつとだらけていたはずなのだが。

「おかーさん、おかーさん」

と、隣で式紙を睨んでいた紅花が式玉をつついていた俺に声を掛けた。

「どこか分からないところでもあったか？」

「う、えと、あそぼ？」

紅花は少しおろおろしながら、おずおずと口を開いてそう言った。
無意識か故意か上目遣いに俺を見ながらではあるが、残念ながら俺にはそんなものは微塵も利かない。

俺は相も変らぬ動かぬ表情で紅花の持つ式紙を指差しながら言った。

「それはもう出来たのか？　それが理解出来てるのなら、構わないが」

「えう・で、できた、よ？」

「そうか。じゃあ少しテストだ」

「えっ」

「その式紙の2＃84と332＃3はどの部位を基盤として2＄45とリンクしている？　ついでに、これらの基点となっている部位も合わせて答えなさい。片方でも答えられたら、合格だ」

「え、あうー2＃84いー？　わ、わかんない・の…」

「その式紙の術式を理解していれば、式紙を見るだけで答えられるようなテストだぞ。紅花、遊びは、勉強が終わってからだ。今回は1＄から34\$22までだからな」

涙目になっている紅花に、俺は無情に告げる。…別に勉強を急ぐ必要などとは無くゆっくりやっていけばいいのだが、しかしそれを甘や

かす口実に使つてはいけない。一度言つた事を、子供の我侭で折るようなことは絶対にしてはいけない。駄々で現状を変えられるなど覚えてしまえば、それはそれは碌な者になれないだろう。

「うーっ・ワタシ、つかれた・の！ もう、あそびたい！」

…が、勉強の合間に休むことは必要か。適度な休憩は集中力持続のために必要なものだ。

紅花の言葉でそう思い、俺はその場から立ち上がった。

「紅花、私は少し出かけてくるから、いい子で留守番していなさい」

「ワタシ・も、おかーさん、と、おそと・いく！ ワタシも・いきたい！」

「駄目だ。今回は食べ物を探してくるだけだからな、ここで大人しくしてなさい」

俺は置いてあつた式神の核のうち式玉を一つ抜き取り、式神を一体顕現させた。そして俺の尻尾にしがみつく紅花を霊体化しながらかわして、外に出ていった。この時俺は多大なミスをしていたのだが、気づいたのは事が終り、大事が始まってしまつてからだつた。

「おかーさん！ …うー。おかーさん…」

紅花は赤い瞳に涙を滲ませながら消えていくウカノを追いかけたが、その途中でウカノの式神に阻まれてしまった。

「いけません」

ウカノの声や紅花の声に似てはいるものの、しかしその声は紅花は言うまでもなくウカノと比べてもとても無機質なものだ。紅花は濡れた眼を向けて式神を睨んだが、顔の上半分を隠す狐の仮面のせいで式神の眼は見えず、そして下半分に見える口も少しも揺らいではいなかった。

「おかーさん・と、ワタシ、おそと・いきたい！」

「ここで大人しく待たせるようにと、ウカノさまに申し付けられています」

涙声で訴えても、式神は欠片も引く様子はない。そう、たとえ四肢千切れようと式神は命令を遂行するだろう。恐怖心などの負の面もあるとはいえ、柔軟性を持つ感情といえるようなものを、ウカノが持たせられなかったためだ。

紅花にしてみれば、時には自分の遊び相手で、時には自分を邪魔する、そんなちぐはぐな相手だった。そして、今はもちろん自分の邪魔をする相手だ。

そもそも、紅花を遮るものは式神だけでなく、この周囲に張られた結界も同様である。ウカノが一緒に時ならすつと通れる薄膜のような結界も、紅花一人の時はまさに壁のようだった。式神も結界もウカノが紅花を心配するがゆえなのだが、紅花にとってはどちらも自分の邪魔をするものである。

普段なら紅花も大人しくしているのだが、この日の紅花はある意味運悪く我慢の限界だった。身体がうずうずしてどうしようもない。早く外を掛けまわりたい。そんな思いが心の中で溢れんばかりにな

みなみと揺れていた。

「おかーさんの、ばか…いい・もん。ひとり、で、おそと・いく、の」

そう呟く紅花の目の先には、式紙や式玉、そしてウカノの置いて行った式神がいた。紅花は何故か自分を邪魔する式神をなんとかできそうなの、そんなおかしい感覚に突き動かされながら、式神にその小さな手を伸ばしていた。

過保護親ってモンペかな（後書き）

なんだかまたえらく成長してますね。流暢にしゃべりだすまでもう少しでしょうか。

心の痛みとは他をおもつが故である（前書き）

書けました！。最近は特に東方とは何の関係もありませんね。申し訳ないです。この、空気読めないやつめ！とかはやめてくださいね。

ところで ■ ってよく使ってます。便利ですな。

心の痛みとは他をおもうが故である

結界に紅花を置いて食べ物を探しに出た俺は、しかし十分も経たないうちに探索をやめ、結界のあった場所へと全力で引き返していた。この時の俺は近年稀に見る焦りようだったろう。植物だろうが岩だろうがお構いなしに吹き飛ばし、元の場所へととにかく走る。望外予想外の出来事と結界の中にいたはずの紅花の安否にかきたてられ、他を気にしている余裕など無かった。

つい先ほどのこと、あの場所に何万年も張っていた結界が破壊されたのだ。幾度となく改良し、張りなおしていたため綻びなどは決まてない。しかし、仮に恐竜が大挙をなして体当たりしても破壊されないような結界は、『内側から』呆気なく破壊されてしまった。

実を言えば、あの結界は外側からの力に対してはそれこそ物理的にも馬鹿げた防御力を誇るが、しかし内側はそうではない。元々あの結界は外側からの干渉を遮断するために張ったためのもので、決して内側にいるものを捕らえるための結界ではないのだ。いや、今の紅花程度の力では破壊出来ないほどの代物ではある。だが仮に、俺の式神が八体ほどで攻撃すれば破壊出来るのではないだろうか。

そつだ。俺の結界を破壊したのは十体の俺の式神だった。

「やっぱり……！ 全部なくなってる！」

結界のあったはずの場所は、地面がえぐれ術式の残滓も分からない

ほど惨憺たる光景となっている。紅花も俺の式神もどこにもいなくなっていた。そして、置いたままにしまっていた式紙や式玉も無くなってしまうている。

俺はその場を中心にして、感覚を外側全方位に向けて限界まで広げた。瞬間、頭に入る情報量も莫大なものとなる。それら全てを取捨選択し、紅花と式神の反応に意識を集中した。

本来なら俺の式神は常に俺とパスでつながっている。それは俺が式神を維持するためであり、そして万が一の時のための安全装置でもある。どれだけ離れていようと、精度は落ちるものの、俺の能力の特性上俺には式神に対しある種の絶対権があった。たとえ他人が俺の式神を操っていたとしても、有事の際には俺がコントロールを奪えるようになっていたのだ。

しかし、今回俺の結界を内側から破壊した式神達は完全に俺の手から離れてしまっていた。紅花の世話を任せていたはずの式神からもその反応は無い。そのコントロールどころか、もしものためのパスですらだ。こうなってしまうては、一度近くまで接近し直接能力で奪い返さなければならぬ。

俺の感覚に引つかかったのは、この場から高速で離れてゆく十体の式神、そしてそのうちの一体を追いかける紅花だった。おかしいことに、十体の式神はそれぞれ別々の方向に動いており、まるで整合性が取れない。

「まさか、暴走しているのか？」

もともと俺が式神を作った時から、億が一にでも何らかの形で暴走をしてしまう可能性は考慮していたため、パスをつないでいたのだ。

しかし、そのもしものためのパスも今は途切れてしまっている。このパスは何者かが術で奪えるようなちやちなものではない。先も述べたように、俺には式神に対し能力による不条理な絶対権がある。もしもパスに干渉できる者がいるとすれば、それは俺と同様、同系統の不条理な能力を有している者に他ならない。

「くそ！ 完全に俺のミスだ…！」

そして、式神は基本的に受動的にしか動かない。暴走する時にしたって、誰かが一度発動させなければ暴走などするはずがない。結界の中にいたのは、俺の式神と紅花のみ。この式神も何者かに操作を奪われた事を考えると、やれる者は一人しかない。

俺の誤算は二つ。一つは、結界を外側からの侵入がほぼ不可能だと推測していたことから、内側を考慮せず絶対のものと過信してしまったこと。もう一つは術式をまだろくに扱えないと思っていた紅花のそばに、式神の核たる式紙や式玉を放置してしまったこと。

紅花は、俺の情報をいくらコピーした一個の存在なのだ。俺の能力もいくらか引き継いでいたとしても、不思議ではない。今式神が暴走させてしまったのも、この能力をうまく使えていないせいだろう。

紅花が式神を追いかけていると思われるのは、おそらく俺に叱られると思ったためだろうか。だが、今回の原因は俺の不注意だ。

「怪我などしてくれるなよ！ 紅花！」

式神を三体作り、散らばる式神のうち九体を追わせ、俺は紅花のいる方向へと全速力で飛んだ。行かせた式神には、どうにもならない

時は式神を破壊するようにと指令を与えてある。

暴走している以上、いつかは式神止まる。紅花からのコントロールも外れているはずなので、器を維持する事が出来なくなるはずだ。しかし、それでも放置することは出来なかった。今回のことは俺が原因ではあるが、少なくとも紅花も関わっている。仮に取り逃がした式神が他に大きな影響を与えても、俺は紅花を責める気は微塵も無いが、紅花が自分自身を責めてしまいかも知れない。それを、俺はどうしても避けたかった。

その上、さらに悪いことに今回暴走している式神のうち数体には厄介な機能がついていた。

俺の式神には大まかに分けて二種類がある。半自律式神と、憑依式神である。本来はどちらかでしかないのだが、しかしその数体には試作として両方の機能を付与していたのだ。

憑依式神とは、ある種の拡張ソフトである。既存の存在と契約を結び、それに憑けることでパスをつなぐ。そして憑かれたものは、憑依式神によって本来の自身の能力が拡張される。簡単に言えば、より優秀に強力になるということだろうか。

恐竜に試した時は、相手に契約を結ぶほどの知能が無かったために俺からの強制契約となってしまうたが、得られた結果は大きかった。知能もいくらか上がったのか、俺に対して従順になり、そして他のどの恐竜よりも強くなっていた。…結局その時はその契約はすぐに破棄したのだが。どうせ、強制的に結んでしまったものなのだ。相手の意思など関係なく。

さて、本来であれば俺が契約をしなければならず、憑依式神が能動的に何かに憑依するなどはありえないのだが、今度の、いわば半自

律憑依式神は違う。確証はないが、おそらくあれらは自身を仮主として対象に憑依する事が可能だ。その上暴走してしまっているために、もしも大型恐竜に強制憑依でもしてしまえば、被害は甚大なものとなるだろう。そして、今の紅花では式神憑依した恐竜には勝てない可能性が高い。実のところ、今回の半自律憑依式神とは式玉の式神達だ。式紙による憑依式神とはそれこそわけが違う。

しかし、とにかく俺が近くまで行ければ暴走していようが憑依していようが、強制的に止めることが出来る。俺が行くまで紅花が無事でいる事を願いながら、俺は飛ぶ速度をさらに速めた。

紅花は焦る鼓動を気にもせず地上を疾走していた。目の先にいるのは自分と八割九分同じ姿をした、白い髪の少女である。紅花はその白い少女を追いかけていた。

結界にいた紅花が願ったのは、結界が無くなることだった。何かの理屈が、根拠があつたわけではなく、紅花は自然に式神に手を伸ばし、ひたすらにそれを願った。

そしてその願いはすぐに叶う。式神達の暴走という形で。

紅花はまだ術式を自身で組み立てることは出来ない。式紙を介せばその式紙にある術を使えるかも知れないが、しかし式神はそれとはわけが違う。それでも紅花が式神に干渉することが出来たのは、紅花の持つ能力に理由があつた。

『式神を操る程度の能力』。

ウカノの持つ『式を司る程度の能力』と比べると、まるで汎用性に欠ける、むしろウカノの能力を劣化コピーさせたような代物かもしれないが、こと『式神』という分野においてはウカノに近い絶対権を持っていた。

だが、紅花が望んだのは漠然とした結果であり、明確なコントロールは最初から取らなかった。そして紅花は能力の使い方も、そもそも能力を持っていることすら知らなかった。それゆえ、顕現していた式神も、式紙や式玉状態だった式神も、ウカノや紅花の操作から外れ、結果的に暴走したのだ。これは、紅花も、増してや式神達が意図したものでもない。本来ならば、誰からの命令も受けていない式神の機能は停止するはずなのだ。

今回の起動が無意識の紅花の能力が原因だったために、中途半端な命令を受けた式神達は誰からの操作もないままに暴走してしまった。ある意味、紅花の能力は優秀だったとも言える。不完全な形で発動し、式神を『操る』ことは一瞬しか出来なかったわけだが。

暴走を始めた式神達に対し、紅花は何も出来なかった。

スペックならば紅花の方が確実に上なのだが、しかし機能性という面では、経験の足りない紅花ではただただ機械的な式神達には劣る。その上、一度に十体の暴走となると紅花には止められるはずもない。結果的に式神達は結界を滅茶苦茶に破壊すると、方々へと凄まじいスピードで勝手に走り去ってしまった。

紅花は呆然としていたが、すぐに我に返り式神のうち一体の後を追いかけた。ウカノの結界を破壊し、そしてウカノの式神達を理由は分からないがあちこちに散らしてしまった。なので『おかーさんに叱られる。おかーさんがワタシを嫌いになっちゃう』、そう思った

のだ。もともと外に出る、という言いつけを破るようなことをしようとしていた紅花だが、これらのことはそのこと以上にまずいことだと、紅花は気づいていた。しかし紅花は何をすればいいか分からず、とにかく式神を追いかけることにしたのだ。

「まっつて、あ、もと・もどつて…」

前を走る式神に必死に呼びかけるが、式神は無言のまま走り続け紅花に答える気配は全くない。紅花には、その後ろ姿がウカノの、母親のものと重なってしまった。だから、紅花は必死に追いかけた。ここで白い式神を見失えば、ウカノにも置いていかれるような気がしていたのだ。

「まっ・て…おいて、いか、ないで」

紅花は懸命に手を伸ばした。ウカノに生み出され、生まれてからウカノしか頼る相手のいない紅花にとっては、ウカノは自身の全てと言えよう。だからこそ、置いていかれることなど、それは紅花にとって死に等しいことだった。

「えう!?!」

急に、前を疾駆していた無表情の少女が紅花の方を振り向いた。しかしそれは止まるためではなく、紅花にとっては最悪の展開だった。少女は、強く地を叩く音とともに紅花の方へと高速で方向転換したのだ。紅花はそれにすぐ反応できるはずもなく、迫る少女に対し何の防御も出来なかった。

物言わぬ少女の言葉は、紅花と同じ大きさのはずの小さな拳だった。しかし、見た目はただ脆そうなのは、岩のような硬さを伴い凄ま

じいスピードで紅花の腹につき込まれる。スピードに乗っていたはずの紅花の身体は、その逆方向へと簡単に飛ばされた。

「あつ、ぎゅっ」

地に勢いよく倒れた紅花の口から、うめき声が漏れる。肺から一気に空気が押し出され、咽たのだ。

「い、たい…いたい・よう…」

お腹がちりちりと熱さを帯びてゆき、そして身体の中までずきずきと痛んでいく。痛みというものを初めて知った紅花は、感覚を支配してゆくそれに、ただお腹を押さえることしか出来ない。その視界も、何かをこみ上げるとともに涙で歪んでいった。

「\$¥山B?& a m p ;\$#」

「ひっ！ おかー・さん…おかーさん！」

ざしつと、何かが地を踏む音ともに、そんなわけの分からない、言葉なのか音なのかも分からないものが聞こえ、紅花は身を竦ませた。恐怖が全身を支配し、そこから動くこともままならない。紅花にできたのは必死に母親を呼ぶことだった。

「…?」

目を閉じ震えていた紅花は、何も起きないことに首をかしげた。と、それからいくばくもないうちに、地面が微かに揺れる。だんだんとその揺れは大きくなってゆき、ついに『ずしん』という音が紅花の間近で聞こえた。その音は、間違いなく何かとても重いもの

「あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああつ!!!?」

恐竜は一声吠えるのがばつと口を大きく開き、目にも止まらぬ速さで紅花へと迫った。牙の一本一本が唾液でてらてらと光り、口の端からびちびちと唾液が飛び散る。一瞬の光景だったが、それらが紅花にははつきりと見えていた。それと同時に紅花の身体が完全に硬直する。先の恐怖など比べ物にならない脅威が、殺意じみたものを撒き散らし迫り来ているのだ。

その瞬間、紅花の見る世界がともゆつくりとしたものになる。この時の紅花の頭にあったのは、未知^死への恐怖と、ウカノの言いつけを破ってしまった後悔だった。

そして

「うちの娘に何しとんじゃこらあああああああつ!!!」

轟と、その全てが鈍速の世界において、巨大な瓢箪が紅花の頭を食いちぎろうとした恐竜の巨軀を凄まじい勢いで薙ぎ払った。

恐竜の姿は紅花の視界から掻き消え、余波が周囲の木々をざわざわと鳴らす。紅花は目まぐるしく変化していった光景に対応できず、ぱくぱくと口を開閉させた。

「紅花っ」

俺は空っぽの表情で膝をついている紅花に走りよった。紅花も俺に気づいたのかよろよろと立ち上がり俺の方へと歩いてくる。紅花の腹部の様子がおかしい。やけに体温が上昇している。それはつまり紅花が何らかの怪我を負ったということだろう。

間に合わなかった、そんな言葉が、俺の頭の中でめぐる。確かに、紅花は死んではいない。だが、身体にも精神にも傷を負わせて間に合った等と言えるか？ いいや、言えるはずがない。

俺の不注意で、紅花に傷をつけてしまった。正直、悔やんでも悔やみきれない。

と、紅花は俺の手前で立ち止まると、俺から顔をそらすように少しだけ顔を俯かせた。その口は小さく動いている気が、俺にはした。紅花にさらに近づくと、俺の耳に小さな声が聞こえた。

「……ご・めん、なさい。ごめん、なさい、ごめんなさい」

次の瞬間には、俺は紅花の小さな身体を抱き締めていた。

「ごめん。ごめんな、紅花。俺が、悪かったんだ」

ふるふると震える身体を、ぎゅうっと抱える。溢れだしそうな紅花の心を安心させるように、包むように。

徐々に紅花の謝る声は小さくなってゆき、代わりに喉の奥から漏れだす嗚咽が大きくなっていく。紅花もぎゅっと俺の身体をつかんだ。

「うーうーうーうーうーあああああああああああああああああ

「ああん!!!」

「大丈夫だから、もう大丈夫だからな」

とうとう大きな声で泣き出した紅花を、俺はただただ申しわけなくて、ただただ愛おしくて、抱きしめ続けた。少しほつれてしまった髪を撫で付けるように撫でる。俺の服は紅花の涙でどんどん濡れていったが、少しも気にはならなかった。いや、むしろそれほど泣いている紅花のことが気になっていた。

少しでも早く、また紅花が笑えるように、また紅花の笑顔が見られるように、俺は少しでも低い小さな赤い頭を撫で続けていた。

心の痛みとは他をおもうが故である（後書き）

他の式神は程なく機能を停止したり追跡者に破壊されたりしています。それと、恐竜は後々で美味しくいただきました。

恐竜はあっさりフェードアウト（前書き）

今回はつなぎみたいな回です。特に何もありません。人間とのファーストコンタクトももう少し先ですね。

時間はめっさ飛んでます。いつまでも恐竜やってても仕方ないので。ただしこれの欠点は、紅花を成長させなきゃいけないんですね。

恐竜はあっさりフェードアウト

紅花が能力を初めて使ったときから、紅花の成長は加速していった。その時以来あまり俺の側から離れようとはしなかったが、俺も紅花を一人にするのは出来るだけ避けるようにしていたので、問題のあることではない。時が経つにつれて、紅花の話す言葉もずいぶんと流暢なものになっている。

特に変わったのは、式神についてよく聞くようになったことだろうか。相変わらず、普通の術式に関しては苦手のようだったが、こと式神においては理屈を越えて紅花は優秀だった。基本は出来ないのに応用は感覚で理解できる天才、といったところだろうか。自分の意識を集中させれば、同時に十数体の式神を維持出来るようになっている。

ただ、一度こう聞かれた時はどう答えるかとても困った。

「ワタシと、式神たちと、どう・ちがうの？」

おそらく、優秀であるがゆえに自分で自身と式神の関係に気づいたのだろう。紅花も式神もその本質は同じものなのだ。だが、決定的に違うものが、両者の間にはある。

「紅花が紅花としての個を持っていること。それが、紅花と式神達との違いだろうな。式神は主体性を持たないんだ。いや、持つことが出来ない。いくら自身である程度判断する思考力を持たせようと、それはあくまでバックで主がいるからこそだ。式神は、自分で自分に命令を下すことが出来ないのさ」

「よく、わかんない」

「うーん…、式神は使うモノがいてようやくその役目を果たせる『人形』、というところか。言い方はあまりよろしくないがな。つまり、俺達が使わなければ式神は自分がいる意味を無くしてしまう、存在している意味を無くしてしまうんだ。だが、紅花は自分が望むことで、自分の意思でここにいる」

銃は撃つために、傘は差すために、靴は履くために。それぞれが意図をもって作られ、そしてそれに沿って使われる。使われることがなくなってしまうえば、それらは在る意味を無くしてしまう。それに、自分で自分を使うことなどできないのだ。
なら式神は？

「式神の存在意義は、誰かの命令を受けて行動すること。紅花と違って、誰かにその存在を証明してもらわなければならない。だから、式神を独りだけにしては駄目なんだ。紅花、式神を顕現させている時に式神とのつながりを絶つことは、絶対にしたら駄目だぞ。存在意義を失ったものがどうなるか、もう、分かってるよな？」

あの時のことを引き合いに出すことは、卑怯だ。しかし、これは紅花が式神達を使う上で絶対に知っていて欲しいことだった。

元々、話し相手が欲しくて作ったのが式神だ。しかし、彼女達に紅花のような自己を持たせることは出来なかったため、今ではその在り方もずいぶんと変わっている。紅花を作り、それでも俺が彼女達を使うのは俺にとって必要な存在だからだ。俺は式神達を道具だと考えている。しかし、だから積極的に顕現させ使っている。それが俺にとっての、式神を使う上での責任だと考えていた。

紅花が式神に対してどう感じるかは彼女自身の問題だ。だが、意思ある者は 道具《力》を使う時はそれに対し何らかの責任を負わなければならない。それが、最低限俺が紅花に理解して欲しいことだ。

「よく、わかんない・の。でも、わかったよ、おかあさん」

俺の言うただただ難しい事を、紅花は眉根を寄せて聞いていたが、やがて顔を上げて俺の顔を見つめ、そう言った。必死で考えて、出した答えはきつと感覚的なものなのだろう。だが、俺はそれでもよかった。紅花が、自分の在り方に迷うことはないと確信したからだ。紅花を俺の子供だと感じた時から、ずっと気がかりだった。紅花が式神と自分のいくつもの共通点に気づいたとき、それをどう思うのか、ということ。

しかし、やっと肩の荷が降りた気がする。

そういえば、実は世界から恐竜が絶滅してしまった。原因は、ある時地球に激突した直径数キロの弩級隕石である。凄まじい速度で迫っていたそれも、物体が大きすぎるゆえに目ではとてもゆっくりしたものだ。しかしその影響は尋常ではなく、余波で地球を覆いつくしてしまったほどだ。

俺は早い段階に察知していたため、いつかのように強力な結界を張って紅花と引きこもっていた。

巻き上がった塵は空を覆いつくし、いくつもの粒が地上に降り注ぎ、隕石直撃を生き延びたものも環境の変化に耐え切れずばたと死んでいった。俺は式紙をいくつも飛ばし中継していたのだが、それ

はまさに地獄絵図と言えよう。実際に地獄を知っている俺が言うのだから、間違いない。

つまり、その急な変革で次々に倒れていったのが恐竜だったのだ。さすが爬虫類と言わざるをえない。

恐らく、これを生き残り進化するものが次の地上の覇者になるのだろう。このまま、後世に知られるとおりに進むのならば、人間が恐竜に台頭するようになるのだろうが、そんなのは恐竜が滅んで6000万年は経ってからのことだ。

俺も正確に時を計測していたわけではなかったが、チンパンジーとヒトがわかれ始めるのにそれぐらいかかったように思う。彼らは他の動物と違いいち早く道具を有効的に使い始め、そしてそれに適した状態にどんどん進化していった。ちなみに、つい最近久しぶりにヒトに襲われてなんとなく感動したところだ。懐かしすぎる。結局力関係的には俺の方が何倍も上だったので、逆に追い散らすことになったのだが。どうやら同じ人型をしていても、俺は彼らには尻尾や耳で異属と認識されらしい。

「おかあさん。さっきなんだか、ワタシたちとそっくり、なのを見たよ?」

引きこもっていた結界から出て、俺達は安住の地を求めて各地を旅していた。場所を変えるたびに、俺の目に映る猿人は進化していく。そしてある時俺の隣を歩いていた紅花がそう言った。

「尻尾は? あったか?」

「んーん、なかったの。あの、ナマモノたちは、なになの？」

紅花はもっふもふの尻尾をゆらしながら、首を振った。そう、昔は尻尾が一本しかなかった紅花も既に九尾へと変じている。ただ、俺と同じように尻尾が霊体化することは恐らくないだろう。なんとなくそんな気がする。力もそれに合わせて大きくなり、能力の使い方も俺と遜色の無いレベルに近づいてる。ただ何故かまだ言葉が物足りず、長文を口にするのはあまりない。俺以外の誰かと話す機会があれば、いつか改善されるかもしれないが。今はまともな話し相手が俺しかないのだ。

「今まで、サルは時々見ていただろう？ あれらが変化、進化してゆくと、俺達そっくりになる。『人間』、とこの先呼ばれるものだ。紅花が生まれる前にはずいぶんと発展してたぞ？ 地上一帯破壊して月に逃げてったけどな」

ああ、アレを思い出すと忌々しくなるな。永琳を思い出して和もう…。

「ワタシたちとは、違う、いきものなの？」

「そうだな。似てはいてもまったく違うものだ。俺や紅花は、…そうだな、『妖怪』が一番あてはまるかな。少なくとも、『人間』とは本質的に相容れない存在だ。あるいは共存出来るのかもしれないが、共感は出来ないよ。絶対にね」

人間がでてきたのなら、直に本丸の妖怪達も姿を現すだろう。いや、もういるのかもしれない。何せ、人間にとってこの世界は未知に溢れているのだ。

「…おかあさんの、言うことは、いつもむづかしい」

「難しい方が、紅花は頭を使うことになるだろう？ 使えば使うほど、頭も成長していくものだ」

「ワタシも、おかあさんみたいに、なれる？」

「なれるさ、紅花ならな。…まあ俺と違って淑女になって欲しいがな。俺は今更そんなものになるうという気はおきない」

今では紅花と俺の体格はまるで同じものになっている。手を俺の頭ぐらいの位置に持っていないと、頭を撫でられないのでなんとなく寂しい。

外見だけ見れば紅花と俺はそっくりに見えるだろうが、しかし実際はまったく違う。髪の色は違うし、服のデザイン、色も違う。俺は相変わらずの無表情だが、紅花は俺と違い表情豊かだ。腰についている尻尾の色も違えば、数も違う。紅花は普段から九本だが、俺は七本を擬態し二本だけ出している。

さすがに九本もあると邪魔にならないんだろうか、尻尾。

「人間があのような形になり始めたってことは、住む場所も急いだ方がいいな…」

「どうして？」

「あと数百万年もすれば、連中はこの地上に偏在する種族になる。版図を広げられる前に、俺達の領域は少なくとも確保しておきたいさ。」

「でも、たまをひとつなげたら、にげていった、よ？」

「こら！ 俺達と似てるからって、そんなことしちゃいけません！」

「ご、ごめんなさい…でも、にんげんは、よわいよ？」

「人間の強みは、並外れた向上心とぼこぼこ増えていく繁殖力、そして適応力だ。力が弱いからこそその能力だろうな。それに、ごく稀に強い人間も生まれるはずだ。…まあ、そういう存在は異種族に牙を剥く前に同種族の人間に潰されるだろうがな」

スサノオやツクヨミも、確かそうして捨てられたと聞いている。それでいて都市のトップに立てたのは、バックにイザナギがいたことと、明確な力を知らしめられるほど成長できたからだ。不確かな力ほど怖いものはないだろうからな。

「どうして？ 同じにんげんなのに？」

「それこそ、弱いからだ。人間に限った話じゃない。出る杭は打たれるといったところか、同じ杭でも、突出していればそれは違う存在に見えるらしいな」

はて、人間だった時、俺は弱いから強くなろうとしたんだっけか。もう昔のこと過ぎてほとんど覚えてやしない。一応名前は忘れてないんだがな。

「ふーん。へん、なの」

「…そうだな。そうかもな。だが紅花、否定してはいけないぞ。俺達がこういうナマモノであるように、彼らはそういう生き物なんだ。

彼らを否定すれば、それは俺達を否定するも同然だ。違うのは、当たり前のことだからな」

またもいちいち難しい事を選んで言う俺の言葉に、紅花は眉根を寄せた。あの時から、紅花の向上心は強くなっている。紅花は、自分がわからない事に対して『理解しようとする努力』を怠らない。それが今の紅花の強みだ。

「そういえば、おかあさん。どういう、ばしょ、さがしているの？」

「ん？ そうだな、見晴らしや景色が良く、緑があつて、それから肥沃な土壌の土地がいい。そうそう見つかるわけじゃないが、だからこそ選ぶのは楽しいし見つけた時の感動は大きいだろ」

酒は酒虫が造ってくれるが、食物はそうはいかない。別に自然にあるものを獲ってもいいが、折角なら安定した収穫をしたいものだ。うーん、畑が形になったら近くには無い新しい作物を探しに行くのもいいな…夢が膨らむ。

数百年の後、俺達は条件に合う小高い山を見つけ、その頂上に陣取った。当初の予定通り、和風の屋敷を建ててだ。俺と紅花の式神を使ったので、建築はすぐに終わった。ちなみに、山の周囲を散策してみたがまだ人間はおらず、様々な動物は住んでいるが妖怪もいなかった。

この世代の人間とまともに出会うことになるのも、それからずいぶん経ってからのことだった。

恐竜はあっさりフェードアウト（後書き）

ちなみに狐の特技はあと二つ出す予定です。ゝ程度の能力ってわけじゃありませんが。

一つは仄めかせてた分霊ですかね。某人柱力の多重影分身みたいなあれより高度であれより利便性に大きく劣る代物ですが。あれはチートすぎます。

食べ物の妖怪（前書き）

ようやく狐無双のターン。でも戦わない。

まともな人間との絡みって、これが初めてじゃないでしょうか。人間が普通過ぎてうまく書けない。笑笑

食べ物の妖怪

この山に来て随分経った頃、世界では縄文時代の終り辺りだったように思う。各地に集落が増え始め、稲作が始められている。石器などはただ不便そうで脆いものから、質実剛健のものへと。そして狩りや採集も前ほどは行われなくなった。

また、外に目を向けるようになったのか他集落同士の戦争も流行っているようだ。多分そのうち、クニにでもなるんじゃないだろうか。

俺もその波に乗り、山の上だけでは飽きたらず麓に水田を始め様々な畑を作った。時折山の屋敷から遠くへと旅をし、その度に新しい何かを見つけてくることは俺の楽しみと化している。世話は俺や紅花が直接することもあるが、大体は式神に任せていた。ちなみに、俺が世話をする時は神気を振りまいている。何故か知らないがその方が発育がいいのだ。その分俺は楽をさせてもらったのだが、しかし途中でまずいことに気がついた。式神に任せていることが多かったために気づかなかったが、自分達が消費する以上のものを作ってしまったっていたのだ。仕方がないので、余ったものはとあるところに貯蔵してあるが、畑を削減するのも少し勿体なく、過剰にある田畑を俺はどうしようかと迷っていた。

さて、そこら一帯の開墾に調子に乗りすぎて、そうして少し困っていた頃だ。俺は屋敷の方で昼飯を作っていた。毎日食べる必要はないのだが、紅花は何かを食べることが好きなので俺達は定期的に食

事を擧っている。俺もたまに一日中何かを食べていることもあるが、そういう時は酒の方がメインだ。

人参やたまねぎを親の敵のごとく切り刻んでいると、紅花が少し困った顔でやってきた。

「おかあさん、にんげんがちかくまで、きてるみたいなの」

「ふーん。とうとうこの辺りにも来たか。ま、遅かったぐらいだな。ほつといてもいいだろ」

「でも、はたけに、どろぼうしてるみたいなの」

「何だと？」

「いま、ワタシの式神が、とめてるの。でもひとり、つよいにんげん、いるの」

「今畑の方で見張りしてるのは、どの式神だっけ。それから何体で相手してるんだ？ ついでに、人間は全部で何人ほど？」

「しろいろ、ひとりなの。にんげんは、えと、さんじゅうぐらい、いるみたいなの」

いちいち式紙式玉の式神というのが面倒になった俺は、それぞれに呼称をつけた。式紙のものが白色しろいろ、式玉のものが朱色あかいろである。一応バージョンアップは終わっており、白色には三尾、朱色には五尾がついている。とは言っても、俺が三尾や五尾の時の力と比べると確実に力は小さいのだが。

しかし、白色一体とはいえ人間が相手を出来るとは驚きだ。そこい

らの妖怪に負けない程度の力は持っているはずなんだが。それにしても。

「三十人…？　どういう大所帯だ…、もしかして泥棒じゃなくて土地の略奪に来たんじゃないのか？　いや、土地の所有権を声高に主張するつもりはないが、少なくとも俺達の作った田畑なんだがなあ」

「あ…。しろいろ、やられちゃった…。このにんげん、つよいの」

「…俺が行くわ。連中が何しに来たのかも分からんしな」

「わかったの。あ、おかあさん、ワタシはどうしよう？」

「昼飯作つといてくれ。今日はみんな大好きハンバーグがメインだからな」

「わあい。わかったの」

ウカノの領域にやってきた人間三十二人。

誰もが疲れた顔をしていたが、今はその中に希望を宿している。

彼らは、元いた場所を追い出された者達だった。この時代でもそう珍しくはない、里同士の戦争。満ち足りた生を手に入れられると、むしろさらなる欲に走るのが人間の性というものだ。しかし、彼らはその被害者と言っている。小さな里で細々と暮らしているところによってきたのは、大きな里からの略奪者達だった。純粋な物量差

で勝てるわけもなく、被害を甚大に出しながら彼らは自分達の土地から逃げ出した。

逃げ出した当時は五十人ほど、しかし、この人数が移動するなど楽なことではない。外敵疲労飢餓疾病、様々な要因により徐々に一人二人と数を減らし、既に二十人が生存競争から脱落してしまった。残った者達も疲労困憊し、次々と病にかかってゆく。もうだめか、そう思われた時彼らは楽園を見つけた。

見たこともない多種多様の野菜、色とりどりの果物、そしてまだ遠方の一部でしか作られていないされている稲が、ここには広大な地でもって植わっていた。

頬がこけた一人の男が、恐る恐る赤い実に手を伸ばしもぎ取ると、口へ運んだ。普通ならば警戒して食べないようなそれも、飢餓にも脱水にもなりそうな彼にとっては、何かを食べること自体がそれ以上の急務だった。

そして、他の人々もごくりとつばを飲み込み男を見守っていた。

「びやあああああうまiiiiiiiiiiii」

赤い実を食べた男が枯れた喉でそう吠えるときに、それを見守っていた人々がその赤い実へと群がった。あまりの空腹に、そこが誰かに整理された畑であることにも気づかない。

「危ない！」

実に群がった人々を止めたのは一人の少女、それと同時にいくつもの力弾が地面に着弾した。幸い少女の対抗弾幕が間に合い、怪我人はいない。

見た目は幼いが、ある意味彼らの命綱はこの少女だった。道中の外敵からの襲撃を、多少の犠牲で切り抜けられたのも彼女がいたからなのだ。何の訓練などもしたことがない、天然の強者である。彼女は種族人間よりも強い、いわゆる人間の突然変異だった。それでも里を守れなかったのは、純粹に数の差だが。

子供、ということもあるが、その理由から彼女はみなより優先されて食料を回されていたので俊敏に動くことが出来る。

力弾を撃たれた人々をかばうような位置に彼女が立った時に、その彼女の前にさらに幼い少女が空から降りた。顔は狐のような仮面で隠しているのを見ることが出来ないが、身体は人間そのものに見える。しかし、その腰には三本の真つ白な尻尾があった。

「妖怪！？　ここはこの妖怪の縄張りなの！？」

「て、テケ！　大丈夫なのか！？」

「大丈夫です！　相手は一人ですし、それに勝たないとみんなが下がつていてください、すぐに終わらせます！」

テケと呼ばれた少女は、紅白の装束を着た妖怪の後ろにある色とりどりの作物に目を向け、心配そうに声を掛けた人々に力強い言葉を返した。そして少しも動かない白い妖怪へと飛び掛る。

戦いは、熾烈を極めた。この白い妖怪は、今までテケが相手をしたどの妖怪よりも手強かった。力云々の優劣ではない。とにかく戦い方が正確無比な、厄介な相手だった。

いくつもの弾幕が飛び交い、幾度となく両者の拳が交差する。テケとて幼いとはいえ、強者として弱いものを守り続けた戦士である。

仲間である人々は、人間としては珍しく異物とされるテケを仲間だと認めていた。だからこそ、テケも人々を全力で外敵から守る。戦いはテケが優勢だったが、テケは時間が経つにつれ疲労に見舞われてゆき、しかし反対に妖怪は少しも疲れを見せない。

双方の衣服は衝突と時間を重ねていく毎にぼろぼろのものになっていった。人々はその様をつばを飲み込み見守っている。テケが負ければ、人々が目の前の楽園に届くことはないだろう。戦うことも出来ないほどに人々の身体は疲労し、そして精神すらも憔悴していたのだ。

果たして、最後に競り勝ったのはテケの方だった。

疲労で完全に力を下回る前に、彼女は渾身の霊弾を白い妖怪に当てたのである。途端、妖怪は人々の前でふっと跡形も消えてしまう。人々は歓喜の声を上げ、テケを取り囲んだ。そして生きる活気とともに、赤い実へと手を伸ばす。

と、そこでテケはまたしても人々に待つてと叫んだ。

その視線の先には、またしても真っ白な獣耳と二本の尻尾を持つ一人の少女のような妖怪。先の者とは違い顔を隠しておらず、美しい顔を無表情で固めていた。テケと同じほどの身長で、そのほぼ同じ位置にある二つの瞳は金色に光りテケと人々を見据えていた。

「よお。俺の畑に何か用か？ 盗人共」

容貌に違わぬ綺麗な声が妖怪の口から漏れるが、その口調は彼女のどこにも似合わず粗暴なものだった。

テケは二番手の妖怪に対し、危機感を覚える。

——尻尾の数は劣るのに、こちらの方が強い。

テケの経験には合致しないものだった。テケが戦ったことがあるのは尻尾が1〜2本のものである。そして、尻尾の数は先刻戦った三本の妖怪が最高だった。尻尾が多いものの方が強い、今までは確かにそうだったのだ。

疲労に肩を大きく動かしていたテケに変わり、人々が奮起する。手の届きそうな樂園に元氣を取り戻し、そしてテケの奮闘に触発された特に若者を中心に、人々がめいめいの得物を手に前に出た。

「ここで退いてたまるか！ 今度は俺達で妖怪をやつつけるぞ！」

『応！』

「あ、危ないですよ！ みんなやめてください！」

「いつまでもテケ一人にはまかせてられないさ。大丈夫だ、相手は妖怪とはいえ小娘一人、こっちは三十人はいるんだぞ」

「よ、妖怪を見た目で判断しては……！ 私も戦います！」

「すまない……」

フラグたぐさんの会話を黙って聞いていた妖怪に向き直ると、妖怪は首をかしげてまた口を開いた。

「なあ。俺は『何用か』と聞いたんだがな。俺の質問は無視か？」

その口調はとてものんびりしたもので、言葉は粗暴でも無視されたことに対する怒りなどはなかった。純粹に彼女は人々に対して疑問

を呈している。

それに対し、若者勢が敵意をもって返そうとした時。

「待て、お前達」

と、人々の間から一人の老人が姿を現した。

白いひげをたくわえた、往年の男である。この時代においてこれほどの長生きをするものは珍しい。それも、これまでの辛い道程すら耐え切ったのだから、なおさらだ。

老人は妖怪を目の前にして臆さずに答えた。

「我らは、元々は遠くの小さな集落に住んでいたのですが、戦いで土地を追われ、安住の地を求めて旅していたのです。ですが、見ての通りもう食料もなく、我々の体力も限界に近い。名も知らぬ妖怪の方、願わくば、食料を少しでも分けて欲しいのです」

「ふーん。それでここの実を勝手に食ったと」

「それは、申し訳ございません。ここの物が誰かの物とは存じ上げませんでしたので……」

どちらもそういう気質なのかのんびりと会話していると、業を煮やしたのか若者勢がまた騒ぎ出した。そもそも、彼らもう限界の状態なのだ。続く飢餓状態の中、いつまでもたくさんの食べ物をお預けを喰らっていられるはずがない。

「長老！ この妖怪はここの食べ物独り占めして、来て食べようとする者を困らせているんだ！ 俺達の手で、ここを勝ち取りましょう！ 行くぞみんな！」

応と、再び答えた若者達は老人やテケが止めるも聞かず、妖怪へと足を踏み出した。人々の様子をただ見ていただけだった妖怪は、そこで初めて動く。

それは、袖が広く手の先も見えない服の両腕を横に掲げただけの動作だったが、間も置かずその広い袖がごぼりと揺らめいた。次の瞬間、どばつと薄っぺらいものがその袖から大量に飛び出し、一つの生き物のように集合して宙を泳いだ。そして弧を描きながら人々の周りを取り囲む。老人もテケも若者もその光景に呆気にとられ、足を止めていた。

そして薄っぺらいものは次々に発光し、光が辺り一帯を覆い尽くす。人々はそのあまりの眩しさに思わず目を閉じていたが、光が止み恐る恐る目を開いた時には逆に限界まで目を見開き言葉を失った。

『
...』

「う、嘘...」

テケの口から、かすれた声が漏れる。

それも当然か、光が止んだ後に現れたのは、自分が必死になって倒した仮面をつけた三尾の妖怪だったのだから。それと同じ姿をした妖怪が自分達をゆうに上回る数で取り囲んでいたのだ。

「血気盛んなのはいいがな、人間。それでは早死にするぞ。そもそも独り占めも何も、自分達の作った物の所有権を主張して、何が悪い」

人々も、三尾の妖怪達も一言もしゃべらない。前者は驚愕と絶望で、後者は純粹な無口。百近い人型がいるその場が不気味に静まり返っている中、二尾の妖怪の声だけが無情に響く。

そして、その沈黙の中最初に動いたのは長老だった。彼は頭を下げるながら、ほぼ地に伏した格好で声を上げる。

「申し訳ございません！ 彼らはまだ若輩、彼らを止められなかった私に責任があります！ お怒りはごもつとものこと、ですがどうかどうかお許しください！」

既に食料だのなんだの言っている問題ではなくなっている。少なくとも、彼ら人間からすればその通りだった。相手の領域で、圧倒的戦力を持つ者に喧嘩を売ってしまったのだから、当然か。

長老は長く生きてきた中でも、人間の中で自分以上に長生きしているものを知らない。ゆえに、彼には最年長としての矜持があった。自身よりも若いものを導く、それに従い、彼は長らく人々をまとめてきた。

だからこそ、彼は自身で責を背負い妖怪に頭を下げていた。それが、みな先の頭に立つ者としての責務と考えていたからだ。

ただ謝罪を受け取る妖怪、ウカノとしてはどうでもいいことだった。白色を倒されたことも、勝手に作物を食べられたことも、自身に得物を向けられたことも、人間と違い果てしない時を生きてきた彼女にしてみれば、これらのことは取るに足らないことだと感じていたのだ。白色は死んだわけではないし、作物を少し盗られたところで自身にさしたる痛痒はない。そして人間に攻撃されたところで、毛ほどの傷も受けることはないのだ。

そもそも、この大所帯で移動し食物を食らった理由の所在を聞きただけで、ウカノに人間を攻撃する意思はない。そして既に理由は聞いていたので、『まあいいか』程度に考えていた。

式神を大量放出したのも、身の程を知らない者に立場を理解させようとしただけのことだった。その効果は覲面だったが、ウカノにと

つては予想以上の成果を見せる。

困ったなど、土下座する老人を前にウカノは思案していたが、急に顔をあげると老人に向かってこう言った。

「いいや」

「は？」

「ここにあるものは、好きに食べていつて構わない。ただし、その後であの山の頂上まで来い。別に全員じゃなくていいぞ、お前達のうちの代表者だけでもな。じゃあな」

「……………え、あの！？」

人々の前で彼女は自分の住む山の頂上を指差し、そして来た時同様そこに向かって空へと飛び上がった。同時に、人々を囲んでいた妖怪たちは次々にうすぺらい物に変わり、彼女の袖へと出てきた時と同じようにごぼごぼと吸い込まれてゆく。

人々はその様を呆然と眺め、長老が我に返り声を上げた時には既に妖怪の姿は見えなくなっていた。

「ただいまー」

「あ、おかえりなさい、おかあさん。はんばあぐ、できたの」

「だから帰って来た。いい匂いだな、早速食べるか」

「うん！」

食べ物の妖怪（後書き）

こんな飛び飛びでいいのかな。でもだらだらやっても飽きるのだから、このペースで行きますけど。

食べ物の神様（前書き）

さして重要でも無いような気がするので、さっくりやっていきたいと思います。結構こちらも忙しくなってきましたので、更新亀になるかも知れません。

ご意見等もよろしければご遠慮なくどうぞ。がくぶるしながら待っています。

食べ物の神様

残された人々はしばらく呆然としていたが、やがてぼそぼそと相談し始めた。ぼそぼそこっそりする必要なものだが、彼らの戸惑いを示しているといえよう。話し合いはなかなかまとまらず、食物を前に手を出せない状況が続く。それが白い妖怪の残していった多大な影響だった。『食べても構わない』と言われても、どうしても警戒が先に立ってしまうほどの力を示していたのだ。

しかし、十数分ただただ話し合っていた彼らも、結局色とりどりの食物で腹を満たすことになる。

『お腹すいた』。小さな子供の一言が、彼らの我慢を解いた。そう、恐れでなかなか手を出せなかったものの、彼らも我慢をしていたのだ。三十二人が固まり、そろそろとたくさん生った赤い実へと手を伸ばす。もぎ取り、みながゆっくりと食べ始め、それはだんだんと速くなっていった。

「こんな美味しいものは食べたことがない」

実を食べた人々の感想は、その一言に尽きる。

その実の元々の味もさることながら、彼らの知らない、未来の技術で培われた作物。さらにウカノの神気で育ったものが、美味しくないわけではない。

その上、食べれば食べた端から失っていた体力が戻り、それとともに元気をも取り戻していく。病人に食べさせれば、その状態もみるみる良くなってゆく。

小さいなれど、それはまさに奇跡だった。ウカノ自身は、デジタル思考ゆえに自分の神気の本質には気づいていなかったが、神とは元来人にとって奇跡を起こすものである。その力に、理屈は存在しない。

一度食べてからは、彼らの行動は早かった。他の実にも手を伸ばし、子供や病人、体力の少ないものから順番に食べさせていった。むろん、この畑には全員がたらふく食べてもまだ余りある作物が実っている。この時代の人間が小食であることもあるが、それぞれの実が丸々と肥えていたということもある。まさに、神気恐るべし。

三十二人、全員が腹を膨らまし、満足した頃、新たな話が持ち上がる。

自分達に食べ物を恵んだ白い妖怪のことである。妖怪が畑を、それ自分達ですら不可能なほど整然としたこれらを、作ることが出来るだろうか？

そもそも、彼女は妖怪なのか。そんな話まで出る始末である。しかし、そう思うのも無理はないかもしれない。彼らにとって、妖怪とは人間に危害を加えるものである。長老が頭を下げたのも、本当なら無駄に近かった。話の通じる者と判断した上での、苦肉の策だったのだ。

だが、長老が頭を下げた結果はこうして食物を全員が満腹になるほど恵まれただけではなく、その食物で病人たちもみるみる元気を取り戻している。

そして刃を向けられても、圧倒的戦力を持っていても、彼女は人間に敵意を向けなかった。むしろ、助けている。

さて、次に話しの中心になったのは、誰が山の頂上に行くかという話だった。

既に長老とテケが行くことは決定していると言っている。あとは一人か二人、山道で長老あるいはテケのサポートをする者の選抜である。

ウカノのイメージが妖怪のままであったならば、誰も立候補しなかったであろうし、そもそも罨と判断し山に登ろうとすらしなかっただろう。

だが彼らは、もらった恩を裏切るほど礼儀知らずではなかった。そして、ある意味自然に対し信心深くもあった。見たこともない畑を営み、慈悲深く多くの食物を恵んだウカノを通して、何かを見ていたのかもしれない。

自分が、いやいや自分がとなかなか決まらず、結局力の強い者を長老が選ぶことになり、三十人の中でも特に屈強な男一人が選ばれた。

長老にテケ、一人の男は、残る二十九人に手を振り白い少女の指し示した山へと足を向けた。

山の麓には、例の仮面をつけた二人の三尾の少女が待っていた。二人の姿は全く同じで、そして先刻見た者達とも同一であった。

「「こちらです」」

声をそろえて簡潔にそれだけ言うと、二人は歩き出す。三人が慌ててついていくと、少女達の歩いていく先には綺麗に舗装された石段があった。二人は淡々とそれを登ってゆく。三人もそれに黙ってついて行きながら、直にそのうちの一人、テケが沈黙に耐え切れず口を開いた。

「あ、あの」

「何か？」

振り返りもせず足も止めず、平淡な声で即座に返され少し気おされながらも、テケは続ける。

「あの、あそこの番をしてらした、女の子を、あの、私、やつつけちゃったんですけど…」

畑を守っていたらしい少女と、前に行く二人、ひいては頂上で待つ白い少女が無関係とは到底思えない。しかしその畑にいた少女を、テケは攻撃して消してしまった。つまり、率直に言えばテケは彼女達の仲間を殺してしまったのだ。先に攻撃されたとはいえ、それはこちらから相手の領域に入り、増してやその物を盗ってしまったからだ。

非はこちらにあるのではと、少なくともテケはそう思っていた。そのことについて、何か咎めがあるのではないかと心配していたのだ。しかし、二人は相変わらず薄っぺらい声で返答した。

「はい。しかし、」

「それが何か？」

「え、でも、彼女はあなた達の仲間ではないのですか？」

「仲間…」

「私達に、個は存在しません」

「ですので、『仲間』という言葉が」

「定義付けられることはありません」

二人はテケや長老でも首をかしげるような事を交互に口にし、そしてなおも続ける。

「私達には死の概念はありません」

「ですので、私達を下したあなたに咎はありません」

「そ、そうなんですか…。あなたたちは、いったい…」

「私達は」

「式神」

「ウカノ様と紅花様に使っていただいています、道具です」

「えと…」

「着きました」

「こちらです」

テケが返答に窮していると、二人はテケが何かを言う前にそう言った。気づけば、上が見えないほど続いていたはずの石段は終わっていた。

そして頂上にやって来て、三人は幾度目かになる驚愕を表情に表した。

山の頂上にあつたのは広い平地で、地肌はあまり見えずふわふわとした草が一面に植わっている。その草がないところにはちんまりとした畑が作られていた。

さらにその向こうには、これまた今まで見たことのないような建物が建っている。自分達の住まう竪穴式とは違い、地につかない造り

になっており、屋台骨も木材でしつかり細部まで作りこまれていた。そして、大きななど竪穴式住居とは及びもつかない。

『ここ』だと言われなければ、住まいとすら気づかないほどの隔たりがあった。

「おう、来たか。まあ上がれ。茶は――あつたつけ」

その大きな家の裏からすたと歩いてきたのは、テケ達、というより代表者を選んで遣せと言った白い少女だった。その肩に大きな瓢箪を引っ掛けているのが印象的と言える。

彼女は家の、入り口らしき場所へと歩いて行くと、からからとそこを開きテケや長老達に手を振り誘った。そして、ついつと中へと入っていく。

三人をここまで案内してきた二人の少女は、いつの間にか三人の後ろに立ち、その背中を静かに見つめている。

三人はその視線に押されながら、顔を見合わせてからぽっかりと開いた引き戸の向こうへと入っていった。

「こ、この度はたくさんの食物を恵んでいただきありがとうございます。みなも元氣を取り戻し、感謝の次第もございません」

「ああ、いいよ。そのことで話があるしな」

立派な造りの家の中を進み、連れてこられたのはこれまた立派なお座敷。そこで三人は真っ白な少女と向かい合い、落ち着かずになぞと出された飲み物にも口をつけられず、所在なげに周囲をきょろきょろと見回していた。

しかしいつまでもそうしているわけにもいかず、最初に長老が話を切り出した。

反対に、少女は自分の瓢箪を傾け、ふうと息をつくと長老に短く返す。

その言葉に、三人は身を引き締めた。そもそも、何の理由で呼ばれたのかが分からない。食物の対価か、はたまたその他の何か。渡せるモノといえ、ヒトしかない。彼らとしては、そんなことは無論避けたいところであるが。

少女はそんな心配などお構いなしに言葉を続けた。

「お前達は確か、安住の地を探しているのだったか」

「は、はい。しかし、三十二人も住むとなるとなかなか良い土地も見つけられず、見つけても既に住んでいる者達も居る場合がほとんどです。彼らもいっぱいいっぱいの状況、その近くに里を構えるわけにもいかず、またしばらく旅をして探すことになるでしょう」

何故そんなことを言うのか分からず、長老は内心首をかしげる。しかし、その後で続けられた少女の言葉に顎を落とした。

「ふーん。じゃ、下の畑を世話してみないか？ もちろん、獲れた収穫物はお前達のもんだ」

「……………は？」

「ん？ もちろん条件付だぞ。収穫された物の一部を、こっちに上納してくれ。まあ、俺がお前達を雇う、といった形だな。…この言い方じゃ難しいかね」

「ここに、住んでもよろしいのですか…？」

「住まなきゃ畑の面倒は見られんだろ…。三十二人が十分に住めるだけの土地はあると思うんだが」

「その、畑も、いただけるのですか…？」

「さっきも言った、条件付でだな。ああ…別に半分寄越せとか一割寄越せとか無理言ってるわけじゃないぞ。適当にくれりゃいい。俺としては、少々畑や田んぼを作りすぎて困ってたところだ。ただ貯蔵していても仕方ないし、お前達が消費してくれるんなら、それが一番いいのかもな」

『……………』

長老を含めた三人はぱかっと口を開き、まるで阿呆のように少女を見つめた。少女は怪訝そうにそれを見返していたがすぐに興味を失い、瓢箪を振ってその中身を口に流し込んだ。そしてもう一度三人へと視線を戻し、まだ呆けた顔をしているのを確認すると何かを言おうとした。

「何かまずいことでも…………」

『ありがとうございます…！』

「おお？」

それ故、突然声をそろえて頭を下げた三人に、少女の身体も少し引いてしまう。

三人が呆けていたのは当たり前、住み場所も、作物も、三十二人分

が一気に保証されたのだ。少女の言葉一つで、今の彼らの現状全てが救われたと言ってもいい。

すぐに頭で理解出来なかったのも、当然のことである。

しかもその両方をもらえる条件は、ただ収穫の一部を彼女達に供えるだけ。そもそも、言われずとも彼らならば自発的にやっているだろう。

人間に奇跡を起こす者、人は時にその者を『神』と言う。畏れ敬い、そして彼らにとって絶対なる者。

ウカノミタマは、彼らにとってまさにそんな存在だった。

絶対的な力を持ち、奇跡を起こし、彼らを救う者。そこに彼らが超上者の姿を見るのは必然といえよう。

未だ驚き高揚する頭で、甚だ興奮しながら彼らは山の上の屋敷を後にした。その前に幾度も頭を下げていく事を忘れずに。人は、強制されずとも自然に頭が下がるものである。彼らはまさにそれを体現していた。

これから、彼らは様々な理由で何度もこの場へとやって来る。

みながみな進んで歩を進め、人を代え、代を代え、何年何十年何百年となく、それでも絶え間なくやってくる事を、ウカノは知らなかった。

ウカノは、以前は人間であった彼女は、この時代の人間の信心深さを舐めていた。

なんか知らんが神様と呼ばれるようになっていた。処遇に困っていた田畑を、丁度やって来た人間達に提供しただけなんだが。イザナギ、お前って予知能力あったんだな。名前教えてなかったのに、あいつらいつの間にか『倉稻御魂』とか呼んでんだ。どういうことだし。

「どーしたの？ おかあさん」

「親友の偉大さを垣間見た」

「???」

食べ物の神様（後書き）

はいさつくり書きました。でも時間かかりました。どうしましょうこの板ばさみ。でも書くぜ、何でってまだ原作にからんでやしねえ。永琳一人だけとかさみしす。

そもそもの発端は狐（前書き）

入れておきたかった話。いえ、別に飛ばしてもいいんですけどね…
すわかな様に入るのは次回あたりになるでしょうか…。目下検討
中です、すみません。

そもそも発端は狐

人間が山の麓に住み始めて数年、わりかしうまくいっていると思う。

全ての田畑を渡すのは残念ながら彼らの数が少ないので出来なかったが、そこは今までどおり俺達や式神が世話をしている。俺もここしばらくはこの地に留まっていたので、新しい作物も増えていない。

彼らとはいえば、こまめに家にお供えに来てくれるし、最近はお祭り？も始めていた。ずんどこずんどこってわけじゃないけど、かなり原始的。俺や紅花も、酒を抱えて参加している。これも彼らが裕福になった証といえよう。願わくば、彼らが道に迷わないことを。あまり富んでしまえば、迷走し始めるのも人間といえよう。

さて、一番この場所にやってくるのはテケという少女だった。最初は式神に話にいっていらしいが、式神は困って俺の方に話を持ってきたのだ。聞くところによると、ぶっちゃけ強くして欲しいとのことだった。

何でも、元いた場所からここに来るまで二十人ほどの仲間が死んでいたらしい。テケ曰く、自身の未熟ゆえということだったが、はてどうだろう。

ただ、手ほどきをするということについては別に構わなかった。寿命の短い人間と違い、俺はそれほど日々をせかせかと生きていない。人一人鍛えるぐらいならばお安い御用だ。

見てみたところ、彼女には能力があった。おそらく、生まれ持ったセンスと霊力に加え、この能力のお陰で彼女は紅花の白色にも勝つたのだろう。

その能力は、『靈力を扱う程度の能力』。

非常に地味であることは否定は出来ない。ただ、彼女の靈力の扱いはなるほど気が狂いそうなほど繊細なものだった。大した訓練もしていないというのにこれなのだから、能力というものは本当に恐ろしい。

…最近では靈気じゃなくて靈力っていうんだな。俺もそうしよう。あれ。じゃあ神気や妖気、禍気もそうなのかな。まあいいか。

一応、テケには俺の知る体術や靈術（妖力式のことを靈力式に変換。実は結構簡単）を教えてみた。ただ、俺の式神を使うことは残念ながら出来なかったが。憑依式神も同様だ。どうやら適正が無いらしい。

しかし数年で、結界や式紙に関しては十分過ぎるほどになっただろう。弾幕も昔とは比べ物にならない。

俺はテケが屋敷の前で、無数の式紙を弾幕で撃ち落とそうとしているのをぼんやりと見ながら、ある事を思い出していた。

この地上に人間が出現し始めしばらく経った頃、俺は地獄へと顔を出しにいった。地獄は、前の人間が月に行き地上の人間が一度絶えてからは、その間全ての機能が凍結されていた。元々、人間のように思考レベルの高い者のために、イザナギが作った場所なのだ。虫や動物、恐竜などは基本的に自然の輪廻にまかせておけばいい。時折畜生道など介入することもあるが、放置が基本だ。

俺もイザナギがあそこを作った時に手伝いはしたが、転生システム

の補助と閻魔をスカウトして来たぐらいで、ほとんどの部分はイザナギが仕上げてしまった。

それでも一応俺が連れてきたという責任もあつたので、時折こうして顔を出している。

地獄は通常空間ではなく、黄泉へ魂が堕ちる時の受け皿ともいえるような役目がある。そこを経由し、人の魂は転生したり黄泉に落とされたりするわけだ。黄泉黄泉と言っているが、少なくともあれは死者の国ではない。今の使われ方は煉獄、と言った方がいいかもしれない。どれほどの重罪人であろうと、永遠に煉獄に縛られることは無く、いつかは転生の輪に乗ることになる。煉獄は生前の罪を償う場所、という認識が正しいだろう。

ちなみに天国とは天界をさすが、実際天界に送られる魂などはそうない。天人曰く、もうほとんど満員なのだそうだ。本当かどうか怪しいが。

さて、その時は俺は紅花も連れて地獄へと来ていた。

そしてすぐに川のほとりで二つの人影を見つける。普通ならばもつと奥に行くのだが、この時は普段とは様子が違っていた。

それもそのはず、片方は俺の連れてきた十人の閻魔の内の一人だったが、もう片方は本来ここにいないはずの、黒い髪を両側で縛っている少女だったのだ。彼女の応対をするためにここまで出てきていたのだろう。

「…アマテラス？」

俺が小さくその少女の名を呟くと、彼女はそれを耳ざとく聞きつけたらしい。目の前で話していたはずの閻魔を置き去りに、いつかのように光のような速度で俺の目の前までやって来た。そしてがばっ

と手を広げると俺に飛び掛ったのである。

「ウカノちゃん、生きてたんだね！ ひさしぶっ」

「勝手に殺すな」

アマテラスは、べしやりと前もって張っていた結界にぶつかるとずるずると落ちていく。昔と少しもテンションが変わっていやしない。もう少し落ち着いた性格になるまで、あと何億年かかることやら。

「いえ、本当に心配しましたよ。魂がいっしょいませんでしたので、大丈夫だとは思っていましたが…」

と、アマテラスと話していた閻魔がやって来てそう言った。中肉中背、どこにでもいそうな人間の外見な彼も実際は十人だけでここを運営している内の、立派な一人である。停止させる程度の能力を持っているのも彼なので、地獄を文字通り凍結していたのも彼なのだろう。ちなみに、人間上がりの閻魔だったりする。元から霊格は高かったが、今はまた随分と成長している気がする。

「まあ、実際俺も消し飛んだかと思ったださ。ずいぶん長い間地中で寝てたみたいだな」

結界張っていなかったら、化石になっていたかも知れん。おいおい洒落にならん。

「ねえねえウカノちゃん、その子、誰？」

もう回復したらしいアマテラスが、俺の後ろにいた紅花を指差してそう言った。紅花はというと、「ひっ」と言っただけ俺の後ろに隠れて

しまつ。どうやら、アマテラスのハイテンションはさすがの紅花も苦手らしい。

「俺の娘の紅花だ。ほら紅花、二人とも俺の友人だ。出てきて挨拶しなさい」

「は、はい。べ、べにばな、なの。よろしく、おねがいします…」

おずおずと俺の背中から出ると、小さく頭を下げる。すると今度は紅花に狙いを定めたらしく、きらりと目を光らせるとアマテラスの姿が霞んだ。

「かわいいいいい……!!」

「ぴぎゃ……!!」

俺の時のように、高速で紅花に飛び掛るとがっしりとその胸に抱え込んでしまった。紅花が驚きに悲鳴を上げても、お構いなしである。さらには腰の辺りに手を伸ばし、

「ふぎゃ……!!」

「もふもふもふ！ あゝ、ウカノちゃんのとそっくりだー！」

一心不乱に尻尾を触っている。前に尻尾には優しく触ってくれと言ったはずなのだが、長い時が経って欲求不満で箍が外れてしまったらしい。その表情は悦に入ってしまったっている。これではまるでこその変態ではないか。

紅花が半泣きになって俺に助けを求めてくるまで、俺の思考は半ば停止していた。

「お、おかあさん！ たすけて！ ひっぱるの、このおねーちゃん
すごくひっぱるの！ いたいのー！」

「おっと。アマテラスー、うちの娘をあんま苛めてくれるなよー」

「はぶっ」

ぺたりと紅花に式紙を一枚貼り付けると、逆に紅花に貼りついて
いたアマテラスがばしりと弾かれた。何も特別なものではなく、小型
の遮断結界だ。結界内の対象は紅花のみに設定しているものだが。
その隙に、紅花はまた俺の後ろにさっと隠れてしまった。
アマテラスといえば、今度は一瞬で復活すると俺の方に詰め寄っ
てきた。そしてこう言うのである。

「そ、そう言えば娘って！ 父親はどこか！ ウカノちゃんにチヨ
メチヨメした男は私がばぶっ」
オロカモノ

とりあえず叩いておくことにする。
アマテラスは放置することにして、俺は閻魔の方に彼女が何故ここ
にいるのか聞くことにした。

「そういえば、何を話していたんだ？ アマテラスがここにいるっ
てことは、上で何かあったのか？」

「いえ、何でも、霊格の高い魂が上の方に欲しいとか…。基準が高
すぎるせいで、候補がないのが現状でして、そのことを話してい
たのです」

「そうそう！ 天界はわりと怠け者が多いの！ で、働き手が欲し

いんだけど、霊格の高い者じゃないと上の人が納得してくれなくて…。あ！ウカノちゃんが来てくれたら…」

がばつと三度目の復活をしてきたアマテラスが、そうまくし立てるとりあえず、俺ぐらいの霊格が欲しいらしいが、少なくともまだ地上を離れる気は俺にはない。せめて現代の先の先ぐらいは見てみたいのだ。

「悪いが、地上を離れる気はないな。だがなあ…候補がないんだろ？ どうするんだ？」

「そうなんですよね…。今地上に生きている者達にも該当者はいないようですし…」

「ウカノちゃん！ 天界に來ないなら何とかして！ 何にも出来ないなら天界に來て！」

「無茶言つな馬鹿たれ」

詰め寄るアマテラスを押し止めながら、俺は胡乱な視線をアマテラスに向けた。結局のところ、こいつは俺に天界に來て欲しいだけなのではないだろうか。側にいれば尻尾触り放題的な感じで。と、ぐいぐいと服のすそが引つ張られ、振り向くと紅花が不安げな顔を向けている。

「おかあさん…どこか、いつちゃうの？」

「いやいや。どこにも行かないから、その顔は止めてくれ。アマテラスも、あんまり紅花を怯えさせてくれるな」

「うゝ…いつそ、百年後でも千年後でも万年後でもいいんだけど…」
相変わらずスケールのでかいことを、アマテラスが唸りながら言った。天界とやらは行ったことはないが、随分とスローライフなところらしい。しかし、現在の年代が詳しく分からないので俺も是とは言えなかった。

「万年…微妙なところだな。もう少し地上にいるかも知れんし。…待てよ？ 候補が無いなら、霊格を上げてやればいいじゃないか。それだけ時間があるなら、時間をかけても問題ないだろうしな」

ふと、そう思いついた。魂は基本的に、転生の度にほとんどの情報を初期化される。煉獄での魂の変質もそこでリセットされるわけだが、必要な情報を初期化させずに成長させればどうだろうか？

普通ならば魂は代を重ねる毎に汚染されるだろうが、しかしその問題は俺が保護術式を打ち込むことで解決できる。ついでに進化を促すものも加えてやれば完璧だろう。…そのぶん魂の選抜は気を使うことになるだろうが。

その話を話すと、閻魔も頷いて賛同した。

「それは、可能かもしれませんね。転生システム上の問題もあまりありませんし、確実に霊格の高い魂ができあがるでしょう。それも相当のものが」

「一度、煉獄に堕ちてもらった方がよさそうだな。その方が成長も早いだろう」

「そうですね…。確かに一度あそこは経験してもらった方がいいでしょう」

「なにになに！？ いい感じで話が進んでちゃったりしてるの！？」

「ああ。候補の魂は俺が探しておく。閻魔、決まったら連絡するかな、そっちでのことは頼むぞ？」

「分かりました。…それと私の名前は××ですよ、ウカノ様…。閻魔は十人いるんですから、混合してしまいます」

「言いくいんだよ、お前の名前…」

閻魔の名前を思い出したところで、同時に月にいる永琳のことを思い出す。正直閻魔の名前は、永琳の本名より難しいのだ。いちいち言ってられない。

「あ、あの、どうかしましたか？」

俺の呟きが聞こえたのか、式紙を全て撃ち落としたらしいテケが俺に声を掛けた。肩で息をついているが、しかし身に纏う霊力にはいささかの衰えも無かった。能力のお陰か、狂ったようなコントロールで最小限の霊力を使っているためだろう。俺はそんなテケに「なんでもない」と返そうとして、はたと思いつく。

テケは適任ではなからうか？ と。

テケの現在の霊格も他の人間よりかなり高い上に、能力持ちでもある。しかもその能力が『霊力を扱う程度の能力』なのだ。魂に直接関与するような能力では確かに無いが、少しは成長と保護にプラス

補正が得られるはずだ。何せ、霊力妖力は魂が出しているようなものののだし。

そう思い、テケに死後のことの提案をしてみると、あっさりと乗ってきてしまった。これには俺も少し焦る。何せ、最初は煉獄に堕ちるのだ。簡単に決めていいようなことではない。

が、テケは「修行です！」で押し切ってしまった。その目は決意に溢れ、意志を曲げないだろうことが簡単に見て取れた。

どうしてテケはこれほどにやる気なのか？ それは単純なことだが、彼女は力というものに対して少し貪欲なところがある。だからこそ死しても上を目指そうというのだろう。…俺と似ているとはあまり言いたくはない。何せ、彼女の方が何倍も純粹なのだから。

しかし、強くなって何を守ろうというのだろうか？ それは怖くて聞けなかった。

短い勧誘を終え、再び弾幕を飛ばし始めたテケを見ながら俺は式神を閻魔、××へと飛ばした。

彼女が死んだ時は、俺が魂を捕まえて式を打ち込んでから、閻魔に渡すことになるだろう。テケとは恐らくそれつきりになる。転生の際には記憶は消去されるためだ。一片が残ることもあるかも知れないが、しかし記憶があるとむしろ魂の成長の障害になる。幾度も、違う人格で人生を経験してもらわなければ困る。これは魂単位の修行であって、一人格の修行ではないのだ。一度の転生毎に少しずつ魂は違うものになっていくだろうが、それはそれだ。霊格上昇の証といえよう。

記憶が消去されることはテケに言っているのだが、テケはそれを当然と受け止めていた。違う自分になることなど、死ねば当たり前のことです、とはテケの言である。記憶の消去とは自己の消滅とも言

える。が、それを人の身でケロリと流してしまうテケは、なかなか末恐ろしい。

俺は、俺ならどうだろうと考えながら、テケが先よりずっと早い速度で式紙を撃ち落としていくのを眺めていた。

そもそも発端は狐（後書き）

ちなみに、幻想郷には出来ません。予定地は別の場所です。原作付近では、外から遊びに来てる的な感じになります。

たのもー！ どーね。（前書き）

こんな感じにしてみました。

キャノ子さん、どいう口調なのかさっぱり分かりません。似非原作風を目指して見ました。実は原作やったことないですけどね。

たのもー！どーね。

時の流れはとても早い。以前はそう感じなかったことも、人間と関わることになってそう思うようになった。ともすれば、いつの間にか屋敷に来る人間の顔ぶれが変わっていたり。前に来ていたのはどうしたのかと聞けば、十年前にもう逝きましたなど言われることなどざらにあるくらいだ。

テケも例外ではなく、あっさり逝ってしまった。とは言っても、テケのことは最期を看取ったのだが。彼女はなんと七十あたりまで生きていた。死ぬ寸前まで、とても元気な人間だと思っていたものだ。テケは妖怪に殺されたとか、事故にあったとかそういうことはなく、ただ寿命でゆっくりと死んでいった。

魂は生前の契約どおりに式を打ち閻魔のところに連れていったが、実はその後の推移は知らなかったりする。

テケの魂の行方が気になったのは、魂を閻魔のところに連れていつてから何千年も経ってからのこと。鉄器が広まり始めたらしいということを、小耳に挟んだ頃のことである。自分の薄情さに呆れながら、俺は魂を捜してみることにした。もちろん屋敷を空けるのはよろしくなかったので、分霊を使っただ。

分霊とはその言葉どおり俺を分けることだ。以前、俺が複数いればなどと馬鹿な事を考えて、実現させたのがこれだ。おそらく、全身霊体が出来からこそこんなことが出来るのだろつ。

俺の本体とは無論この身体そのものだが、俺の力の源はおそらく尻尾だと思っている。尻尾の増減、あるいは霊体化で、力も純粹に増減するためだ。ならば、尻尾を分けることが出来れば？ そう考え実行したのが、分霊だ。

分霊の『俺』は尻尾が本体だ。が、俺としての特性は俺とまるで同じ、同一の人格を持っている。…たまに、人格は同じだが性格が違うという摩訶不思議な個体が出ることもあるが、俺であることは変わらないのでスルーしている。

ちなみに、同じ人格が別個体に分かれたら喧嘩になる、とかいうことはない。それぞれの個体に優位性などはないが、元々俺自身が不和より融和を好むため、俺同士の仲も基本的に円満なものだ。

ところで、分霊はあくまで俺の尻尾を使っているため、最高でも分けられるのは俺自身を除いて八まで。その上、分ければ分けるほど減っていく尻尾の数に応じて、個々の能力も減退してゆく。それゆえ、本当ならば使いにくいものではある。しかし、そもそも尻尾九本が必要になる局面などそうないため、俺は頻繁に使っていたりする。

神道でいう分霊とは違う。『神霊は無限に分けることができる』とか『分霊しても神威は損なわれない』とか、冗談じゃない。分ければ減っていくのは当然だろう。神が全知全能だというのはあくまで人間視点の話だ。俺は精々千知千能がいいくらいである。

テケを捜すために使ったのは九本の内の六本だ。一本ずつに分け、総勢六人の俺である。三本の尻尾が残った俺は、分霊がテケの魂を見つけるまで狐の姿に戻り、縁側で丸まって日向ぼっこしていた。別にサボっているわけではない。大事なお留守番である。別に日差しが気持ちよくてまどろんでいるわけではないのだ。

「お母さん。あれ？ お母さん、お客さんなの…寝てるの？」

紅花が日当たりのよい縁側にやってくると、一匹の小さな白い狐が丸まって寝ていた。三本の尻尾を抱きこみ気持よさそうに眠っている。その狐より大きな、いつもの瓢箪が狐の側にごろりと転がっていた。紅花は母親から感じられる普段より小さい力に首をかしげ、そして得心がいったかのように頷いた。

「また、分霊しちゃってるの。どうしよう…困ったの」

紅花はウカノの分霊のことは知っていた。無論、分ければ分けるほど力が小さくなることもだ。今見えるのは三本の尻尾。六本も分けることはかなり珍しかった。

そして、今回来ている客人は麓の人間ではなかった。そもそも人間ならば紅花が応対すればいいことだ。

ウカノをわざわざ呼びに来たのは、今表で待っているのがウカノ同様神の一柱なためだ。

だが、こうして見に来てみればウカノは寝ている上に尻尾は三本だけ。この状態でも紅花が手も足も出ないほどに強いが、それでも小さな狐の姿を見ていると少し不安だった。紅花が狐の姿になると、赤い毛の四メートルほどの九尾の狐になるので、それと比べるとなおさらそう思えるのだ。

「むー。うん、私が相手をするの」

『相手』。突然ここに来た神曰く、信仰を力で奪いに来たとのことらしい。単身で来ていたが、あふれ出る力はまさに神であることを

物語る。ただ、その態度は何かのついでといった空気があった。まるで、この神、ウカノが取るに足らない存在であるかのように。表に戻ってきた紅花に、表で腕を組み待っていた女が不敵な笑みを浮かべながら言った。

「おや、またあんたなの。ここの神様にはいつになったら会えるのかな？」

「お母さんは今取り込み中なの。代わりに、お母さんの娘である私が相手をするの」

「ふーん？　なんだ、娘に軍神の相手を任せて逃げたの。ここの神はとんだ腰抜けだったわね！」

黒と赤の衣に身を包んだ軍神が顔をそらし、はつと鼻で笑う。その拍子に、背に負った大きな注連縄がぎしりと音をたてる。その注連縄からも、濃厚な力が放たれていた。

一方紅花は、見えすいた挑発だったが、深く考えることなくただウカノが悪く言われたことに激していた。

「むー！　お母さんの悪口を言うな！　お前なんか私がやつつけてやる！」

軽く挑発に乗った紅花を見て、軍神は肩をすくめて笑った。

「はつ。これだから子供の相手は大変ね。いいわよ、相手をしてあげる」

紅花側の陣地でありながら、いつの間にか主導権は握られていた。単純な駆け引きではあるが、経験が少なく、そもそも冷静さを保て

なかった紅花に勝ち目はない。その上、相手は幾多の神の間で生きてきた軍神であるので、なおさらだった。彼女の名のある軍神だったが、紅花はその神の事は知らなかった。大和の神の一柱、美しき女神八坂神奈子を。

ちなみに神奈子より紅花の方が年上である。

屋敷からしばらく遠くに行った、誰もいない草原の上空で二人の外出が向かい合っていた。片方は赤い尻尾を九本たなびかせ、敵意を露にして構えている。対する片方は腕を組み胸をそらし、その不動の体勢で赤い少女を見下ろすように構えていた。

一触即発の間、ひゅうと風が吹く。

その瞬間、紅花は軍神へと飛び掛っていた。

宙につくった平面結界を蹴り、その勢いのまま右手に拳を作り軍神へと迫る。紅花は本来ならば肉弾戦より、式神などを用いた間接戦闘のほうが得意なのだが、頭に血が昇っていた紅花はそのことすら一時的に忘れていた。

「ふん」

気のない吐息一つ、軍神は紅花の拳を左手で受け止めるともう片方の手で拳を作り、紅花へと振り下ろす。紅花と軍神の間の単純な力差は、ほぼない。しかし、接近戦の駆け引きも軍神の実力が紅花を上回っていた。

紅花は振り下ろされた右手を慌ててガードするが、その間に止められていた自分の右手の力が流され、軍神の左手があっさりと自由に

なった。

軍神の左手に一瞬で神力が収束し、その手のひらは超至近距離の紅花に向けられ、溜められた神力は一気に弾となって放たれる。だが紅花もさるもの、そのままその弾幕を喰らうことはなかった。神力の高まりと同時に、結界を張ったのだ。

ゴゴゴツ。鈍い音ともに紅花の急ごしらえで張った結界にぶつかり、しのぎを削る。しかし反射的に張った結界は構成が荒く、次々に放たれる神力の弾幕を前に少しずつ押されてゆく。軍神はその様を冷静に見つめていた。

「なかなか堅い防御ね。だけど、この程度で押されているようじゃ駄目よ」

軍神がそう呟くと同時に、弾幕が苛烈さを増す。きしりと結界が軋むのを察知した紅花は、今の結界の後ろにさらに数枚の結界を設置する。それと同時に、軋んでいた結界はガラスが割れるような音とともに崩壊してしまった。

紅花が使うものは妖力、それで張る結界は言うなれば妖術だ。ウカノのものほどではないが、紅花の張る結界も非常に強力なものである。しかし急遽張ったものである上に、止めているものは紅花の妖力と比べると、軍神の攻撃的な、濃度も濃いずっと強力な神力の弾幕である。強力であるはずの結界が、一分もたずに崩壊してしまうのも仕方がない。

後続の結界が弾幕を止めているのを見ながら、ほっと一息をつく紅花。しかし、その暇も与えず軍神は既に動いていた。

「どこを見ているの？」

「えっ」

その声が聞こえたのは、紅花の真後ろだった。ぞわりと嫌な予感に背をなめられ、慌てて紅花は振り向く。そこにいたのは、拳を固めた軍神だった。

弾幕がある方向に軍神がいる。そう認識してしまった紅花の失態である。ある程度ならば、弾幕など単純な代物はプログラム化された動きに任せ独りでに動かせる事を、紅花は知らなかった。

結果紅花は、背後からの軍神の直接攻撃と、集中が外れ一気に脆くなってしまった結界を突き破って来た弾幕に挟まれてしまう。

「はっ」

「ったー………っ!？」

軍神の拳は、思考が一瞬停止していた紅花の顔面に容赦なく入り、さらに拳の勢いで後ろへ飛ばされることも許されず間髪を入れずに弾幕が紅花の背中に激突した。激痛に一瞬意識が飛び、宙から墜落してゆく。

しかし、不幸中の幸いか紅花はすぐに意識を取り戻し、それとともに頭も冷えてきていた。

地面すれすれで落ちる身体を止めると、紅花はキツと上にいる軍神を見上げた。

軍神は紅花を追撃することなく、余裕の態度で紅花を見下ろす。

「口ほどにもないね。さつさと、そっちの神様を出してくれないと、話が進まないわ」

今度は紅花は反応せず、数十枚の式紙を取り出しばら撒いた。そして式紙は集合すると合計十一人の白色を形成する。

「いつけー！ーっ！」

紅花の号令とともに、白色は一斉に軍神へと突進する。それぞれがそれぞれの配置を補い、その動きはまるで一つの生物のごとく隙がない。白色は軍神には接触せず、一定距離をとりながら包囲すると弾幕を放った。

「へえ…。面白いことをするわね。でも、しょぼい、ちゃっちいわ」

軍神が手を振るといくつもの弾幕が軍神から放たれ、囲んでいた白色の弾幕を次々に撃ち落としていく。それだけに留まらず、勢いを失わない軍神の弾幕は白色達へと迫った。軍神の弾幕が相手では、紅花の白色も当たれば簡単に落とされるだろう。だが、紅花の狙いは他にあった。

「散！」

紅花の言霊とともに、白色の姿が一斉に元の数十枚の式紙に戻る。

「縛符！　なの！」

そして次の言霊に応じて、軍神を囲んでいた式紙群はいくつもの円環を作ると、一気に狭まり軍神を縛り上げる。

それを確認した紅花は空に飛び上がり、巨大な炎球を宙に作り出す

と捕らえた軍神へとぶん投げた。

普通の相手ならば、これは必勝のコンボと言えるだろう。だが、それはあくまで相手が完全に動けなくなっただけという前提の下で成り立つものである。

そう、紅花の放った炎球は、突如現れたこれまた巨大な円柱にかき消されてしまったのだ。

「やれやれ、確かに結構出来るみたいだけど、やっぱりまだまだ非力だね。この程度私を捕まえたと思っっているようじゃね」

柱の向こうにいたのは、再び腕を組み笑っている軍神だった。その身を縛っていたはずの円環上の式紙は、無残にも散り散りになり風に流されていつている。

「全然！ 通じてないのっ？」

「私も、いつまでも遊んでいる気はないのよ。用があるのはそっちの神なの、一気に終わらせてもらうわ」

驚きを露にする紅花に軍神は無情にそう告げ、空中にいくつもの柱を出現させた。その一つ一つが神具と言ってもいいほどの力を放っており、軍神の本気を切に物語っている。

軍神がそのままついと指を振ると、柱とは別に無数の弾幕が空を覆い紅花へと殺到した。さらにはそれに一瞬遅れていくつもの柱を轟と発射する。結果、紅花の視界は弾幕に阻まれ、いつの間にか周りを包囲していた柱には気づけなかった。

周囲の弾幕の陰から凄まじい速度で柱が飛び出し、逃げ場がないことをそこでようやく紅花に気づかせる。

紅花は、最後の手段と幾重もの球状の結界を張った。しかし、弾幕や、それをはるかに上回る柱を防げとは思えない。それを悟った紅花は、思わず自分の腕で身体を抱き締めていた。身を守ろうとする防衛本能のようなものだったが、この攻撃の前にはあまり意味のないことだろう。

紅花は、太い柱にすり潰されぐしゃぐしゃになった自分を一瞬幻視した。

ガガガガガッ

が、それが実現する直前に、いつかのように大きな瓢箪が縦横無尽に宙を走った。巨大な柱は、それに弾かれ弱弱しくひよるひよると地に落ちてゆく。そのあまりと言えばあまりの光景に、軍神の目が驚きに見開かれた。

強力な神具とも言える柱を、こうも簡単に撃墜するのは同じ神具ぐらいのもの。そしてそれを用いこんなことが出来るのは、紅花が知る中でもただ一人。

紅花と全く同じ姿の、真っ白い少女が紅花の隣にいた。尻尾は三本しかないが、尻尾が九本の紅花を大きく上回る力を放っている。背には先の瓢箪が、何事も無かったかのように背負われていた。その顔は相変わらずの無表情で、しかし鋭い眼差しで対面にいる軍神を見つめている。

「お、お母さん…」

紅花の口から思わず呆けた声が漏れた。

たのもー！ どーね。（後書き）

諏訪大社を攻める前に、腕ならしでもしていこうかとかあるんじゃないかと思って。地理的にそこそこ離れてるところは勘弁してください。狐の領域は京都のあたりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3229y/>

東方空狐道

2011年12月3日14時45分発行